

〔表紙〕

島津家國事執掌史料

齊彬公史

内証紀自嘉永二己酉年
至嘉永四辛亥年

十

〔扉に表紙の文字の外に、(紙数三十六枚)の記載あり〕

○

火中分

〔島津齊彬
芝江之草稿〕

極書ちらし候得共写候隙無之候間、其儘差上候、
御披見後御火中可被下候、

貴書相達致拝見候、不順之時候候得共、弥御安寧奉賀
候、然は先達仲江逢候儀、一寸申上、其後御文通不申
上、如何之都合ニ候哉と思召候処、〔正徳、鹿兒島諏訪神社神官〕
井上出雲守儀、爰
元江留置候儀、御別紙之通仲より申上、御驚入被成候

由、幸〔信順、八戸藩主〕南部罷出候間、御相談被成候処、先比奥平江小
子より委敷申遣候旨、南部申上候間、廿八日御退出よ
り南部御同道にて、〔江戸領地、中津藩中郎〕鐵砲洲江御出被成候処、小子より
奥平江遣置候書状も入御覽候由、全体同方より貴君江
御はなし申候ハ、是非引渡候様御はなし可有之存、
御はなし不申趣ニ御座候由、小子厚存念御大慶被成候
得共、引渡無之てはいつれ事済不申、其うへ貴君御迷
惑ニ可及訳ニ候ハ、証拠留置候ても尤ニ候得共、左
様之儀ニも無之、悪意は夫々及露頭、最早事済候様子
ニ御座候間、少しも早く引渡候様、左候得は貴君御都
合も御宜敷候間、何卒阿部〔正弘、老中〕之返事まち不申引渡候様可
致、呉々も以来之御都合存候ハ、何卒引渡候様、尤厚
小子存念ニ候間、罪之儀ハ一二段も軽く取計候様、貴
君よりも可被仰遣候、出雲心底尤之様ニ思召候得共、
加様之大事を押隠し取しつめ可申致候も、身分ニハ過
キ候所行と思召候由、又爰元江参候事も、小子ヲ後だ
てニ致候心底も可有之思召候由、貴君御存無之所ハ証
拠分明ニ候得共、何も此度之証拠人等ニ可及訳ニも無
之、其上最早御事済ニ相成候御様子申上候間、旁早く
引渡候ハ、貴君も御大慶之旨、勿論引渡候うへ、何

そ事六ヶ敷相成申候か、又当人之罪存外重く取計ニ相成候得ハ、夫こそ將曹初小子江表裏申述候訳ゆへ、其節ハ如何様敷敷申候ても宜敷、乍然決て左様之事ハ有間敷、貴君御請合被成候間、少しも早く引渡相成候様思召候由、且又木村仲之丞と申候もの、小子方江參候やニ仲より申上候よし、是又早メニ引渡候様、呉々も引渡相成候得ハ、不殘御事済候段、仲・平より細々申上候段、以早便被仰下候由、且又當時阿部日光留守〔申之〕ニも候ゆへ、同方返事延引可致思召候間、右早下不申引渡候様、夫ニて心済無之候ハ、貴君南部間阿部江ハ程よく可被仰候間、伏て承知仕候様、將又引渡候ハ、以後急度掛念之儀は無之、且又罪も軽く取計可申、小子好次第書面豊後・將曹・仲より小子江出候様可被仰遣間、呉々も此段承知仕候様、尤奥平・南部ニも被仰含御同意仕候由、奥・南よりも小子江可申遣候由、南方よりも申来候、折角御委曲被仰下候趣ニ付、得と拝見仕候得共、乍失礼少しも御同意難仕奉存候、小生存念左ニ申上候、

一万々被仰下候趣打返し致拜読候得共、根元此節之一件ハ御尊父君御所置之儀ニ付、最初より貴君江ハ事々不

申上候、然処此度井上事仲・平より委細申上候ニ付、御委しく被仰下候得共、乍不肖小子も〔この三字、朱で抹消〕一国之主〔朱でかこみ〕ニて日本之御先手も仕候身分、中々以龜忽之取計可仕様ハ無之候、第一阿部江は貴君・南部・本間より、井上引渡候事、阿部返事無之内引渡候共、御申ひらき可被成と被仰下候儀、如何之御存念ニ候哉、以之外之事ニ奉存候、全く貴君思召ニハ、一日も早く相済候得ハ可然との御事ニも可有之候得共、小子も不容易事柄ニ付、乍内々も阿部江申遣置候末、返事も相またず取計候事、決て相成不申訳合ニ御座候、いか程被仰下候共、於此儀承知不仕候、以来共か様之御龜忽之御取計無之様、屹度御断申上候、一体小子所存も有之儀ニ候得共、いづれ共阿部返事次第ニ可致候、此節之事一体貴君江は御相談不仕、此度御委敷被仰下候得共、貴君より被仰下候筋合ニ毛頭無之、仲・平より貴君江申上候共、被仰下ニ不及事ニ奉存候、小子見込ヲ以宜敷取計候間、以来決て被仰下間敷、おして被仰下候ても御返事仕間敷、且又奥平・南部熟慮も不致、軽々敷御同意仕候段如何之儀奉存候、同方江も屹度申遣候、木村事は參不申候事ニ付、仲より申来候得共、不參旨申遣置候、委

敷申上度候得共、貴君御か、り合無之儀、御相談も不致事ニ付、不申上候、此事不相濟内、万万一貴君江御難題等出候ハ、小子申開き可仕候、乍失礼小子政事向青天如白日心かけ居候間、此道之事も明白ニ致居、薩州 御国家御安全ニ相成候様存居候処、將曹はしめ如何之存念ニ候哉、不審之至御座候、近比過言申上恐入候得共、義理明白之事ニ付、失敬ヲモ不顧不聞如此御座候、恐惶謹言、

松 美濃守

齊溥（花押）

松 修理大夫様

○仲より差上候書面之写被下致披見候、

尚々、小子より井上儀貴君江申上候趣、仲江も申聞候由、仲より貴君江申上候趣、○右ハ如何之間違候哉、仲江ハ奥平・南部江ハ申遣候得共、貴君江ハ不申上段申聞置候処、全仲事承り違ニ可有之候得共、左様申上候事不審之至、不相濟事ニ御座候、小子此節之取計万一大隅様思召ニ違、小子江いか様御難題等被仰下候共、少しも不苦事ニ御座候、呉々も以來此一件被仰下間敷、小子よりも弥以不申上候、以上、

○ 暮春十九・二拾三兩度之貴書相達致拜見候、弥以御安寧奉賀候、然ハ霞類焼ニ付御見舞被仰下忝奉存候、当惑至極御座候乍非常之事ニ付、如何様共練合可仕相心得罷在候、早速普請も可致之処、本勤第一ニ御座候間江戸普請ハ少々延引仕候共、不苦存念ニ御座候、無拙引移も當時延引仕候、長崎も先々静謐、奉行相果候ニ付、新奉行早々參候事被存候、右貴答早々可申上之処、薩一件にて彼是以延引仕候、此節も大取込ニ付、荒々申上候、頓首拜、

五月廿八日

尚以、時候御自愛御專一奉存候、何分薩一件大入組にて当惑仕候、委曲南部迄貴君江差上候書類も遣申候、同方より相達可申候、折角被仰下候得共、小子方無拙都合も候間、何分被仰下候通ニも難仕奉恐入候、小子より申上候書付類と行違ニ相成申候、最早近々ニハ御返事可參存申候、何卒宜敷御工風被仰下候様奉願候、右南部江遣候て差上候書面ハ色々失敬のミ相認候段、御高免可被下候、乍然至此場只和らかのミニも不參事ニ御座候、当年類焼ニ付小子參府

御尋、先例矢張參府仕候、乍然近年之非常打つ、き候間、同しくハ參府延引も可願存候へとも、芝一件何分不安心ニ付、旁以色々練合、おして參府之心得ニ御座候、然し当夏異船入津候ハ、延引可仕儀も可有之候、左様御承知可被下候、芝一件も遠路行違多く、其上愚文にて事情不通之事不及是非候、乍然理之当然、小子愚意ニ及候丈、取計候心得ニ有之候、〔島津支彬〕〔奥平・島高・南部信順〕〔正徳〕〔時邊〕且又修理より鐵・南も同意、井上・木村早々引渡候様、小子へ申遣候旨、〔吉利久包〕仲江修理より申遣候間、最早色々申候事は小子一人ニ相成申候、乍然少しも頓着不仕候、修理事ハ以来弥以此一件ニハはなれ候様、表向嚴重申遣候、小子と薩州役人とせり合候方万事宜敷、乍平尋小子取計候事ハ正ニ付、是非共正勝邪之道理と奉存候、如例大乱書御海容可被下候、近来髭かぶれ致出来、筆取難渋仕候ニ付、別て大略申上候、以上、

宇和島賢公

平安貴答極密用御直披

福岡

○ 戌七月十三日薩州へ被遣候下書一の印

一筆申入候、秋暑之節、弥無事相勤致大慶候、然し井上〔阿部正弘、老中〕一件内々辰之口江伺置候処、此節模様相分申候、右ニ付早速引渡可申之処、乍内々此節辰ノ口返答趣不容易訳合有之、何分共只今井上引渡難申候、右返答之次第不外事ニ付申遣候ても可然哉ニも存候得共、一大事之儀ニ付、軽々敷以書中難申、何共其元家老之内〔島津久宝、島津久徳〕豊後・將曹間呼寄直談致度候得共、夫にてハ事々敷、此節柄相聞へ不可然、乍去書面ニは難申、万一間違候てハ以之外之珍事出来可致候間、右之位申候ては不分ニ可有之候得共、何分共小子參府之上、重役共其方共江直話之上取極可申候、其御家大切之場合ニ付、御内味之御都合は御六ヶ敷共、重役初誠忠ヲ存上候ハ、右之通屹度取計可申、万一疑心を生し彼は申立候ハ、〔島津義興〕大隅様御不為之儀必定ニ有之候、右を小子存ながら当座向、大隅様只御都合宜敷様ニ致置、其内何分不相濟御事御到来ニては、古近親之詮も無之、残念至極ニ有之候間、其元重役其方共存念ニは違可申候得共、不關右之段申達候、此上は其元重役共評議次第、否早々可承

候、右之段内々申度如此候、不一、

初秋十三日

美濃

吉利 伸との

伊集院平との

二伸、過日も其方共より申候ニは、万一辰ノ口返事致延引候ハ、いづれ之筋御もつれ立、事六ヶ敷相成候ハ、何分其方共手ニ不及段も致承知居候得共、前段之御都合ニ相成居候間、厚骨折左様之事ニ不致様出精無之候てハ不相濟場合有之候、当時からとかく事仰山ニ他方江不相聞事肝要ニ存候、且又奥平〔信順〕・南部儀先頃ハ井上事引渡可申旨申来候得共、猶又小子より追々申遣候事致承知、及熟慮候処、不容易事柄ニ付、当人忠邪ハともかくも、小子参府之上相談ニて取極可申候、夫迄ハ井上事不相渡候様、奥・南よりも申来候、右ニ付て只今井上指返し候ては、いか程内々ニ取計候共、世上風聞仰山ニ相成、大隅様御為不宜候間、右之事小子深く致心配申遣候事ニ有之候、天地神明も照覽之事、聊以小子私心ニ申遣候事ニ無之候、以上、

○ 追て薩州江遣候下書二之印

一筆申入候、残炎甚敷候得共、弥以無事珍重之至奉存候、然ハ井上出雲守事、辰ノ口江内々伺置候処、此節返答有之候、於小子当惑至極存候、其元共心配可致相察申候、辰ノ口内々返答之事ハ極事重き次第ニ付、書面ニハ難申、是非其元共江直話可致儀ながら、此節柄目立候事不宜、乍然極秘之儀、其元たりとも容易ニ難洩筋ニハ候へ共、極内相洩申候、

辰ノ口返事左之通

一内々申越候薩州之一条、段々致熟慮候所不容易事柄故、内々同列へも申談候処、何分井上所置ハ、乍内密も取極難及指図候事、

大意右之通有之候、

一猶又辰ノ口之存念極々秘、難洩候得とも、相包候ては、万一其元とも初、心得違之事有之候てハ不相濟儀ニ付、深秘迄申遣候間、必深秘ニ可相心得候事、
一藩士〔陸左衛門〕近藤初主罪之者、嚴重之咎相成、其外連座之面々、切腹杯申付候者不少趣、異却至極之儀、得と忠邪是非之処明白致候様ニも不相聞候処、多人数死刑申付、慘

刻之至、不行屈之儀ニ相聞江候、一体手元ニても追々見聞之次第有之、其外色々尋度事も有之候間、事ニ寄候てハ、參府後直ニ大隅江も可相尋、其時老年之大隅一向不存と申候てハ相済ましく、つまり同人不行屈ニハ無相違、表立被仰出候時は、一言之申訳有之間敷、其処折角気毒之儀ニ存候故、此上得と近親衆熟慮之末、程能所置有之儀肝要存候、右ハ洩兼候得共、別儀ヲ以申候事、此外色々之事有之候得とも、何分洩かたく大意如此有之、誠ニ以心配此事候、一体ハ最早大隅様江公辺より表向御沙汰も可有之処、最初小子より内々申上置候末ニ付、一往御ひ、かせ之由、此後御静謐ニ無之、切腹又ハ重き御咎之者共数人有之、御国中不穩候ハ、兼々小子より表向之御沙汰無之様奉願居候得とも、

く迄御世話申上居候得とも、此後之御取計方ニよりは、表向御沙汰有之候とも、至其節候てハ何分小子手ニ不及事ニ候間、只今之内、右之事其元とも初得と相心得万事取計候ハ、御無事欵と存候、御近親之事ニ付、再三御意見申上度存候、猶又奥平・南部江も重畳申合候事ニ候、右ニ付井上事如何可致存候処、此節奥平・南部より申来候ニハ、先頃ハ井上事引渡可然旨申述候へ共、得と及再考候処、何分不容易事ニ付、小子參府之上、直ニ三人談合之上取極可申候間、夫迄ハ井上事小子方江留置候様ニと申来候、且又小子考ニハ、極秘と申候ても、井上唯今返し候得ハ、世上風聞も有之、弥以手広之御咎メニ相聞、其上追々小子も御国元之儀、見聞之次第も有之、井上指返し又々御国中人気騒動ニも可及哉と存候事も有之、其外不穩事致出来候てハ、不可然候間、旁以辰ノ口よりも以後静謐ニ候得ハ可然との儀有之候間、当時小子急度井上事預置候方、御静謐万事御都合可然存候、猶參府之上、其元共とも直話可致、修理為筋ハさて置、大隅様御事極御大事之御事、其上疏人も參り居外国江之御聞江不可然、御国体ニも拘り候事故、深く重役初可申合事肝要存候、右

之条々極秘ヲ以如此候也、

初秋

美濃

豊後

將曹

二白、辰ノ口より洩候事、万一はつと致風説候てハ
 以之外之儀、誠ニ御同方とも深切之御心入を以、小
 子迄極秘御洩し之儀故、深秘ニ可致候、右之形行御
 申合次第、大隅様ニも申上不苦候、とかく御都合宜
 様可取計候、御内味御都合六ヶ敷候とも、かゝる場
 合ニ相成立候上ハ、重役初誠忠ヲつくし、御国家御
 平安取計可申事申迄も無之候得とも、重疊出精有之
 度、猶不審之事ハ何返ニても申遣候様存候、直話ニ
 候得ハいろく申度事候得共、何分筆紙ニ難申尽候、
 以上、

○

貴書相達拝見仕候、不順之時候候得共、弥御勇猛奉賀
 候、御着府義も無滞被仰上候由奉遙賀候、然ハ井上一
 条修理江も度々御密談被成候由、小子より仲・平江遣
 候書状も御内覽被成下候由、辰ノ口被申述、返事参り

候上ならでは不相渡と申候文面義ハ一時之謀計ニて候
 哉、修理・奥平・南部江も被仰合、只今之内井上江極
 ヲ密響候て切腹致候方可然両全かと思召候由、右之事
 共辰ノ口江ハ如何可存哉、御出被成御密談ニおよひ候
 処、是又御同意ニ被存候由、段々御委細被仰下候儀、
 深く忝奉存候、然ニ乍不肖小子此度之事、万々明白ニ
 取計居聊偽り無之、右仲・平江申遣候事信実之事ニテ
 有之候、右之事早々可申上之処、大入組ニ付無延引
 仕、当月初二早便差立、最早御承知可有之候、右ニテ
 万事相分可有之候間致省略候、少も偽り小子ニ無之候、
 木村事秘し候ハ偽リニ似候得共、將曹・平悪事存候者
 尽果候てハ、後日咎可申付手懸も無之、且又不容易事
 ニ付、深く秘し居候事ニ御座候、貴君御賢明之差図御
 同意可仕苦ニ候得共、何分御同意ニ難相成、辰ノ口も
 外ニ存念無之と申候得共、何分此節被仰下候趣ニテハ
 承知難仕奉存候、右愚意之趣左ニ奉申上候、
 一井上・木村之儀ハ先便秘書ニテ御承知之通ニ有之候、
 然ニ根元修理大夫無事ニ相済候得ハ、外ニ小子望も無
 之事ニ候得共、被仰下候通取計候事ハ至て安き事ニ御
 座候、一体井上事望ハ、修理此節之事ニ拘合不申趣致

明白、且又其内家督相濟候得ハ、外ニ望無之由、扱又
出国之罪重候ニ付薩州江差返し候様ニ相成候ハ、弥
以覚悟之儀有之候旨申居候間、弥以無事ニ相成、井上
一人ニ相成居候間、井上事返し候得ハ、弥以修理無別
条家督ニ可相成申聞候ハ、極有かたかり直様切腹仕
候事ニ御座候、無事ニ歸り候心得ニハ無之儀ハ相頭居
申候、然ニ薩州江井上事可相渡旨申遣置候以後切腹い
たし候ハ、先事濟候様ニも御座候得とも、薩州にて
ハいつれ井上罷歸り、いろく申立候てハ不相濟事有
之候ニ付、小子方ニおいて切腹致させ候様ニ相疑、夫
よりして是迄小子より色々申懸ケ居候返報ニ、井上事
ニ付色々か様之事ハ井上如何申居候哉杯、いろく難
題等申来候ハ、弥以事むつかしく可相成、其上仲江
も井上事急度預居候間、安心可致旨申候事も無ニ相成、
先等閑之申付方故、致切腹候様ニも相聞江十分ニも無
之、其上右用向取扱候家頼共江も、格別之忠臣ニ付留
置候旨申聞居、皆々感服仕候折柄、薩州表佞臣共ハ其
儘にて、忠臣之者ハ死非命候小子取計と存候ハ、小
子以来之政事向ニも相懸わり、且又右之儀ハ極秘し居
候得とも、自然と國中ニも警居候間、十分^{〔密カ〕}之所置致

不申候てハ人氣にも相拘、非常之節長崎表之御用等之
節、平日國中帰服仕居不申候てハ下知にも難從、井上
所置小子も不容易儀ニ有之候、然し軽重を論候得ハ、
臣たる者為君死候事当然之事ニ候へ共、元惡將曹・平
は其儘にて、忠臣計死候事如何可有之哉、且又木村事
も秘書ニ申上候通ニ有之、一人歸し候ハ、兩人共歸し
可申、右木村只今迄留置候趣意不相立申候て歸し候事
ハ不相成儀ニ付、是非とも將・平之事申遣、兩人も嚴
しく咎可申付候ハ、井上・木村歸し可申、薩州江懸
合候より外ニ無之、又小子家頼兩人程付添申付薩州江
歸し、出国之罪重く候得共、於小子取調候之訳合有之
候間、兩人とも留置候得共、最早万々御無事ニ相濟候
旨ニ付、兩人共指返し候間、重罪之者ニハ候得共、对
小子切腹被仰付候様、為念小子家来為見届兩人遣候旨
をも申付薩州江遣候、扱又右之儀ニ付てハ参府之上、
大隅守江小子より及直話候次第有之旨申遣候外無之、
左候て参府之上、將・平事咎是非申付候様ニ取計候心
得御座候、右之都合ニ相心得罷在候儀ニ付、いつれと
も過日早便を以申上候秘書得御覽候上、猶又辰ノ口江
御内話可有之、右御返事参り候上、いか様とも取計可

申候、折角厚御賢慮被仰下、是又辰ノ口江も違存無之旨被仰下候得共、何分承知難仕押て御同意仕候訳にも無之、不容易儀ニ付過日之貴答相待申候、万一其内ニ修理へ薩州より難題等出候ハ、小子申留可仕候、小子江ハいか程難題出候とも少しも頓着不仕候、老中江申出候とも不苦、老中江申出候ハ、將曹等之一件不殘申立候心得ニ御座候、近親之小子取計居候事を、老中江申出候儀ハ有ましく、右ヲ申出候重役初メ心得ニ候ハハ、小子も近親ヲ捨薩州秘密之事申立候ハ、極不容易事出来可致、右等之儀は薩州存念次第小子も応対可仕、兼々相決居候間、いか様之事有之候とも驚不申、近比過言申上恐入候得とも、一大事ニ付愚意之趣不聞如此御座候、恐惶謹言、

松 美濃守

五月廿八日

齊溥(花押)

伊 遠江守様

猶以、時候御自愛御專一奉存候、薩州一件色々御面倒之事申上恐入候、何分不容易儀と相成申候、仲江小子より申遣候辰ノ口云々一時之謀計と思召候儀、

呉々も残念之至御座候、小子每事明白ニ仕居候事ハ貴君にも兼々御承知可有之候処、一時之謀計と被仰下、誠ニ老中名をかり謀計可仕哉、小子信実不明故之儀ニ可有之恐懼之至、何分丹顔之仕合ニ御座候、一体此節之所置仕損候てハ、小子身分も立不申相心得罷在候間、猶又厚く御賢慮之程奉願候、仲・平より修理江申立候事、一ト通りハ当然之様にも候得共、内味ハ小子參府仕直話ニ相成候てハ以外六ヶ敷可有之、將曹・平無事にも相済聞しく存候より、是非とも早く引渡候様ニと申候事哉ニ存候、

一第一懸念仕候儀ハ、過日秘書指上、筒井披見之上、辰ノ口江御指出可被下旨申上候得共、右書面万一辰ノ口江御指出之前ニ修理江御見せ被成候ハ、御指留メ可申哉ニ奉存候、尤貴君へ重畳申上置候間、是非御指出とハ奉存候へとも、万一御控御口達計にて程よく被仰述候様之儀ニ御座候ては、小子も折角か程心勞仕候甲斐も無之儀ニ付、万一御控被成候ハ、早々辰ノ口江御内覧有之、否哉被仰下候様奉存候、過日之貴答如何可被仰下哉、たとひ辰ノ口御内話之趣被仰下候共、理ニ不当事ニ候ハ、再三御問合可申

上候心得ニ御座候、何分修理事ハ相濟候共、小子一人
人氣ニも響、不容易次第ニ罷成、不明之小子弥以
良策も無之候得共、人事を尽し天命をはからざる心
得ニ御座候、

一修理よりも井上・木村早々引渡候様申来候得とも、
別紙之通り返答仕候、奥平・南部江も別紙之通申遣
候、別て大乱毫御高免可被下候、以上、

松 美濃守

伊 遠江守様

極秘密用御直披

○^{〔昌高〕}奥平江遣候草稿、^{〔信順〕}南部江も同様ニ申遣候、御披
見後御火中可被下候、

去七日之尊書相達拜見仕候、不順之時候候得共、益御
安全奉恐賀候、然は井上引渡候様御委細被仰下承知仕
候、南部江も御相談も被遊候由、^{〔吉利久包〕}仲・平より修理江申
出候事も御承知之由、只今之都合ニ相成候ハ、^{〔伊集院〕}早く
引渡候方小子為ニも可然、留置候ては薩州と小子とい
ち立可申、其上^{〔悉〕}仲之進^{〔木村時造〕}とか申候者小子方江參候や、是

迎も早々引渡可申、とかく早く治り候様、且又辰ノ口^{〔阿部正弘〕}
江封之物小子より出居候得共、往返もひまとり可申候
間、とかく早く引渡候様、段々御委細被仰下、厚難有
奉存候得共、何共以奉恐入候得共、御同意難仕御座候、
此節被仰下候御事も無御余儀御事ニハ候得共、根元不
容易事柄ニ付、為後日阿部江も無摺申述置候末、いか
にも御内味之御都合宜敷候共、此度小子より辰ノ口江
申遣候返事無之内ニハ決て引渡中間敷、乍内々も辰ノ
口申上置、返事も不參内取計候事慮忽ニも相当り、小
子心底相濟不申候間、折角被仰下候得共承知難仕、思
召之程も奉恐入候得共、小子存念不聞奉申上候、不悪
御聞得可被下候、仲之丞と申候者ハ一向参り不申候、
万一ニ此事不相濟内ニ薩州より修理江難題等出候ハ、
小子きつと申ひらき可仕候、且又小子江薩州よりい
か程之難題来候共少も不苦、たとい薩州より老中江申
立候共、小子事々明白ニ取計居候間、少も心配之儀毛
頭無之候、為御安心申上候、呉々も被仰下候御事御同
意不仕段重々恐入候、大事之事柄ニ付おして御同意仕
候訳ニも無之勘弁仕候間不願恐奉申上候、恐惶謹言、

松 美濃守

〔奥平昌高〕
鐵砲洲大君

齊濟 (花押)

二白、時候御自愛御專一奉存候、右之事修理よりも申来候得共、右ハ同人より申越候訳柄ニ無之、最初より貴君・南部計江御相談申上居候事ニ付、以来決して修理よりハ此儀不申越様きつと申遣候間、左様御承知可被下候、以上、

○

旧冬十一日之貴書相達拜見仕候、春寒強候へとも、弥御安寧奉大賀候、然は薩一条都合宜敷内伺迄相濟、殊ニ別段之拝領物も相濟候旨、小一冊御明細御認被下得と拜見仕候、万事無残処御取計何共以御礼申上様も無之、大安心仕候、実ニ貴君御骨折御心配被下候様右之都合ニ相成、第一賢国皇方之為、次ニハ薩国之為無此上儀、貴君格別之御手際感服仕候、中々以小子出府仕居候ても右様平和ニハ参兼候儀ニ候処、段々御委しく被仰下恐惶仕候、聊小子違存も無之御取計ニ奉存候、如仰南部よりも申来候、何分共最早本願も子細も有之間敷候得共、猶又宜敷奉願候、延助事も被仰下承知仕候、同

〔安永、福岡藩御使〕

人よりも委細申越候、段々御懇命被仰付候由忝仕合奉

存候、其内帰国仕候ハ、万々承可申候、右一件ニ付ては、阿閩にも不一方御世話之御事と厚難有奉存候、御序ニ宜敷奉願候、万々御委細被仰下候ニ付、御礼旁委しく可申上之処、旧冬已来逆上今以十分ニ無之、何分執筆兼候得共、御厚配之御礼申上度、押て相認候間、別て草略大乱毫、偏御高免可被下候、右故年始之状ハ代筆申付候、其内快次第万々可申上、頓首拜、

正月六日

〔伊達城、宇和島藩主〕
宇和嶋賢公

〔黒田齊濟、福岡藩主〕
美濃守

二白、時下御自愛御專一奉存候、扱又同苗別宅一件段々御世話被下厚忝奉存候、〔津澤上屋敷〕柳原木の葉ハ御ゆつり被成候由、尤下地ハ御付置被成候旨、無残処御事奉存候、右之通ニ相成候得ハ、別て御内外共都合宜敷御座候、扱又旧冬至月迫人氣如何心配仕候処、國中一統無事ニ越年仕、平和ニ有之、無此上安心仕候、右も貴君段々御世話被下、在国仕候故ニて海山難有奉存候、乍序右も申上候、一是ハ至て小事ニ候得共、此節年頭之書状、親類共不残、右不快ニ付代筆申付候、〔藤室高敷〕木の葉江も代筆ニて遣

候間、貴君江も直書上不申趣ニ御含可被下候、然し右ハ相知候ても子細も無之候得共、一寸申上候、不相替好事之様子一笑之至ニ御座候、以上、

福岡

宇和嶋賢公

平安貴答極秘用御直披

小春念^{〔七〕}三・十一月七日兩度之貴書、同廿六日相達拝見仕候、向寒之節候得共、弥以御安寧奉賀候、然は追々

申上候事御承知被下、且又重役共書面も御一覽被下候由、右ニ付万端厚御汲取被下、^{〔阿闍江委曲御密話被下〕}阿闍江委曲御密話被下之處、阿闍ニも事ニ厚御心配被下、不快申立在国仕、

御手当向撫育筋、無油断申付候様との御事被仰下、誠以難有仕合奉存候、万事貴君御骨折、阿闍江被仰述方宜敷故、心願之通ニ相成候事、御礼筆紙難盡、右ニ付ては愚意之及候丈、御手当向撫育筋申付候心得ニ御座候、弥以來長く精力之及候限り、長崎御用向相勤候心底ニ御座候、重役共初一統無此上難有かり、人氣も宜敷何も差はまり相勤、此後長崎表非常之節相勤可申、

勇力百増仕、無此上難有次第ニ御座候、段々御委細被仰下忝奉存候、右御礼委敷申上度候得共、痛所も十分無之、其上逆上強、筆取仕兼、押て認候ニ付別て大乱書、愚文にて心底程、御礼も難認解、万事御推察可被下候、実ニ阿闍・貴君弊国之事情御憐察被下、厚御骨折被下候事、感涙之至御座候、小子心底は貴君御承知之御事ニ付、右御礼等之事ハ宜敷様、阿闍江御序ニ被仰上可被下候、且又御別紙之趣一々承知仕候、内外不一方御心配被下候故、何方も無事ニ相濟、何共御礼申上様も無之仕合御座候、扱又右在国ニ付、追て御手伝等之事迄内密阿闍江御尋之処云々被仰下、無残所御事紙墨ニ難申尽候、明日大早差立候ニ付、不取敢右御礼申上度如此御座候、其内万々可申候、^{〔上威力〕}恐惶謹言、

松 美濃守

十二月三日

齊溥(花押)

伊 遠江守様

二白、時候御自愛御專一奉存候、扱又重役共書面不差置入電覽候処、御委細被仰下早々申達候処、何も恐入難有かり申候、御礼宜敷申上候様申出候、当年出国之儀中々以不容易儀之処、貴君ならで余人之出

来可仕儀ニ無之候、扱又小子事ハ大安心仕候得共、
 薩一件如何之光景ニ候哉、昨夜常之飛脚着、〔安永〕延助も
 着罷出事々申上候由、幸貴君御請合ニ付、小子出府
 も同様之事、御骨折ハ奉恐入候得共、追々都合宜敷
 可有之、日々相考居申候、薩も其後先々無事之様子、
〔薄之〕替居候者も無事ニ御座候、〔井上正徳〕井一件も延助より御承知
 可被成、何共小子重て出府之上ならてハ難決候、夫
 迄ハ小子預り居候事ニ決断仕申候、右訳ハ極々重き
 事ニ付、延助江も不申聞事ニ御座候、委細申上度候
 得共、逆上強認兼候ニ付、草略之段御高免可被下候、
 以上、

遠江守様

美濃守

平安内秘用御直披

一兼々佐賀同意仕兼候長崎表御備向之儀ニ付、追々被仰
〔佐賀藩〕○
 出候御趣意も被為在候処、此節佐賀役人共より小子家
 来江、表向にて兼々被 仰出候通、内目御模様替へ致
 同意、伊王嶋ハ自身台場等築立可申候由、伊王島之儀

〔鍋島正、佐賀藩主〕、〔阿部正弘、老中〕
 ハ肥前守參府中ニ、阿闍江申上置候次第も有之候由ニ
 て、先々被 仰出通承知仕、於小子安心仕候、猶追々
 委細相談仕候上、御届も可仕儀ニ候得共、右之事ニ付
 阿闍ニも殊之外御心配之御儀ニ付、不取敢此段奉申上
 度、御序之節不差立被仰上可被下候、右申上度如此御
 座候、恐惶謹言

松 美濃守

九月廿八日

齊漣(花押)

伊 遠江守様

去七日之貴書、同廿三日相達致拜見候、冷氣之節候得
 共、弥御安祥奉賀候、然は領分度々之天災ニ付、当年
 參府之云々申上候処、厚御汲取被下候得共、薩州一件
 も甚御痛心被成候間、無御扱〔阿部正弘〕阿闍江内密被仰上、御対
 話之趣、御別紙御委細被仰下、篤と拜見仕候、阿闍よ
 り御内話之儀、御尤至極奉存候、又貴君思召も無御扱
 御事にて厚承知仕候、右ニ付早々出府可致之処、追々
 申上候通、弊国人気ニ付、是又不容易儀候間、一存ニ
 て取極候義も無之候間、貴書并阿闍御対御書面、

内秘重役共江も拜見申付、如何相心得可然哉之旨、得と尽評議申出候様申付候処、別紙之通申出候、是又実情無相違事にて、何分勤弁も付兼、重き受持御用〔長崎警備〕ニも相響、当惑之至御座候、右重役共請合不申候てハ何分をして出府仕候ハ、如何之変事難計、左候ては弥以奉対

上恐入候次第奉存候、乍然薩州一件も御国体ニも拘候儀ニ付、打返勤弁仕候処、外ニ致方も無之候ニ付、直ニ右之事情重役共より申出候書面之儘、貴君江差上申候、右之内ニハ重役共も何卒参府ニ相成候様ニと存候ニ付、表向 公迎〔江カ〕より何とか右参府御断申上居候得共、別段之御用向にて参府仕候様被 仰出候得ハ、國中江も相分、人氣ニも障候事無之旨等之事も候得共、右ハ不容易事柄にて、とても右様之事ハ難相成筋ニ奉存候間、右等之儀省候て可入御覽哉共奉存候得共、右ハ全小子迄申出候書面ニ付、相省候てハ事情も御分兼、其上折角乍不及被仰下候儀深く重役共心配仕候事ニ付其儘にて差上候間、得と御考之上、阿闍江宜敷被仰上可被下候、右之仕儀ニ相成候間、如何相心得可然哉、不肖之小生難洩至極御憐察可被下候、何分共宜敷御教

示可被下候、取極候貴答ニも無之、阿闍被思召候処も恐入候得共、無抛此段以大早便申上候、例之愚文事情難了解、万事御賢慮可被下候、少々痛所有之筆取難洩仕候ニ付、別て乱毫御海容可被下候、恐惶謹言、

松 美濃守

九月廿八日

齊澤(花押)

伊 遠江守様

尚以、時候御自愛御專一奉存候、右重役共書面、貴君迄可差出旨申聞候処、折角被仰下候趣思召通ニも無之、其上阿闍より段々御懇篤ニ御内示有之候御事ニ付、是非共参府ニ仕度、再三申合候得共、何分右之人氣ニ付、重き受持御用ニも響、愈以不容易儀と勤弁仕候間、存念之趣小子迄申出候事候間、右書面其御地江差出候事、甚以奉恐入候旨段々委敷申出候得共、実情無相違儀ニ付、不苦と申聞置候、右も御含阿闍江宜敷被仰上可被下候、以上、

○

一筆啓上仕候、嚴寒之節候得共、弥以御安祥奉賀候、先便御礼ハ申上候得共、御骨折を以在国仕候ニ付、万

事役人共出精仕候様日々申談候得共、行届兼恐懼仕候、乍然及候丈ハ申付候事ニ御座候、薩州一件、其内吉左右可被仰下、日々相待居申候、貴君御骨折ニ付、小子ハ安心仕居申候、爰元日々陰雨多く、寒暖不順、風邪等大流行ニ御座候、表向ニ無之、実ニ此節眩暈仕、執筆難仕、寒中御尋問迄荒々以大乱書申上候、恐惶謹言、

十二月九日

福岡

宇和嶋賢公

二白、時候御自愛可被成、家来打留候真鶴進上仕候、御笑留可被下候、〔安永〕延助事罷出候由、荒々申越候、其後薩国も無事ニ御座候、最早退隠ニ相極可申候、近来又々同国之珍事承出候事も候得共、当夏末比之事ニて、右もきさし計ニて相済、重疊之事御座候、可恐事御座候得共、退隠ニさへ相成候ハ、申上ニも不及候、〔島津斉彬〕修理江も右之事ハ不申遣候、以上、

遠江 様

美濃

平安極内用御直披

一筆致啓上候、大暑之節御安寧奉賀候、去十二日、蘭

船入津無別条候、只今長崎より申来候、然処只今薩州より飛脚着仕候、〔吉判久包〕仲・平より別紙写之通申来候間、別紙之通申遣候、右日も書面ニて相分候間、致省略候得共、先々便申上候御返事參候上、一決断可致候、幸便ニ付形行一寸申上候、〔島津斉彬〕芝江ハ不申遣候、貴君より御内話ハ御勝手次第第二奉存候、只今飛脚立候付、如此御座候、頓首、

六月十三日

福岡拜

宇和嶋賢公

二白、時候御自愛可被成候、右別紙ハ極々急き写候間、大意計ハよめ兼可被成候、以上、

宇和嶋賢公

福岡

平安極密内御直披

○ 六月十二日之夜薩州より来写

乍恐又々書付を以奉申上候、

此内井上出雲守一条ニ付、乍恐以書付奉願上候趣御座候処、委細は 聞召通被成下誠ニ以難有仕合奉存候、乍然 江戸表御懸引之御訳も被為在候間、御往復之上

御引渡可被下旨承知仕候ニ付、早速修理大夫様江も右之趣申上越候処、最早奥平様〔島高〕・南部様〔信順〕も、右之一条ハ御存知様之御事ニテ、右御両所様とも篤と御示談被為在候所、此上何ぞ後日為御証拠被差留置、詮立之儀も不被為在、阿部様御方之儀ハ修理大夫様よりも、右等之訳筋被仰進可相成ニ付、阿部様御方御返答之御旨不被為待、何卒一日ニても早目御引渡被下候様、修理大夫様より先月三日御仕出之大早ニテ、其御方様江被仰進候筈候間、其段奉承知候様ニとの御事ニ候、先月二日之御内書、同廿六日到来仕候付、早速右之段奉願上度内評も仕候得共、余り差付奉願儀ハ暫差扣罷在、御往復之御日合旁勤弁仕、是迄差扣罷在候、然処此節之党類、最早無余残御取扱も相済、何も御平治罷成申候得ハ、出雲守儀ニ付ては、大隅守様〔島津宗興〕々被為在御案も、度々御尋之訳も有之、御役々緩怠之様ニ御沙汰も被為在、御答ニ込入、実ニ手足之置処も無御座、日夜心痛仕罷在仕合御座候、修理大夫様より被仰進候趣被遊御承知被下候ハ、何卒此内より奉申上置候通之御手続ニ被成下、御引渡御比合等之儀、為御知置被下候ハ、不事立様請取之者差上置申度奉存候、尤先度も

申上置候通將曹儀奥兼帯之勉役御座候付、最初より相もらし候儀も御座候得ハ、其後大隅守様前文ニ奉申上候通り御都合ニ付、極内豊後迄も無拠是迄之形行申聞之上、此御両方様ニテ御咎目向、吟味之儀ハ大目付御請持之事御座候間、出雲守御取扱振之儀、精々軽目之所吟味為仕候所、別紙之通り取調申出、尚又篤と示談仕、今一段軽目之所迄も吟味為仕候得共、士格之者他国江致欠落候てハ、いつれの筋士之格式ハ不被召放候てハ相済不申、殊ニ外之御格式ニも相拘申儀ニテ御座候得ハ、至極軽目之所ニテ、別紙通ニ御取扱相成候儀相違無御座、此上重き御取扱ハ逆も無御座、御受合奉申上候付、何卒早目御引渡被下候得ハ、修理大夫様御為筋ハ勿論、大隅守様御安慮も被為在、次ニハ重役方私共ニ至り、無此上安心仕、雖有仕合奉存候、為可被為在御安慮、別紙調書相写、極内奉入御覽候間、何卒旁被為思召訳、一日にても早目御引渡被成下候様、又々遮て奉伏願候事、

但別紙調書ハ、他所様江差上可申訳ニも無御座候得共、誠以不容易無御扱御筋合ニ御座候間、内実之形行奉入 御覽候間、御聴届被成下候ハ、

直ニ御下ケ被下候様、是又奉願上候、以上、

六月七日 伊集院 平

吉利 仲

上

○ 同断

井上出雲守

右出雲守事、不謂悪事相工候本近藤名字之隆左衛門外
〔山田清安と崎福彦〕
兩人江致隨身居候処、右三人重き御取扱被仰付候得ハ、

出雲守ニも身上恐敷相考候哉、去酉十二月宿元を出行
衛不相知旨、親類共遂披露候、就ては右通如何敷訳合
有之者候間、為捕方、御兵具方与力・足輕数与被差出
及御尋方、当分も式与被差出置候ニ付、若於他領致捕
方、御当地江引越候は、御取扱向何様被仰付可然哉、
致吟味候様致承知、先例見合候処、土他領江致欠落候
節ハ、書拔通身分被召放遠島七ヶ年被仰付儀ニ候得共、
此節出雲守儀ハ、大罪人江致隨身悪事之次第折々致密
会、剩前文通身上難遁時宜相成候処、致欠落候仕形、
身分不成合、重疊別て不届之至候得共、斬罪以上御咎

目被仰付程ニハ無之候付、先達て御取扱被仰付候本高
木名字之市助例同様相見得候間、右例通土被召放、一
世遠島被仰付可然哉、於其儀ハ評定所御用之節、親類
江内論之上、切腹ニ被仰付候儀、相当ニ相見へ候、乍
然出雲守儀ハ別段何か訳合之趣有之由ニ付、右通之御
咎目難被仰付、軽目之御取扱被仰付儀共候ハ、右一
世遠島より一段下ハ長キ遠島、右より一段下リハ拾ヶ
年遠島ニて候間、右両様之間御吟味之上、土被召放御
取扱被仰付度儀と致吟味、此段申出候、

六月 川上矢五大夫

○薩州江返事下書

去七日之書状、昨夜相達致披見候、大暑之節、弥無事
相勤珍重存候、然ハ井上一件先達申遣候処、早速芝江
〔高津寺〕
〔信州〕
〔昌高〕
〔昌高〕
〔昌高〕
申上、奥平・南部も承知之由、右ニ付芝より御委細其
方共ハ被仰下候云々其外万事委曲申越致承知候、小子
〔奥平昌高〕
江も芝・鐵砲洲・南部よりも申来候、然ニ芝江別紙之
通り申上置候ニ付、誠ニ草稿ニ候得共、其儘為見申候、
控無之候間、披見後無間違早々返し可申候、右ニ有之
候通ニ付致省略候、小子よりも早々可申遣存候得共、

右之次第ニ付、最早之近々阿部〔筋カ〕より返事可參候ニ付、其上ニて可申遣存居候事ニ候、其方共并芝御心配御尤ニ候得共、最早阿部返事も可參候間、何分共其上ニて可申遣候、延引氣之毒存候得共、小子返事不參内ニてハ、小子心底決て相濟不申候間、此段申遣候、外ニ子細も無之候間、荒々如此候、不一、

六月十三日

名

吉利 仲との

伊集院 平との

尚々、大目付調書迄も内々差越致一覽候間、返し申候、落手可致候、いつれ共辰〔阿部正弘〕ノ口返事次第、近々ニ

可申遣候、以上、

三白、別紙ニ有之候通り、仲より芝江申上候書付之

写、芝より被下候処、井上事小子より芝江申上候趣

ニ有之、仲江小子対面之節ハ、小子より芝江も不申

上段申候と存居候、仲事承り違かと存候、夫とも小

子申ちかひニ候哉、為念承申候、以上、

〔表紙〕

島津家國事執掌史料 齊彬公史
 内訂紀 自嘉永二己酉年 十一
 至嘉永四辛亥年

〔扉に表紙の文字の外に、(紙数三十二枚)の記載あり〕

○この文書は、「鹿兒島県史料 齊彬公史料」第一卷の第四一八号
 文書の嘉永三年十一月七日付島津齊彬書翰(合別紙一・二) 伊達
 宗城・南部信順宛)と同文重複により略す。

○この文書は、「鹿兒島県史料 齊彬公史料」第一卷の第四一八号
 文書中の別紙三(嘉永三年十一月七日付伊達宗城宛島津齊彬書
 翰)と同文重複により略す。

○この文書は、「鹿兒島県史料 齊彬公史料」第一卷の第四一九号
 文書の嘉永三年十一月二十七日付島津齊彬書翰(伊達宗城宛)と
 同文重複により略す。

演舌代 〔阿部正弘、老中〕
福開(遺案)

一御多擾中毎度御面倒之儀申上奉恐入候得共、薩家近日
 之模様左ニ陳奏仕り、且右に付尚又奉歎願候儀ニ御座
 候間、御勸考被成下度伏て奉希候、

一〔信傳〕南部より御教示之義申聞候後之様子ハ、此間粗申上置

候所、其後連々見聞相尽し、且望日薩摩守も相尋候所、
 折角御懇厚之御配慮にて、不表立御近親之場ヲ以、段
 ヲ御教示被成下候得ハ、無彼是厚忝奉感徹、御心添被
 下候通り、可相改義ニ当然に御座候処、一向可相改様
 子ハ無御座、却て大隅守申候には、被对小家御教示御
 座候様之義被仰聞方にて、国家にハいらさる御差函、

打捨置可申、去月廿七日屋敷中江及沙汰候書付ハ、矢
 張其儘にてよろしく杯と申居、政柄ハゆつり不申、何
 事も大隅守得差函候上ニて施行仕候様子、并ニ將曹・
 仲之輩も、中山之儀、事実之御達と相違、且稻留敷馬
 在〔島津久徳
・吉利久也〕、〔瑛球〕、〔國所広那彌子
在簡〕

の事杯、最前より主人江委曲不申聞、公義を奉偽欺
 候筋にも相成義も心附不申、薩家之為を思召、御深切
 之御教示、御厚情之程をも不考主従とも絶言語候事、
 沙汰之限りに御座候、如何計欵御憤怒可被成と深く恐
 怖の至奉存候得ハ、最早歎願申上候ハ弥恐入候事なか

ら、先日も申上候通り、近親内より心添仕候ては聞入不申のみならず、跡々弥不平を増し、為筋にハ聊も不相成ハ必定の義にて、手之下し様も無御座、所詮如何様教誡仕りたりとも、大隅守始心違〔得脱カ〕之家来共に候得は省悟可仕とも不相考、依て只々諸務之執權当主ニ歸し、隠居關係不仕様相成、將曹・仲・平之三人除去致候ハハ、諸政振起更張可仕、中山所置も存分手当出来候半、当时之儘にては家督隠居の前と相替る事無之、何も大隅守差図と申候て、將曹・仲申に任せ候外無御座候、扱薩摩守儀も

上にて厚き以御仁恕御取扱被成下、閣下御始も御深切ニ御配慮被下候間、是迄都合能家督も被 仰付、難有恐入奉存候ニ付、乍不及国政向、中山之所置杯も、粉骨精勵仕候て、竭忠誠度至願ニ候得共、一家右体にてハ手出しも不相成儀ニ付、隠居所存ニ為任置候外無御座、左様仕候得は、乍不本意国政・中山の儀、依然旧弊之儘可相成、折角之忠志も致方無御座仕合にて、兩端之所如何とも当惑至極、昼夜心痛仕居候趣尤千万、同情苦心難申尽、当惑仕候計にて考も付兼候間、在之儘を不殘 閣下へ申上、御賢慮相伺候外無御座と、與〔眞〕

高前中津藩主
平始申談仕候事ニ御座候、尤是迄屢奉歎願候てハ時々御教戒も被成下候所、兎角其儀遵守不仕候所へ、又々希ハ重々慚愧之至奉存候得とも、前条之趣御憐察被成下、御勘考之程奉希度、兼て書付にて申上置候薩摩守家督後御礼濟候上、御沙汰被成下度候条、返々御沙汰可被成下御含と奉存候所、段々近日之模様、前述之通りに付、尚熟察之上申合候処にてハ、最前隠居之義杯御心添被成下候時より、大隅守始將曹・仲杯ハ甚恐入候義ニ候得共、御同列方より御相談は不相成、専 閣下御一人にて御配慮被下、彼是御沙汰御座候様、御親類の場より御心添も被下候事と存上居、御あまへ申上候ゆへ、遵守恐怖之念も薄く、響合不申義と心付申候間、此度ハ何卒々々備前守殿より御渡被成下度、左様相成候ハ、実ニ御一統様にて被仰談と申儀、明了仕候間、如何計欵恐縮可奉存、響合も宜敷候半と重々難有仕合奉存候に付、備前守殿より御渡し相成候様願上候、兼て上置候ケ条、少々心付御座候て認改候義も御座候間、為念条々左ニ申上候、

備前守殿より薩摩守御留守居御呼出にて御渡可被下書付覚

一先年人数之義相達候以後も、中山之所置手厚〔琉球〕に行届候様にも不相聞得、且一昨冬英國船中山より致渡来候哉ニ相聞得候所、御届と事実相違之趣にも相聞候事、

一國政向も両三人被致偏任、上下情意不通達、下々不和之様子ニ相聞候事、

一故笑左衛門〔門所広輝、家老〕悴、当時稻留數馬と変名にて、相勤居候由及見聞候、右ハ先年美濃守江相達置候趣も有之者

ニ候得ハ、右様ニハ有之間布筈、如何の事存候事、

右之通及見聞候事候間、中山之儀國政向杯不宜儀ハ、是迄致来候処ニ不差構相改可被申、役人共の内にも

心得違之聞得も候間、心を付致人撰候様有之度候、尚万事近親衆とも可被申談事、

右之通御書取にて、備前守殿より御直ニ薩摩守御呼〔牧野忠雅〕

寄にて御渡か、留守居御呼出にて御渡可被成下、稻留之義ハ、昨夏美濃守より申越呈覽仕候山田一条之

書面之内にも御座候通、変名にて当時相勤居申、此事も被仰聞候ハ、内々不埒之事も、御同列方にて

御見聞御座候と申義相分、奉恐入候事と存申候間、相加置申候、実ニ只今之儘にて被差置候ては、薩家

之混乱計ニは無御座、中山之所置も弥不行届、不日如何様之義に可相至も難計、御国体に相響候様にも可相成哉と、深々恐入当惑仕候間、連々御賢察被成下度、委細參上にて申上度候得共、御法事にて其義も不相叶、段々薩摩守御暇も近寄候間、先々禿毫不文に候得共、大意相認希上置候間、可然御勤味可被下、廿三日頃にハ拜趨、万々可申上、乱書御不解と奉恐入候、以上、

○〔政憲、西九留守居〕
簡井書取

芝存寄野生へ申越候写

○この文書は、「鹿児島県史料 斉彬公史料」第一卷の第四一六号文書の嘉永三年（十月上旬力）島津斉彬意見書（簡井政憲等宛）と同文重複により略す。

○封書にて書付と有之候書面

○この文書は、「鹿児島県史料 斉彬公史料」第一卷の第四二二号文書中の別紙（嘉永三年十二月七日島津斉興宛幕府沙汰書）と同文重複により略す。

今朝御對話申上候義、心覚迄に書付仕所、相違之義も可有之哉、呈覽仕候間、尚御教示奉希候、

小子より申上

〔琉球〕
中山在留之英人差戻シ方之義、只今薩摩守へ委細御教

示も被成下候事故、帰国後追々中山へ申遣、尚亦厚唐

国へ頼遣候様可仕と奉存候、一体是迄大隅守代中も無

油断申聞、屢中山王よりも唐国へ相歎き頼遣候得共、

何分はかとり不申、尤此度尚御沙汰も有之、且代替之

場を以て、又々早々帰候様にと、唐国へ申遣候様可申

とハ奉存候、唐国より廣東英人へ申遣候処、急には行

届不申欵も難計、懸隔候ての懸合に候得ハ、互ニ事情

も迅速通兼候義と奉存候、彼是と致居候内に月日相立、

依然として不替姿にてハ恐入候義候得共、前述之通中

山より唐国へ懸合候事に候得ハ、如何とも致方も無之、

弥右之頼遣候儀はかとり不申事ニ見込候ハ、薩摩守

より御密話申上候所存之通、処置仕候ても不苦哉、右

等之所、尚又小子よりも伺呉候様相願候間、御伺申上

候、

御答

折角此度薩摩守代に相成、直ニ琉人を以云々英人へ為

懸合候も、十分にも無之様存候間、今一応厚唐国へ頼

遣、其上何分埒明き不申候得ハ、薩摩守所存之通被取

計宜敷候、

小子より又申上

左様候得ハ、帰国後中山へ申遣、かよふく唐国へ

為懸合候得とも、何分はかとり不申、英人可罷帰様

見留も付兼候間、出立前御密話申上、相伺候通り、か

よふく処置仕候ても宜敷哉と、尚亦相伺候上にて取

計可仕哉、

御答

右ハ伺越相成候ても、表立指図ハ相成兼候事にて、兼

て御委任も有之義、且此間御暇之節も相達候通り、何

れ之道被遊、御安心候様取計方肝要にて候得ハ、唐国

へ為懸合候得共はかとり兼候ハ、時宜次第内密薩摩

守へ相話候所存の通り、重々念入琉人ヲ以在留英人へ

為懸合候て不苦、尤不伺越臨機の取計有之候にも、聊

後日薩摩守不念にハ不相成事候間、万端厚被致熟慮、

後患無之様精々念入被取計、取締方等ハ弥嚴重に被相

心得候様、明年参府迄ニ落着付候ハ、別て手柄之儀

ニ存候、

○

暮春初三日来る麟兄内話之書取

○この文書は、「鹿児島県史料 斉彬公史料」第一巻の第四三三号文書の嘉永四年三月三日島津斉彬書翰（伊達宗城宛）と同文重複により略す。

○正月廿三日阿闍対話済

〔頭註〕○月廿四日辰より○使有之世日○願差出候事一
〔大隅守退隠本願差出候頃合之儀〕御催促被下候様、過る三日内々希候得共、早速五日御尋被成下、御疵にて

大に都合能御座候、其内委曲六日夕御答申上候通、当月廿日頃、国元往返御座候に付、其上治定可申上、事に依候ハ、来月ニも可相成と申上候所、其段御承知被下之旨被仰聞候由、尤差出候四五日前、尚可申出旨被仰聞候間、左様可致と奉存候得共、来月ニ越し候ては渡琉順季も後れ、其上色々横道より邪魔出候も難計、

国元往返ハ廿日頃にハ多分可參、此往返ハ一門出府之様子、何日頃可參との事申參候よしにて、おそくとも来月中迄にハ、一門之者參着可致事、其上別紙通り、先例も御座候間、願濟後御礼後れ候ても差支無之、色々延引いたし候も、兎角過日内密申上候知門之無量壽院出府仕候て、致周旋候様子見合候為に、延引申上候義と相聞得候得は、此廿日頃に尚又左之通御沙汰被成

〔阿部正弘、老中、福山藩主〕
〔頭註〕○月廿四日辰より○使有之世日○願差出候事一
〔大隅守退隠本願差出候頃合之儀〕御催促被下候様、過る三日内々希候得共、早速五日御尋被成下、御疵にて大に都合能御座候、其内委曲六日夕御答申上候通、当月廿日頃、国元往返御座候に付、其上治定可申上、事に依候ハ、来月ニも可相成と申上候所、其段御承知被下之旨被仰聞候由、尤差出候四五日前、尚可申出旨被仰聞候間、左様可致と奉存候得共、来月ニ越し候ては渡琉順季も後れ、其上色々横道より邪魔出候も難計、国元往返ハ廿日頃にハ多分可參、此往返ハ一門出府之様子、何日頃可參との事申參候よしにて、おそくとも来月中迄にハ、一門之者參着可致事、其上別紙通り、先例も御座候間、願濟後御礼後れ候ても差支無之、色々延引いたし候も、兎角過日内密申上候知門之無量壽院出府仕候て、致周旋候様子見合候為に、延引申上候義と相聞得候得は、此廿日頃に尚又左之通御沙汰被成

下度、

此間本願之儀尋候処、廿日頃にハ国元往返も有之候間、其上取極可被相届と申聞候所、最早可相分、往返有之候ハ、早速本願可被差出、事に寄来月に可相成やにも被申聞候所、左様にては都合不宜候間、御礼ハ延候ても願書之分は、当月中ニ本願可被差出候。

右正月廿四日阿闍より被致沙汰候答、

右様再度御沙汰無御座候ては、来月ニ越し可申、左様にては、来月初旬願濟とハ難相成と存候間、是非々々御鼎力にて、当月廿四日頃本願差出候様相成、来月朔日後に願濟と被成下度奉存候、右様にはこび不申ては、家督御礼、早御暇願ひ、渡海出来候時、是迄、二着、国、万事処置申付候儀不相叶、如何とも可為様無御座候事候間、右等之訳重々御勸味之末、前条之御催促尚又被成下度、呉々相願候事ニ御座候、

○家督濟早々左之通御沙汰被成下度
〔頭註〕○仲春初三家督隱居願之通相濟候事一
〔修理大夫此度家督後下国之上、尚又国元並中山之義所置も可被致、追々相達候儀も有之へく、渡海時合も有

之趣相聞候間、旁来月廿八日頃御暇之義被相願度、内願有之可然と存候、

〔島津寄興〕
一大隅守此度願之通隱居有之ニ付、以後は国政向並に中山之所置、滞留異人杯之儀、内外之諸務一切不被差構方可然、且隱居後は高輪屋布江転住可有之と存候、もし湯治被相願、下国之舍にも候ハ、四五年之所ハ左様無之方可然と存候間、右等之儀心付内々申達候事、

〔点来〕
右兩条、留守居江御沙汰被成下度奉存候、只今大隅所存ハ、修理大夫より先江下国いたし度程之心底に候得共、此義ハ筒井より申聞候て、子早春湯治御暇相願候合と相聞へ申候、大隅下国いたし候ハ、矢張是迄之姿にて、国政始琉国所置杯、更ニ手も下し候義不相成、弥増悪弊ハ可相生候間、右之通り御沙汰被成下度、四五年も過候ハ、改正更張相整候後相成候故、大隅下向仕候ても宜敷候得共、只今帰国いたし候ハ、実ニ是迄御配慮被成下候甲斐も無御座、修理大夫竭忠勤処置仕様も無御座と当惑仕居申候間、与篤御熟察可被下候、

○本願済款御礼申上候後、早速左之通御書付にて御

沙汰被成下度、

〔頭註〕「別紙、国政向も而三人へ致偏任、上下情悪不致通達、下々不和之様子に相聞候事」
一先年人数之儀相達候以後も、中山之所置手厚に行届候様にも不相聞得、且一昨冬英国船中山へ致渡来候哉に聞得候処、御届と事実相違之趣にも相聞候事、
〔得脱力〕
一国政向も下々及難義、人氣一和不致、不行届之趣も有之候事、

右之通見聞有之事候間、中山之義国政向杯不宜義ハ、是迄致来之所に不差構相改可被申、役人共之内にも、心得違之聞得も候間、心を付度人撰候様有之度、尚万事致相談候、
〔信願八戸藩主〕〔島津寄彬〕
〔黒田寄〕
南部遠江守・修理大夫へも御沙汰被成候間、以後松美濃守、兩人へも国政向の儀も被申談候間、其心得にて可入念美濃守へ可相伝、内々此段被仰聞候旨、御沙汰被成下度候、

尤も右ハ、是非々々御書付にて修理大夫江御渡奉願度、役人之義ハ多人数退候事にハ無御座、且被成御承知之通り、一昨冬より大臣始数人、嚴重咎方申付候義、世上にて彼是申居候得ハ、次て此上手荒ニ且目立候様の儀不仕、却て国辱を増し候訳にも相成候

間、將曹杯を帰国後何となく退け可然旨、修理・南部等も申談候間、隱便ニ可取計、其所ハ御安心にて被仰聞度、

右相願候通りにハ、御沙汰不被成下候てハ、一家是迄御承知被成下候通り之儀に付、万端修理大夫存念通り、政事向・中山之處置迄も、手下しハ決て不相成、既ニ末に申上候通り、旧冬玉川王子へ隠居後も中山之儀ハ不相替、大隅守にて取扱候様相願せ候て、願書差出候得ハ、其通り聞届候由、將曹より為申渡候由、又近日修理よりも大隅守江、退隠後も国政并に中山之義、定例之外ハ万端預指揮度と為相願置、右の義も致承知候旨申聞候由、如前述御座候得ハ、権柄ハはなさぬ存念と被察候間、逆も何そとハ御沙汰無御座候ては、修理大夫存寄ハ通り申間敷、種々内輪心痛御座候得共、先々右之儀にて御推察被下度候、南部遠江・奥平左衛門も同意にて申談、此段御察ニ奉申上候、

大隅守より以將曹玉川王子江為申渡候書付写

○この文書は、「鹿兒島県史料 斉彬公史料」第一巻の第一一七号文書の嘉永三年十二月十一日家老島津久徳申渡書（琉球王子玉川朝慎宛）と同文重複により略す。

○十一月廿六日、阿部へ申述る、

昨日修理大夫より以書付御願申上候儀ニ付、明日同人罷出候ハ、左之通位に御返答、御書取にて被成下候様、伏て奉希度、御口達計にてハ、罷歸申聞候処、親子之間柄、且兼々被遊御承知候通り之小内故、極々心痛当惑仕候ニ付、何卒々々御書取に奉希候、

書面歎話之趣、親子之情合にてハ尤にも候得共、兼々近親衆並に筒井へも申述候通、只今之内退隠無之てハ、如何様氣之毒なる事に可相成も難計、此義同列とも申合居候趣有之ニ付、此節内意書被差出、来正月申本願被差出候方と存候、

〔表紙〕

島津家國事執掌史料 齊彬公史
内訂紀 自嘉永二己酉年 十二
至嘉永四辛亥年

〔扉に表紙の文字の外に、(紙数十六枚)の記載あり〕

○甲囊書付

嘉永二酉三戌、薩藩士混雜之一件之書面類、不得
止令關係候間、枢要之分耳、後來為見合殘置もの
也、

裏書ニ云、書状三十通、仮綴六冊、

外ニ薩兄書通共四通、

○乙囊書付

嘉永三戌より同亥年迄、薩摩守齊彬殿家督之入組

候訳有之、近親衆預頼談兼々親交之中、不得止致
關係、首尾能相済候前後往復諸家文通數十通之内、
十分之一残置候、後來大家之面倒推知すへし、
裏書ニ云、書翰三十六通、仮綴八冊

○この文書は、「鹿児島県史料 斉彬公史料」第一巻の第四二一号
文書の嘉永三年十二月八日付島津斉彬書翰(伊達宗城宛)と同文
重複により略す。

倍御壮健奉大賀候、然は御委敷御返翰被成下奉拜見候、
嗚々御配意厚奉察候、昨夜〔伊達宗城〕龍土君へ出、段々御談申上
候、先達〔政憲〕て筒井老人へ鐵〔豊平昌西〕にて逢候節も、兎角不のみ込
故、決て仲申候処実ト御考無之、強く被仰候様ニと申、
能く合居、又一昨日筒井老人龍土君へ出候節、口上振
り能被仰、承知之趣、然処やハリ仲へ被申候て、筒井
方無甲斐次第、今少し強候得は宜敷候所、致方無と龍
土君御咄し、野生も同意ニ御座候へとも、仲兎角能く
小子・伊達君辰〔宗城〕へ参候事も氣つけ候間、筒井今明日之
内鐵へ被参、過日仲へ申候所、鐵・小子へ申聞承、其
後仲呼、鐵にて小子一同逢、筒井より委敷承候、一昨

〔黒田齊博〕年美濃へ辰より隠之御沙汰出候節、仲申候ニは、此度

之所は御延奉願候、〔珠玉謝志御奉啓〕琉人濟御進メ申上、御隠之義取計

候旨申候間、美濃より辰ノ口へ申上置候事、仲失念は

致間敷、且六月十一日小子へ辰ノ口より口達旁、只々

延し居候内、万一御内響出候ては、最早其時さハき候

ても致方無之儀、只今之内御自分奇御隠之御思召、辰

迄筒井へ被仰上候得は、御都合宜敷、是非共ニ申上候

様申聞候上、兎角申上兼候段、左候ハ、仲身をいとゑ

申上兼候哉と尋候心得、左候ハ、其儀ニは無之、御父

子様御中想、并奥向女中さハき立候事心配と申候ハ、

仲申候所も不存、御内響出候事、只今其所ニ無之、御

隠濟鐵・小子同道罷出被下、〔黒田齊博〕大隅様奥向へも篤ト申聞

候ハ、夫ニて安心可相成ト申候心得、又其外仲申振

りニ寄、〔黒田齊博〕筑前より参り居候〔敷敷カ〕氣味敷手紙出候心得、中々

愚存ニ和らかも致参候御事ニ御座候所、筒井やり損シ

候故、氣味敷ニ小子は呉々考、乍繰言一応は御進メ申

上候様申聞、承知不致候ハ、段々御手後レ御内響ニ

御取極メ宜敷御座候、然し今日鐵へ参、又存寄申上候

て、御存意候ハ、左様取計申候、是非共被相濟度儀ニ

越度、毎日何も手ニつき不申心配仕居候、乍去行届兼
候処、御思召奉恐入候、及候丈は相働キ申上候心得ニ
御座候、此段申上度、草々頓首、
霜月七日
尚以、前文申上候処、仲呼申候ては却て不宣
御思召候ハ、扣可申、乍然一度は申度、夫レ
ニて参り兼候ハ、又仲野生方え呼申候ても
宜敷、何分初メは鐵ニて野生一同逢不申候て
ハ、鐵へ之都合不宣候事ニ御座候、已上、
〔島津齊彬〕
〔南部信順、八戸藩主〕
市兵衛町拜
内用向可申上

候処、右之御祐筆申分にて、極六ヶ敷候得共、先達阿（阿部正弘、老中）閣より貴君江御内談之儀も有之候得共、尚又重役共存

念之趣申上置候、昨今ハ相達如何之御都合相成居可申哉も難計候得共、右之通阿閣御内話にて、出府仕兼

候事候得ハ、御祐筆位之申分にて出府可仕様も無之、

然ハ是非共願之趣、阿閣江御内慮伺候上、難相成とか、

表向出シ候様ニとか、御差図可有之、右にて出府之有

無相決候得ハ、聊申分無之儀ニ御座候、尤可相叶儀ニ

候ハ、表向願書出候様、阿閣御差図も可有之、又難

相叶儀候ハ、御内慮にて御さし返ニ相成候ハ、右

ヲ以決着可仕候、先便之次第貴答致承知候上ニテ候得

ハ、猶更宜敷候得共、次第ニ日詰ニ相成候間、行違之

儀も難計候得共、今日大早便差立、早々願書御内慮是

非共伺候様申遣候ニ付、万一過日之末阿閣より之御内

話如何ニ相成居候哉、極々不都合之事ニも至候ては以

之外ニ付、早々家来共貴君江罷出、打明御内々奉伺候

様申付候間、宜敷御取計可被下候、右申上度早々如此

御座候、恐惶謹言、

松 美濃守

十月十一日

齊溥（花押）

伊 遠江守様 平安極秘用御直披

尚以、時候御自愛御專一奉存候、只今夜五時過相成、
別て大煩毫御高免可被下候、以上、

別啓 平安極々秘用御直披

一本文申上候儀、何分共厚御汲取可相成儀候ハ、小子

家之儀ハ在国仕候事休息ニ無之、重き受持先祖より只

今迄無滞相勤居候事ニも候間、以別儀願之通被 仰出

候ハ、一國中無比上難有かり、弥以非常之節出精も

仕候事にて御座候、又御内慮伺にて難相叶出府仕候ハ

ハ、一國中も内実ハ難決可仕候得共、右ハ重役共より

いか様共可申論候得共、是又人氣宜と不宜とハ、長崎

非常之節之儀ニも相拘、不容易事ニ候得共、公辺御定

も可有之儀ニ付、何共難申上候、且又先達重役共より

之書面之内ニハ、公辺より何とか御品も付、出府被

仰出候得ハ無此上儀と認有之候得共、右ハとても難相

成御儀と勘弁仕候ニ付、御内慮伺にて否哉被仰付候得

ハ夫にて無異儀事御座候、万一難相叶出府仕候ハ、

此飛脚往返之上出立仕候間、十二月廿三四日比ニも着

可致哉、少しハ隙取可申候得共致方も無之候、乍幾返

可相叶事ニ候ハ、何卒以願之通被仰付候様、貴君御骨折呉々も奉願候、此節江戸詰方重役共、其外留守居共働様十分ニも存不申、其上留守居共御祐筆江罷越申述候趣、理解申方不行届ニも存候、相働ニて可相済儀ニ候得共、働方十分ニ無之、出府ニ相成候様之事共候ハ、得と相糺嚴重ニ、右掛役人共追て咎可申付存念御座候、

一先ハ阿闍御内示之事被仰下候貴答申上候儀、最早相達候て如何之御都合ニ相成居可申哉、右ニて尤之事と御引受、願之通り可相成とか、又ハとても難相成とか、御内話も相済居可申哉候得共、遠路行違候事不及是非候間、此節御内慮伺出候ハ、御不審も可有之候ニ付、其あたりハ貴君より宜敷御内話奉願候、

一万一阿闍より病名ニ候ハ、在国ニても可然被申候ハハ、病名ニ御届も出候様、家来江貴君より御差図可被下候、是迄諸事乍不及明白ニ相動来候処、此節虚病申立候事も恥入候事ニ付当惑仕候得共、為国民ニ候ハ、致方も無之候得共、可相成は実意貴候様仕度、重役共も違存無之候間、右之条々極秘貴君へ申上候間、宜敷御賢慮可被下候、

〔致書〕
一筒井江も参府御断之事ニ付委細申遣候処、段々委曲此節申来、遅くも参府可然哉と申来候、今日何分取込、右之返答仕兼候間、前如之趣意宜敷御伝声可被下候、燈下ニ認極々乱書、御推覧可被下候、頓首、

十月十一日

福岡

宇和島賢公

一筆致啓上候、冷氣相催候得共、弥御安寧奉賀候、然ハ此節側役福岡藩側役安永延助事出府申付候ニ付、兼々貴君江も相願置候薩州一件、小子事参府之儀願中ニて不相分候間、先ツ手後ニ不相成様、貴君江差上候書付類等持参申付、猶又口上も申合候、兼々薩州一件受持申付居候者ニ御座候、扱又先達辰ノ口より御内示之御事も御座候間、薩州一件取計方委細書面等、近親奥平左衛門尉〔信順、八戸藩主〕・南部遠江守江、同人持参申付、万事無滞相済候様申遣候、右ニ付辰ノ口江小子より封之物ニて、万事猶又厚宜敷奉願度旨、可申上存候得共、万事貴君江申上候間、度々封之物差出候事奉恐入候間、此節は別段封之物辰ノ口江差上不申候間、何分共宜敷被仰上可被下候、

右申上度如此御座候、恐惶謹言、

〔黒田齊博、福岡藩主〕
松美濃守

九月十九日

〔伊達素城、宇和島藩主〕
伊達江守様

齊博〔花押〕

尚以、本文之趣宜敷被仰上可被下候、且又薩州模様ニより、奥平・南部より不差立、辰ノ口江相願候次第も候ハ、私名代ニ貴君より辰ノ口江被仰上可被下候、何分万事御骨折可被下候、以上、

別啓 平安内用

本文認落候ニ付申上候、然ハ不快申立、在国仕候事ニ付、表向ハ実ニ不快ニ仕申候、最初より不快申立ニも可相成哉存候ニ付、秋より引込罷在、門外江ハ一度も出不申、其上痛所も御座候ニ付、旁以都合宜敷御座候、いつれ共米春迄引込罷在候間、外見万事聊不都合之事ハ無之候間、為御安心申上置候、以上、

同日

二伸、此節ハ鐵・南・芝江書状も認兼候間、御逢被成候ハ、宜敷奉願候、以上、

昨日は御返翰被成下候処、出掛にて貴答不申上恐入候、

御免可被下候、先以益御安康奉賀候、然ハ筑より参り居候手紙御披見被遊度旨奉謹承候、鐵へ申遣両三日内ニ御覽ニ奉入候、扱御別紙之趣甚奉恐入候、鐵へ相談仕候所、至極辰より出候得は誠ニ宜敷ト申居候、申上候所失念真平ニ御仁免可被下候、今日は弥芝御用召、大隅名代ニ野生登城仕候、大安心御同様ニ奉存候、用向耳、草々已上、

二月二日

尚、御自愛專一奉存候、以上、

〔信順、八戸藩主〕
南部拜

〔赤城、宇和島藩主〕
伊達尊大君

内用向

右嘉永四亥 家督濟

一筆致啓上候、弥御堅勝被成御勤仕珍重奉存候、先般從美濃守様被仰付置候井上出雲守儀ニ付、封物指上候処、御封物一通被成下難有頂戴仕候、且貴所様より之御返書去ル十九日相達、是以委細致拜見候、然処右一条ニ付、又々乍恐封二通指上申度奉存候得共、御都合を以御指上被下候儀とも、宜御取計被成下度御願申上

候、此内よりも度々申上越候通、出雲守儀ニ付てハ、一日ニても早目御引渡不被下候てハ、此御方様にて御都合向ニ相懸御指急之訳合御座候間、何卒右等之訳筋深御含置被下候て、何分早目御引渡相成候御都合向ニ運立候様、猶又宜御執成被下候様、偏ニ御頼申上候、右旁得御意度如此御座候、恐惶謹言、

六月廿三日

〔小納言頭取兼用取次〕
伊集院 平書判

〔久包、当番頭兼御用人御役〕
吉利 仲書判

〔福岡藩御役〕
安永延助様

一筆致啓上候、然ハ当春私事其御城内へ被為召、従美〔黒田吉徳、福岡藩主〕濃守様御直被仰付候御用向之儀ニ付、承知違之儀有之、何共奉恐入候、右ニ付てハ、別段伊集院平を以御断申上候得共、猶又貴所様より御都合を以宜御執成、御断被仰上被下候様御頼申上候、勿論修理大夫様御方江は巨細形行御断申上越候、右御頼申上度如是御座候、恐惶謹言、

六月廿三日

吉利 仲書判

安永延助様

一筆致啓上候、時分柄弥以御安康被成御勤仕珍重奉存候、然ハ吉利仲先度其御元通行仕候砌、極御内々美濃守様被為召、雖有御目見仕候節、重御用筋被仰付候内、修理大夫様江御懸合越之儀、全心得違仕、今更何とも驚人恐怖仕居候、尤修理大夫様江形行申上、御断被仰進候儀と奉存候得とも、夫にてハ結局事立方にては、当人も乍此上御都合向如何と心配奉恐入候故、何分無調法筋、貴所様迄私より御内話奉願候旨申出仕候間、以御機嫌可然様御取繕被仰上可被下儀奉願度、此段得御意候、恐々謹言、

六月廿三日

伊集院 平書判

〔福岡藩御役〕
吉永源八郎様

安永延助様

乍恐奉申上候、井上出雲守一条ニ付、再往恐入奉存候得共、先達て奉欺願趣御座候処、直様御返札頂戴仕誠ニ以難有奉存謹〔正弘、老中〕て奉拝見候、此程阿部様御方江被仰進置御訳合も奉承知罷在候上なから、余り不勘弁之様にて再重願上越、

其段ハ何とも奉恐入候、外ニ不被為在御子細、阿部様御方御返事被為在候ハ、直ニ御引渡被成下候段、此節猶又奉承知、誠ニ以難有仕合奉存候、

一 奥平様〔昌高〕・南部様〔信胤〕・修理大夫様御方よりも、阿部様御方

御返事不被為在候とも、御引渡相成候方可御宜との御事も被為在御承知様、右ニ付修理大夫様江御返答被仰

進候御書御下書迄も拝見被仰付、難有得と拝見仕候、

豊後・將曹江も極内拝見為仕候処、兩人なから何とも

奉恐入候、出雲守一卷ハ何分ニも存分一盃之取扱、〔島津久徳〕 渚

も出来不申訳合ハ、此内より追々奉申上置候通、不殘

大隅守様達御聴ニ不申候ては、筋々相当之御取扱出来

不申儀ハ勿論ニ御座候、又事実旁奉伺候得は、とかく

修理大夫様御名も出申訳ニ成立、尤悪意之者共謀計之

筋ニは相違無御座候、明白証拠も御座候へハ、万々一

大隅守様何様ニ欵被遊御引受、御疑念之御廉も被為在

候様とも成立候節は、如何様ニ御都合仕候ても、千々

詮立不申事ハ案中ニ御座候ニ付、爰之御都合計ニ昼夜

心配仕罷在申候事ニ付、早々不殘御取治相成候様呉々

も奉念願次第ニ御座候、是等計ニ乍恐くどふも為奉歎

願形行ニ御座候間、阿部様御方より御返答被為在候ハ

ハ、何卒早々ニ御指図被成下候様、猶又幾重ニも奉願上置候、若し阿部様御方御返事御延々ニも相成候御訳合も御座候得ハ、何処ニて欵御もつれ之廉ニ成立候半も奉恐入、右様品々心苦仕候儀も、偏ニ修理大夫様御為一筋ニ奉存訳合のミ之儀ニ御座候間、猶又委細之形行申上越ニて、修理大夫様御賢慮奉伺、何分取計も仕度内談仕候間、此段御内々奉申上置候、誠惶謹上、
修理大夫様江御返書被遣候御下書、難有拝見仕申候間奉返上候、

六月廿三日

伊集院 平

吉利 仲

上

以上四通ノ表封ニ云

伊 遠江守様

松 美濃守

平安極内用御直被

順聖公御事蹟并年譜

〔書帙〕

順聖公御事蹟并年譜 全

文久元年辛酉十二月十五日奉

旨起稿於下旬 季安撰

順聖公年譜

史臣某撰伊知地季安

〔表紙〕

順聖公年譜

公名齊彬、姓松平氏、初名忠方、小字邦丸、稱又三郎、迨大家家齊公召親加冠、例賜諱字、取更上名、叙從四位下、任侍從及兵庫頭、後歷任豐後守修理大夫、猶在二世子以廣大君蔭特蒙恩擢、任左近衛少將、至父告老、立襲封於薩隅二州日諸縣一郡、兼領琉球國、為薩摩守、叙從四位上、官進中將、本姓島津氏、賜松平、二十五世大信院殿三位中將老号榮翁、諱重豪公之曾孫、而大慈院殿正四位上中將老号溪山、諱齊宣公之適孫也、父三位宰相、老号金剛定院、諱齊興公、母彌姬、曰賢章夫人、松平氏、因州侯相模守治道君女也、

光格帝
文化七年庚午

三月二十八日夜、生於東武芝邸實前年己巳四月二十八日行婚禮、而其九月二十八

日共、則月未足、故告大家如本文云、国老鎌田典膳政興行三座射法、大父溪山公乃賜小字、称邦丸君、

八年辛未、年甫二歲實年三歲

三月十五日、始蓄生髮、

六月十四日、春光夫人薨于江戸、

九年壬申、年三歲實四歲

八月十五日、稟于月直閣老松平伊豆守、立為世子、

二十六日、齊興公為世子、求婚於一橋民部卿齊敦君、

齊敦君乃許妻以女英姬君、乃此日以稟月直閣老、

於是二十八日、大家命齊興公許如其所請、時世

子僅三歲、而姬君八歲、文化二年乙丑正月二十三日生、據此實八歲、一說生于四年丁卯、然為六歲云、未

知孰是

九月六日、公為世子、使川上東馬久封權為御番頭、

造朝獻

家齊公干鯛昆布各一箱、御樽一荷、以拜許婚恩、又

使御側役上村笑之丞行孝造西丸、獻儲君家慶公同

贊、拜恩亦如之、即日閣老牧野備前守忠精、西丸閣

老松平能登守乘保、各致公奉書皆答焉、

十一月四日、江戸大地震、

文化十年癸酉、世子年四歲實五歲

於是五月二十一日以御小納戸伊集院太郎右衛門俊德

・伴鐵之助為御抱守、恒侍左右以輔導焉、

十二年乙亥、英姬君年九歲十一說

十二月六日、一橋齊敦卿使從臣送英姬君來逗留於芝邸、

榮翁公乃招於高輪令以逗留、其所隨從如夫人微行、

十三年丙子、年七歲、

九月四日、民部卿德川齊敦卿薨、乃英姬君父也、法諡

曰嚴恭院殿參議從三位經眞明誼大居士、

十一月、世子患痘、十五日酒湯、

十四年丁丑、

三月二十八日、一橋大納言治濟卿後稱穆翁、或君此實臨芝

邸、乃大家家齊將軍及故參議齊敦公実父、而於英姬

君実祖父也、故催散榮一資其興云、

文化十五年戊寅、世子年九歲美十歲

二月十五日、以御使番知記録奉行木場次右衛門后改仙太夫

貞良、遷御小納戸頭取、行御抱守事、令以侍読焉、

五月四日改文化十五年為文政元年、

文政元年

十月十五日、伴鐵之助転江戶御留守居、

十一月三日、以御納戸奉行圖師崎源兵衛尚超、代之行御抱守事、

二年己卯、英姫君年十三歲或云十五、自嚮逗留五年于茲、

是歲閏四月四日命為既婦焉、

三年庚辰、世子年十一歲美十歲二歲

五月朔日、以御広鋪番頭長崎良右衛門義方為御抱

守、亦侍読焉、義方幼遊府学、夙有卓操、負笈受

業精里甲賀先生、迨卒業還、雖充教員、辭、求他

官、竟為掖官、拜此任云、

四年辛巳、世子年十二歲美十三歲

三月四日、齊興公召於前手親加冠、国老川上美濃久芳

侍理髮、世子乃獻公御折十二合・御樽三荷・御太刀

一腰・御馬一疋金馬、拜三元服恩、公亦賜御刀大賀之、

時名忠方忠久、称又三郎、初太祖得佛公之幼也、服於鶴

岡廟、乃易名字故今遵其旧例也、

四月二十八日、以御納戸奉行福崎助七季悖、行御抱

守事、恒令伴読以教輔焉、季悖幼遊府学、志操不群、

勉勵實踐、師東郷實乙学、示現劍、就田中綱談甲州

兵、声聞州里中外、望竟選此任云、

五月三日、長崎義方離侍中、遷高奉行、

八月十五日、圖師崎尚超転御小納戸頭取、肄業御用

取次事、以今井渚村安代之陞御小納戸、行御抱守事、

文政五年壬午、世子年十三歲美十四歲

二月十五日、世子招寶生太夫及松井十左衛門・松元彌

八郎等於芝邸、与桃次郎君今黒田美濃・虎之助君名久命今

守信俱与能芸、竣賜太夫銀十五枚・端物二反・松井・

順君俱与能芸、竣賜太夫銀十五枚・端物二反・松井・

松元金各三星示束脩意焉、

三月八日、罷木場貞良御抱守、以御小納戸頭取為榮翁公給事、

四月二十一日、以圖師崎尚超為御側役、

六月七日、罷今井渚村安本職出列新番宿直衛署、拳御使番中村黑人義甫代之陞御納戸奉行、知御抱守事、

九月朔日、閣老留齊興公退朝、特伝大家寵旨許榮翁公造吹上庭、寓目景勝、

十四日、一橋一位治濟公貴臨芝邸、乃奏散榮、時又三郎公舞蘆刈、虎之助君今兩部遠舞吉野靜、桃次郎君今黒田美

十一日十五日、世子又三郎君始服鏡、

文政六年癸未、世子年十四歲実十

二月二十八日、以御小納戸頭取行御使番平田桑衛宗〔ママ〕知御抱守事、

全七年甲申 世子年十五歲実十

正月十五日、〔齊彬〕忠方公及大父溪山公・夫人英姫君・令弟治五郎君松平伊予守齊敏也・姊妹閑姫君今勝・從祖叔母孝姫君桑名侯近

定和室・從祖叔父與平昌高君等、詣高輪邸、開寿筵獻榮翁公八十賀各為詩歌焉、

松契千年

中将溪山公 八十年より松の千とせに契つ、

いくとかへりの花やみるらむ 溪山

祖父君のやそちの寿をいわひ たてまつりて

齊興公夫人 霜の後雪のなかにもいろかへぬ 彌姫君 木たかき松の陰そ豊けき

全 いく千代も尽ぬひかりを玉松の木かけになれてちきることの葉 いよ子

齊彬公 色かへぬ常盤のかけに契つ、 いよ子

千世も〔みどり〕もみちの春の松か枝 忠方

全 十かへりのはなさく春を松かえの 忠方

かさねてくまん千世の盃 忠方

全夫人英姫君 十かへりの千代を契て松か枝も

なを色やそふ君か代の春

黒田官兵衛 恭奉賀
長溥君

ふさ子

尊大公八十初度

高堂置酒对青春 藹々五雲映階新

多少兒孫齊献寿 称杯更祝幾芳辰

全 又

盛宴開時瑞氣懸 靈禽采舞玉墀前

滿堂高唱九如曲 眉寿万年伴列仙

源長溥拜上

島津左近 久呢君

契松千歳

翠色千秋自爵蒼 君恩普闊開佳牀

拝観貴品逢萊興 旭日添光寿益長

久呢拜

全 奉賀

鶴捧千年杯 龜献万歳宮

南山不老寿 賀福唱無窮

久呢拜

契松千歳といふころを祝い奉り

君既に八十は実生世わか緑 秋風

全 花を待君やわか木の八十の宴 秋風

八十とせの春をむかへてわかみとり

さか行松に千代を契りて

たか子 桑名侯松平定和夫人孝姫君

虎之助久命君 今南部遠江守信順

奉寿

八十初度

称寿華筵白鶴馴 絃歌詩酒宴佳賓

千秋不老多歡樂 長駐紅顔伴大椿

子悠拜稿

八十の御寿を祝し奉りて

全 たらちをの千とせを祝ふ心から

八十は老のかすと思はし 子悠

かその君八十とせを祝わせ給ふを

ことふき奉りて

大垣侯戸田氏正夫人種姫君

明そめて八十とせ祝ふたらちのおの

ひかりをあふく千代の初春

全 松にさく花をいくたひ千代の春

みるともあかし君か齢は

しなこ

全 千代までのかさしとならむ八十年の

わかえににおふ梅のはつ花

全 契をきて友とみきりの松の葉を

君か千とせのかすにとらなむ

全 鶴亀もこゝにやすまむたらちおの

ちとせを契る松の木下

新庄侯戸澤正令夫人貢姫君

いけ水のみきわにすめる鶴亀も

君に契りて万代やへむ

こう子

全 ときわなる松をためしにあふかはや

君か八十年の千代のはつ春

こう子

治五郎惟温君岡山侯松平伊予守斎敏君也

栄ます三代の常盤にあひ生の

まつも千年を契ゆく末

惟温

万代のさかへ久しきことふきを

なをくみそへん春の盃

惟温

膳所侯本多隠岐守康融夫人順姫君

こたひの御賀を

栄ゆく君か恵に千世かけて

ともよひかわす雛鶴の声

みち子

全 幾千年かきりもしらし君か代の

ためしを松にそへてかそへむ

みち子

土佐守松平豊瀧夫人候姫君

松か枝に千代を契りて十帰りの

花も幾たひ君や見得らむ

とき子

全 春ことにかけ弥高くみとりそふ

ちきりもふかき千代の松かえ

とき子

二月、世子患麻疹、

十五日、瘡浴酒湯、此日以奥御茶道山口隆雪后改不及給侍

左右、此月英姫君亦患麻疹、

六月十五日、以奥御茶道萩原仙齊為世子公給事、

八月十六日、萱堂彌姫君卒于芝邸年三十四、葬大圓寺、

法諡曰賢章院殿玉輪惠光大姉君姓松平氏鳥取侯相模守治道女以寬政三年辛亥十二月二十八日生、十二年庚申八月二十六日齊宣公為世子齊興公求婚於其令兄相模守齊邦君、此日許之、九月十八日舉于大家、十一月二十四日命許其請、文化四年丁卯五月歸于藩邸、六月二十八日移于芝邸、六年己丑四月二十八日結納婚姻余見前

九月十五日、罷平田桑衛御抱守復原職行御小納戶事、

又命御納戶奉行福崎助七季惇・中村黑人義甫皆以御抱守兼知御小納戶事、以御小納戶川上采男為儲君給事、

十月十五日、儲君及公始造于朝、獻大家家齊公御太刀一腰・縮緬十卷・白銀三十枚・御馬裸一疋、副城家慶

公御太刀一腰・白銀三十枚・卷物十卷・御馬裸一疋、御台君白銀五枚・卷物五、御簾中白銀各十一枚、進見

家齊公・家慶公於白書院、口親懇言恭對謝恩、竣而退、

此日公亦獻家齊公綿三十把・卷物五、家慶公綿三十把

・卷物五、御台君・御簾中君卷物各三・干鯛各一箱、各二種一荷以拜其恩、老大君榮翁公・老君溪山公獻大

家各二種一荷、副城各一種一荷、御台君・簾中君各一種、皆拜恩焉、

十一月二十一日、儲君復及公造朝、儲君就大広間四之、

公就休息所在大、家齊公召世子於黒書院手親加冠、賜

之諱字取名齊彬、因令任兵庫頭及侍從叙從四位下、乃設醕醑禮親觴、以賜着並宝刀賀之、世子亦獻御太刀一

腰・御刀一腰代金十五枚・縮緬十卷・白銀三十枚・御馬一

疋裸於家齊公、御太刀一腰・御刀一腰代金十枚・白銀三十

枚・御馬一疋裸於家慶公、白銀各五枚・干鯛各一箱於

御台君及簾中君、以拜其恩、此日公亦獻家齊公御太刀

一腰・綿三十把・御馬代金一枚、家慶公御太刀一腰・

御馬代金一枚、御台君・簾中君卷物各三卷・干鯛各一

箱、以拜恩、榮翁公・溪山公亦獻大家・副城各二種一

荷、御台君・簾中君各一種一荷、皆拜其恩、既而公欲

使儲君因拜官位朝謁於五節旬朔望、以問闍老、乃二十

三日命公許之、

十二月朔日、儲君始朝大府、

十日或作九日、儲君招請柳生但馬守俊章於芝邸、及從祖叔

父虎之助久命君今兩部信順君・家弟治五郎久寧君今松平伊予守齊敏君俱

約師弟学柳生流劍術焉後十年天保四年癸巳四月十七日儲君及久命君謝柳生氏辭入門列云

二十六日、禁庭賜宣旨二通叙從五位下任兵庫頭、又賜

口宣二通、進從四位下任侍從、是乃元服之日闍老連署告

諸司代有以奏聞故也、前此儲君師中納言飛鳥井雅光卿

学蹴鞠法、因雅光卿乃達叡聞、列其門弟許用紫紐冠懸、

亦此日与儲君免狀、初黃門琴月公就飛鳥井雅庸卿善蹴

鞠芸、爾来脩好久矣、故儲君亦学焉、此日以江戶知邸

早川千竈兼道陞御側役、帶原任給侍儲君、

文政八年乙酉 儲君年十六歲實十
七歲

正月二十八日八或
作五、粟刺額髮、

十一月二十七日、大家使佐橋市左衛門齋鶴一隻來賜儲君、乃所使鷹捉也、

九年丙戌 儲君年十七歲實十
八歲

二月、前此老大君榮翁公寢疾療藥得效、旧臘十五日既開慶宴、至是二十二日、老君溪山公等奏散樂自舞獻壽、老君舞鶴龜、儲君舞羽衣、左近久昵君舞鞍馬天狗、皆資興焉、

七月二十一日、以御小納戶伊集院卯十郎兼通、給侍儲君、

十一月朔日、以奧御茶道班重久玄碩為儲君給事、
六日、齊興公為儲君納徵於一橋、

二十七日、儲君成婚於芝邸、立英姬君為夫人、
十二月朔日、造朝獻大家家齊公・副城家慶公及御台君簾中君各物件、拜婚姻恩、初榮翁公會祖妣淨岸君、曾祖考宥邦公夫人而大家綱吉公養女也、寿垂九十薨于榮

翁公時、繇是榮翁公娶大家令弟一橋刑部卿宗尹公令女保、曰慈照夫人乃民部卿治濟公姉、而於其嫡男家齊公

及次男民部卿齊敦公為夫人甥故、迨大家無嗣家齊公入繼大家、大家以淨岸君所嘗請求榮翁公令女茂姬君、時近衛經源公乃為所子賜名寔子号、其養女立為御台君曰廣大夫人、而英姬君亦齊敦公令女、則於家齊公實為姪女、儲君之於御台君亦為姪孫、因重婚焉、
六日、儲君及夫人英姬君婚姻後始訪齊敦君於一橋第、

文政十年丁亥 儲君年十八歲實十
九歲

正月二十八日、大家頒鷹所捉始賜英姬君鷹一隻、
二月二十八日、以御側御用人岩元太右衛門勝富給侍儲君行御側役事、

三月十八日、大家家齊公任大政大臣、副城家慶公叙從一位、諸藩列侯各朝大家、儲君亦束帶朝賀焉、
月 日、折田八郎兵衛為儲君給事、

文政十一年戊子、儲君年十九歲實二
十歲

二月十三日、以御納戶兼御側目附櫻井廣喜、為儲君給事、

十月六日、英姫君造掖、

十一月二十七日、英姫君短袖、

全十二年己丑 儲君年二十歲実二十

正月二十五日、以福崎助七季惇為御側役、給祿九十斛、給侍如故、以御供目附平田友理為御小納戸、

三月二十八日、罷御小納戸中村黑人義甫、出為御鉄砲奉行、

七月六日、夫人英姫君有身結帶、

八月四日或作三日、英姫君生第一男於芝邸、名菊三郎君、於

是十八日大家家齊公及御台君賜公及儲君夫婦各物件以賀慶誕、而未幾九月十四日、天於同邸実以十一日天告如、上文、諱辰従実、

葬大圓寺、法諡曰觀光院殿玉影電明大禪童子、

天保元年庚寅 儲君年二十一歲実十二

二月十五日、以御小納戸頭取平田仁左衛門、為儲君給事、

六月二十一日、一橋民部卿薨、

十二月十六日、改文政十三年為三天保元年、

天保二年辛卯 儲君年二十二歲実十三

正月十八日、閣老連署致老大公書、宜以明日造于朝、十九日、儲君代造朝閣老列座伝命曰、踰稀世齡近「A」、

已雖致仕、後猶能介輔同聽國政以著治績、世罕高齡特且係貴屬、因特加寵待俾以榮軫陞從三位、儲君拜承其命、乃松平美濃守齊溥亦代生父巡詣閣老各第、皆拜特恩、由是此日遍令封內上老大公号称三位公、

二月十五日、儲君造朝拜叙三位恩、

三月二日、以御目附鷲頭才之丞遷御小納戸、為儲君給事、

三年壬辰 儲君年二十三歲実二十四

正月十一日、給伊集院卯十郎兼通十月月俸、給事御小納戸如故、

二月二十九日、以町田咲輔為儲君給事、御小納戸給十月月俸、是歲三位公年八十八矣、

三月十五日、開年賀宴分日会客、始自此日中廿二日訖、四月三日、其訖、乃老君溪山公・儲君齊彬公・令叔勝

之進久博君松山侯松平、隱岐守定毅・從祖令叔福岡侯黑田齊溥美濃守君等会龜甲亭、偕奏散樂各舞献壽焉、

五月十八日、粟大家為豐後守、

六月十五日、以奧御茶道伊集院宗甫為儲君給事、

天保四年癸巳 儲君年二十四歲癸二十
五歲

正月、三位公自旧冬嬰疾藥祈不效、此月十五日寅尅竟薨於高輪邸、其至大漸也、老君溪山公及儲君齊彬公・

国老猪飼央等皆侍左右、上邸近侍皆多拜謁、別邸近侍迨屬續後有統拌焉、十八日、移靈柩於表御休息所、法

諡曰大信院殿銀星高錄大夫羽林中郎將前薩摩隅日三國主兼領琉球国源公榮翁如證大居士、自時藩僧三名、奥御

小姓等直衛其側、大圓寺誦經供養薦靈膳、至癸棺日、二月三日、告大家以卯尅薨、既而十日、辰尅御家老猪

飼央尚敏・御用人本田六左衛門貞前・大圓寺昌隆等奉護靈柩發邸赴国、每駅輒称曰薩摩故三位、

四月五日、入福昌寺、前此公命島津啓之助忠剛充上香使、儲君命島津圖書久寶充上香使、竣靈柩至於是、

六日、忠剛・久寶各朝服數斗目長袴詣寺、為公及儲君上香代謁靈柩前如命焉、

此月二日、以御小姓与番頭行御側御用人末川將監久命焉、此儲君給事行御側役、二十二日、發赴江戸、

五月四日、以御小納戸野崎六十給侍世子公、

二十一日、末川久命至于芝邸仕於左右、

六月六日、世子試統於高輪邸、乃命久命觀言葉可否、凡論四十発中過其數、實惟恭不能容、咄

二十四日、世子公及虎之助君詣白金邸、老公觀其銃術授虎之助君以中發法、亦命久命觀言其可否再三強之、且告君曰久命世為師家宜召受業、每隔三日立課必召可

以学之、久命拜命、七月四日、世子復試統於高輪邸、久命趨召時口親命曰他日試銃宜必從焉、

九月二十五日、以御側御用人行御側役種子島六郎時助給事世子前此時坊文政五年三月由御広敷御用人為御側役班預參御趣法方事、九年三月陸御側御用人職掌如故

十月二十四日、以早川愛之助兼照転奥御小姓、給侍如故、

五年甲午 儲君年二十五歲癸二十
六歲

二月十六日、溪山公自白金邸權為移徙如高輪邸、即日還白金邸、

九月、当番頭兼御用人島津右門久福至自本府、

二十六日、儲君如田町邸、久福献佳肴以候起居、乃召

見使御小納戸賜縞縮緬一端、此日溪山公以幸姫君移龜
甲茶室、報七郎君及寵姫君亦移玉江物見、皆在高輪邸
乃告大家、

十月朔日、以奧御茶道高木東雪為儲君給事、

十二月十五日、遷奧御茶道伊集院宗甫給事忠教公子、

十六日、世子頼御台君所懇請蔭特蒙恩擢官陞少將位階

如故、乃親巡詣兩城・閣老之各第拜其恩、又使久福巡

詣若年寄各第代拜恩焉、此日閣老水野越前守忠邦・大

久保加賀守忠眞・青山下野守忠裕、乃遣諸司代松平伊

豆守〔マツ〕書以奏聞禁廷、

十九日、少將公將以明年乞告之國、故遣末川主水久平

先還報事、此日發邸道如鎌倉、

二十一日、為小將公獻白旗神社御太刀一腰・御馬一疋

一枚、鶴岳八幡廟及頼朝公墳廟金各二星、得佛公墳廟

白銀一枚、皆各代謁報來進也、

二十三日、少將公造朝拜任官恩、

天保六年乙未 少將公年二十六歲表二十
七歲

正月、前此少將公之拜官也、有群官預事者、至是

二十八日、命賜物件有差、此年太守公在江戶、故此

月大家使閣老齋例品來邸、併賜少將公告令以之
國、

二月五日、末川久平至自江戶、

六日、造朝報事、時方御家老職闕、

九日、奉島津佐渡久〔マツ〕后改為御家老職、又御側御用人

闕、

十九日、以末川久平帶原任權兼其事、

三月二十七日、少將公開慶會筵為奏散筵、任官故也、

四月十五日、造朝拜之國恩如例、

二十一日、高輪新第落成、溪山公乃以晴姫君・報七郎

君・寵姫君自龜甲亭移于新第、

二十六日、行移徙式、伊集院喜左衛門兼誼為火持役一

伊集院小平太俊佐為持水役、皆与焉是年五月因松平左近
將監求白金第十六日

悉授松
平氏云

二十七日、少將公發芝郎始赴封國、御家老調所笑

左衛門廣郷・御納戸奉行大迫八右衛門經武・御小納戸

頭取二階堂右八郎行健、御小納戸伊集院卯十郎兼道・

鷺頭才之丞永傳・野崎六十兼中、同見習粟丸猪兵衛兼

〔マツ〕御小姓川上翁介親・菊地太郎武・中村始義

・西田矢右衛門・伊集院周八兼・吉井七郎

・石黒小十郎^{〔マ〕}、野村彦兵衛、花崎直吉

・圖師崎良助、奥医師富永玄安、伊左敷道與

・鍼科月野意廻、奥御茶道植村惣阿彌長永・重久玄碩篤

・山口隆雪^{后改等}扈從、途加鎌倉^{〔如力〕}……

〔マ〕日、少將公始謁鶴岳廟及頼朝公・得佛公、

七月十七日、少將公試統術於中村別館、凡躰六十発、

末川久平從、

二十三日、前此公請溪山公之因浴温泉、此日賜告、

二十八日、大家使老女私賜溪山公御召羽織、

閏七月四日、進福崎季惇官為御側御用人、益祿百四十

石、給侍如故、

十五日、赤松則甫造于朝、陳少將公所獻繪子五卷・御

樽肴進見大家拜^三帰国恩、

八月二十九日、溪山公發^三高輪邸、

九月九日、御内證君享少將公於掖宮、末川久平・御小

納戸野崎良右衛門兼中等陪從、

十七日、少將公又試統術於中村館、時池野製鳥銃新成、

命久平始試之二發皆中、公欣然感賞焉、

十月二十一日、使御小納戸見習折田稍命末川久平徵其

祖父周山久救所編炮術書一冊、久平乃拜進焉、

十一月六日、中將溪山公至磯別館、

二十二日、召御側御用人・御側役等設宴飲酒、又召陵

舍令談古戰以資其興、

十二月三日、中將公及少將公狩于吉野、

九日、少將公如田布施、末川久平等從、途放鷹於谷山

・脇田、舍地頭廨、

十日、抵田布施、

十一日、放鷹於尾下村、獲鶴二隻、

十二日、獲鴨一隻、

十三日、獲鶴二隻・鴨一隻於大野原等、

十四日、放鷹加世田、

十五日、獲鶴二隻於阿多・田布施等、

十六日、又詣加世田、自成就院謁梅岳君主於日新寺、

還臨地頭廨、觀壯士踊躍于門下率一千人、公特感悅、

十七日、發加世田、途獲鶴一隻、此行手使鷹捉凡鶴七

隻・鴨二隻、而如伊作謁八幡廟、舍地頭廨、聚馬於隣

近臨闕焉、

十八日、還自放鷹、

二十二日、味爽少將公自築地館駕船往憩三舟、狩瘡猪

三丸、中將公又瘡猪丸、雪稍頻降、乃罷駕船自三船還、

天保七年丙申 少将公年二十七歲美二

猶在本府聞市田美作義直別荘在吉田本名村、

正月七日、少将公騎馬如吉野、自群岳下至吉田本名村、

中将公出自礪館同舍於市田美作義直別荘、末川久平・

岩下亘道朗・亭主義直及子右近義近等從陪其席、置酒

賜宴、

八日、狩于惣陣重富地名及善藏尾・黑仁田、中将公伏蛇原

松、少将公伏竹鹿倉、末川久平・折田梢・川畑東水等

從伏其側、尋又狩于牛手山、中将公伏于雨包、少将公

伏于瀨垂、皆無獲焉、

九日、狩于比志島中将公瘞二歲鹿一丸、少将公伏于大

瀨戶中久平・梢等從、手親瘞鹿二丸三歲、久平亦發銃

助之、狩白木場江、中将公伏大木屋本、少将公伏猪筒

谷大迫、又皆無獲歸舍如前、

十日、狩于關屋扇山南木場・關屋坂上、中将公伏瀨戶

尾、少将公伏梅木、久平等從、再狩于寺山・永山荒平、

幸好谷、中将公伏于取越、少将公伏于狸穴、瘞四歲鹿

一丸、久平亦助焉、竣降花倉、中将公還礪館、少将公

歷礪往還府城

二十一日、少将公行首途式、

二月十八日八或少将公發府城如江戸、

三月、前此福崎季惇以疾辭職、二十八日、遂許其請、

季惇自始侍中至免職凡二十八年、公仁德寬大留心文武

礼重師傅、若遭可匡季惇焦思必疏莫以不呈每其進說、

輒雖恐逆耳天資明睿恒能容物不毫介意、季惇婦宅窃燒

其藥、独至感涙以霑袖者家人間有觀云、

四月十日、少将公至芝邸、

十三日、大家使閣老松平和泉守乘全來邸勞之、

十五日、造朝行參觀礼賜献如例、

〔下〕日、中将公首途本府、

九月朔日或作八、發礪別館、途詣伊勢宮、又如鎌倉謁

神社墳廟、

十月二十八日、至高輪邸、此月賢章夫人值十三回諱辰、

英姬君、応飛鳥井雅光卿所撰寄露懷旧之題、以所詠歌

遺御内證君、於是君乃示近侍令以感吟焉、

忍ふれと泪なりけり武蔵野ニ

露と消にし哀昔を

天保八年丁酉 少将公年二十八歲美二

正月二十二日、拳御小納戸町田咲輔為頭取、給侍如故、

五月六日、太守公發府城朝覲江戸、

六月十四日、少將公使知御側役種子島六郎時昉、命末

川主稅久長每公試銃、輒宜陪從之、時中將公与少將公

既有所議、使御側役伊集院喜左衛門兼誼、命末川主水

久平可以砲術教誘報七郎君、而於其習使久長為相手、

皆拜其命、

二十二日、少將公及篤之丞君試銃於今里第、末川久長

始從之、

二十六日、久平朝服造高輪邸、教授報七郎君膝台法於

御休息所、君乃使御小納戸菊池壯八郎賜金二星、久平

亦獻一星、

七月朔日、末川久平造大府為齊興公拜婦国恩、

八月六日、公第一令女生於芝邸、名澄姫君、母酒井氏、

父曰〔主殿〕内藏助、

九月、近衛忠熙公奉勅使于江戸、宣下家慶公征夷大將

軍、其在江戸也舍於淺草東本願寺、

十三日、實臨芝邸、自已至亥還于客舍、

十八日、忠熙公又實臨高輪邸、

天保九年戊戌 少將公年二十九歲美三
十歲

正月二十三日、以御小納戸伊集院卯十郎兼通為其頭取、

給侍如故、

四閏月十五日、以御小納戸見習折田梢為御小納戸、給

侍少將公、

七月二十八日、又進卯十郎陞御納戸奉行、兼御小納戸

及頭取事、給侍如故、

八月二十日、以当番頭上野司篤實遷御側御用人、行御

側役入給侍左右、

九月二十七日、以給事御側役種子島時昉權知御側御用

人事、

十月二十四日、公第二令女生於芝邸、名邦姫君、母酒

井氏、

天保十年己亥 少將公年三十歲美三
十一

四月十一日、末川主水久平代種子島六郎時昉娶邸婦国、

故前日公召于前手賜久平赤銅七子縁頭鑲、此日進時昉

職為当番頭給侍如故、

五月二十日、久平婦宅、

六月十八日、拳久平陞大目附班知寺社奉行事、

七月八日、以御広敷御用人山口舍人利紀遷御側役給侍

左右、

十月二十六日、以奥御茶道重久嘉甫給事少将公、

天保十一年庚子 世子年三十一歲実三十二

五月二十四日、邦姫君天於芝邸以廿三日、為諱辰、年三歲、是為

淨臺院君、

七月朔日、澄姫君天於芝邸、年四歲、蓮相院君是也、

十二年辛丑 世子年三十二歲実十三

閏正月晦日、家齊公薨、

六十九歲、号文恭院殿、

二月十二日、召名越彦太夫恒「ア、」於大坂為御側役、給事

世子、

十月二十四日、溪山公薨于高輪邸、法諡曰大慈院殿、

十一月九日、以御側御用人野崎良右衛門兼中為世子給

事、行御側役職、

十三年壬寅 世子年三十三歲実十四

正月十一日、以早川愛之助兼照為御小姓、給侍世子少

将公、

正月、上邸群官奉大慈公靈輜還自江戸、六日、安藝忠

剛如出水予迎靈輜、八日、至出水忠剛上香拜謁、十二

日、入福昌寺、十五日、行殯葬礼、齊興公時方患疝、

親命忠剛代守牌主從葬場、二十日至二十四日中陰法事、

二月十五日、以御小納戸平田仁左衛門始稱友理為頭取、給

事世子、

三月十九日、以伊木半七郎為少将公給事・御小納戸、

天保十四年癸卯 世子年三十四歲実十五

二月、太守公稟大家請改豐後守称修理大夫、九日、大

家命如所請、以下有欠文、

弘化元年甲辰 世子年三十五歲実十六

正月十一日、出上野篤實一為御勘定奉行、

二月五日、齊興公發府城如江戸、

三月十一日、佛郎西異船来泊于琉球那覇之海洋、所

駕異人凡二百三十人、言語文字多皆不通、唯有唐人粗

通事者言、婦自廣東路逢暴風、由摧舟具糧食亦乏欲求

有求、乃授所乞材木穀薯令以開帆、時有主師使通事說

琉官等、我国皇帝与漢土通、故使臣等交通於其隣近諸

國、因琉球亦欲与我和永以結好交通互市、且使_二國人_一學_二天主教_一、再三強之、琉官等守國制固以拒曰、貧弱偏小國產微薄不足結好通商大國、無一所肯、主師不敢聽曰、若難遽決底尽熟議、俟大總兵来以有所对、但於兵艦無誤通事、故留佛唐二客於海岸令以俟兵来、乃十九日異船揚帆去、琉官等不得已屏僧居二客於空寺圍置守衛、二十八日、佛人又使唐人言、啖咭利因屬望琉球者久矣、其渡軍艦亦必近、因与我結好以得援勢免啖難必矣、故先可學天主教、琉官等曰琉球自古信孔孟學不敢可變、請開洋去、

四月二十六日、以奧御茶道山口不及為御茶道頭、給事如故、

七月、前此公疏稟于大家以異船事、

二十六日、邸報至自江戸、乃預異國事御家老島津石見久浮、預琉球事御家老島津主計久寶等遽造政府、

二十七日、命預琉球事御用人二階堂右八郎行健及鉄炮物頭坂元休左衛門清_{〔マユ〕}、近藤彦左衛門嘉_{從卒三千人}小頭_{三不詳}、預

琉球物事_二御裁許掛松本十兵衛_一、那奉行權御目附安田助左衛門義、府學助教兼旗奉行宮内清之進、預琉

產物事_二御代官原田尚助_一、預_二異船事川上彌四郎、同書

役兒玉宗八、御家老座書役野元一郎、御趣法方書役兼御小姓組目附松岡十太夫、御用人座書役葛西四郎太、御小姓与目附岩切英助、騎馬御小姓与中村孫次郎、山口吉五郎、津留八之進、西田次郎太、野間休之進、池上良右衛門、久保正之進、園田彦九郎、坂本廉四郎、表醫師田中道節、唐通事橋口五助、御兵具方肝煎川路正右衛門、同与力山下清之丞、坂口源七兵衛、其他足輕三十人、急裝各配駕於二階堂所乘御池丸_{船主岩城藤七郎}、坂本所乘盛徳丸_{船主別府藤太郎}、近藤所乘大壽丸_{船主柏原田辺泰藏}、載之小頭鎧六領、從卒鎧四十五領、二百錢煩銃三座、鉛彈三百九十箇、鉄砲五十挺、鉛子一万箇、筒藥千三百斤、細藥五十五斤、鉛百五十斤、火繩七千二百根、高提燈一張、弓提燈十五張、大丸燈二張、大蠟二百四十挺、中小蠟千五百斤、幕五張、信旗一本、八月_{〔マユ〕}日開帆赴之、

弘化二年乙巳 世子年三十六_{〔実三十七〕}

正月十一日、以奧御茶道重久玄碩為_二御茶道頭_一、給事如故、

七月廿八日、曉内寵富貴生_二第二公子於高輪鶴渡邸_一、

名寬之助君、富貴姓橫瀨氏三郎兵衛克己女也、

八月四日、以山口直記利紀人^{初舍}陸御側御用人、給事如

故、

十一月二十一日、府市行屋火延燒六町、鎮于翌曉^起人相

良喜兵衛
衛失火

弘化三年丙午 少將公年三十七歲^{實三十八}

二月十六日、以御記錄奉行橋口今彦兼柄陸御納戶奉行、職掌如故、

十九日、以御小納戶田上百二則休為少將公給事、

三月十七日、異船一艘來于琉球久米島、遣十七人棹小

舟三艘、上海岸島吏迎接、言語不通播手之食如情有求、

因与殼薯謝回本船、明日不知所之、

四月五日、又一艘來于同島洋、遣六人棹一小舟、乞

食如前、此日又喚國船一艘來泊于那霸洋言、啖咭喇医

師一名及其妻子男女各一、唐訳二名其他十四人、通計

二十人、所駕發自廣東、欲僦舍以栖於此地、琉官等

固守固禁拒不敢聽、船帥医曰我国皇帝勅臣等令買小地

寓居于此以療諸病、琉官等言、医学唐人国用既足、

八日、又一艘來于久米島洋、遣十八人棹小舟、播手

乞食、島吏与之如前、所載不知何国、

五月六日、又佛朗西三百人所駕一艘漂于讀谷山洋、入

那霸川口、亦言來自廣東、是時所來於三年前^{甲辰}佛朗西

与唐訳二人雇小船駕佛朗西、七日、導引碇泊于運天來

前佛人等乃婦、空寺守衛如初、而佛朗西上陸測量沿海、

琉官等禁亦不敢聽、且船主帥使訳言曰、大總兵帥五百

人所駕船一艘及三百人所駕一艘、將以近來故先留碇、

琉官等為增守衛、

十一日、佛朗西三百人所駕船出自廣東向運天港颺于那

霸洋、

十二日、又佛朗西大總兵帥五百人所駕船一艘來于那霸

洋、留寺佛人及唐訳雇小船迎訪其船、

十三日、三艘皆碇泊于運天、而喚國船乃留醫師^{三十}及

其妻^{可三}、子男^二、女^四、唐訳一名通計五人於海岸、遂

揚帆向西方去云、乃置空寺圍以守衛、而大總兵欲見^三

總理官親議和好屢促來謁、然琉官等恐三年前宜竭

熟講有以對之責、托事遷延、時方平田善太夫居任於在

番、与琉官等議以飛舟告事本府、天值霖雨徒候風

潮、是月雖發飛舟返洋曠日、其所告疏

閏五月始達江戶、乃二十日、公使知邸半田嘉藤次歲典

以疏三通趨關老阿部伊勢守正弘第、就用人山岡衛士呈之、且使仙波市左衛門永養別以一通就彼近臣有私所聞、二十五日、遣上邸家老島津石見久浮遠發兼程回国、故益指揮以戒防禦備、

二十七日、關老正弘乃招知邸早川五郎兵衛兼彝以泄朝議曰、若使少將代公馳国宜上疏必呈於明日、未造朝之前此日異船七百人所駕一艘・五百人所駕一艘並來泊于浦賀港、隣近騷劇、

二十八日、齊興公応朝旨、乃裁上疏託御先手戸塚豐後守以呈正弘、即日大家家慶公使關老戸田山城守忠温來邸、賜少將公告恩賚如例、副城家祥公亦使松平和泉守乘全同來賜告如之、

二十九日、少將公方其將發代撰公位口命、御側詰碓山將曹久德為御家老職賜祿俸仝兼帶原職、且縁家別自総室罕比貴族、而忠勲匪啻嗚先世、今躬勵精功特加褒祿賜世国姓、以限嫡子令称島津、次男以下如故、

此月十八日庚十九日辰魁、寶鏡夫人鈴木氏卒於錦崎、二十日、殯葬于玉龍山、法諡曰寶鏡院圓爾妙鑑大姉、齊興公生母、然如少將公・順姫君・候姫君雖実祖母、由嫡夫人芳蓮君養公為子、降服半減忌十五日服、七十五日、以途日

減日達江戶、惟一日居心喪焉、

六月朔日、少將公造朝進見大家拜婦国恩、大家口親懇命使以寬猛能竭思於琉球事、勿苟墜国威、且賜御馬、少將公亦親敬對謝恩、

三日、齊興公疏飛報狀告月直關老青山下野守忠裕、

六日、少將公發芝邸、御家老島津將曹久德、御側役種子島六郎時昉・名越彦太夫、御小納戸島津藤馬・伊集院卯十郎兼通、奥御小姓折田八郎兵衛・伊木八十郎、

・菊地矢市郎・吉崎壯八郎・早川連兼善・碓山清太夫
・吉井七左衛門　・福崎七之丞季　・野崎才次兼
・井上莊太郎正庸、赤松安之丞則　・田上鎌之介
・花謙藏、奥御茶道山口不及　・重久嘉甫　・富

永玄意・隈元隆圓・村井東養　・御供目附種子嶋權助時　・本城源七郎　・森川孫太夫　・徳永助之進　・御右筆長崎甚七義　・御家老座書役奥掛面高十五郎・書役伊集院直五郎　等從、

此月邸報達自江戶、乃命国老島津豐後久寶寵領利權以原職專知海防事曰、大家屢有所戒、因特命汝宜与知異船官員議事、以処置之、於是十四日、久寶命御用人倉山作太夫久壽權知番頭率衆一隊、物頭谷川次郎兵衛久

武・福崎助八季^[14] 為鉄炮頭、御目附平田清右衛門純

・旗奉行横山安之丞安容・唐船改堀與左衛門貞・御

代官伊集院次左衛門俊・御小姓与竹之内善之進

・小牟田助右衛門季 為目附、御小姓与安藤直左衛門

則賢、岡村新藏・平山加十郎武・兒玉筑兵衛實

・園田四郎助實・谷元十郎・篠原仁三次政 皆列

騎馬、醫師湯前龍棟 兼兩科、其他御兵具方与力

一名・同足輕十名、皆急弁裝令俟徵發、又命御小姓与

礪永孫四郎周德為使番、屬島津久浮隊下令抵山川以竣

時、

十七日、国老島津久浮至自江戸、乃十八日以大頭發馳

指宿戌摺之濱、

七月二十日、邦公又疏飛報狀呈于閣老阿部正弘曰、由

大總兵屢招總理官、琉官等相議、以国頭按司權充總理

官如運天港應接大總兵於其船、他二艘帥亦各会于此、

大總兵使唐訳說按司曰、佛国皇帝使臣等來結和好、夫

歐羅巴洲雖固數国莫不和好宜琉球亦必親佛国、示其佛

国既与清国所通商之契券、以勸同結和好交易、按司对

曰夷是一大事、應以奏聞国王猶竭熟講俟所詔答、要本

海中如粟為国至屬島亦皆偏小、而自古屏藩乎清朝雖世

享冊封以奉貢職、無地可產金銀銅鉄等、唯隣接乎度佳

喇島与此通商、得賴其力以国稍建、若夫米穀材鉄器具

皆、其年々所軋販、而進貢于清、亦惟取於彼而已、若

逢風旱国民多至食鉄樹以免餓死、實是貧弱、安得通商

大國乎、雖屢遠航辱懷遠惠難自隣近以結遠国、伏願垂

憐宜疾回船見達奏聞、大總兵棹頭不敢信曰、曾聞琉球

而屬乎倭清際最為富国、方今留滯愈信其然、因益強勸

与佛国通商、按司柔色益拒尽理、於是大總兵亦微優容

曰、暫應汝辭可以回船奏達皇帝、然汝等詞与今所視聽

所以不合欲併以報皇帝、更議必有利臣等竣勅可復來

於後一歲許、故命佛人独留于此学解琉話、俟帝船來以

備訳官其他、自一昨年所留佛人及唐訳等大總兵悉載其

船、

閏五月二十四日、三艘揚帆出自運天皆向北去、

此月十四日、佛人十六名所駕船一艘飄於豐見城洋、乘

礁摧檣最迫危急、琉官等乃出小舟救且挽之、十五日、

入那覇港、言語不通揺手求材乃与并用、又請如運天謁

大總兵再三、不已琉球官護送令暫接還令猶留滯囿置守

衛、以飛舟報告本府今達江戸、故疏一通併前狀為二通

以呈正弘、

此月、少将公経東海・中国・九州、二十五日至府城、

八月二十三日、少将公子臨礪別館、

二十五日、親試炮術、末川久平等從夜乃賜宴、

二十六日、棹舟垂釣上築地岸還于府城、

九月二十二日、復臨礪館、

二十五日、還自礪館、

十月七日、復臨礪館、

十二日、垂綸海洋而還府城、

十五日、少将公発府城如山川、方巡檢城西海岸、国老島

津將曹久徳、側役種子島六郎時昉、御納戸奉行兼御小

納戸伊集院卯十郎兼通、御小納戸葉丸猪右衛門・折田

八郎兵衛、奥御小姓菊池矢市郎・相良壯八郎・碓山清

太夫・吉井七左衛門・早川愛之助兼照・圖師崎良助・

赤松安之丞・猪飼直人・伊集院藤十郎兼直、奥御茶道

山口不及・重久嘉甫、奥御医師富永玄意・重信恕誠・

村井東養、御供目附種子島權助・本城源七郎・森川孫

太夫・徳永助之進、御家老座奥掛面高十五郎、御軍師

園田與藤次行、唐船改白濱八郎左衛門・成田正右衛門

青山善助等從、途憩脇田、抵谷山郷舎地頭廨、

十六日、発谷山停駕于平川及黒地蔵坂、抵喜入邑舎于

別館、

十七日、発喜入過今和泉、小憩小枚〔牧之〕抵指宿郷、停駕東

方村舎于湊浦、

十八日、発湊浦過頼娃郷眺望鏡池、憩瑞應院、舎地頭

廨、

十九日、発頼娃如山川郷停駕龍山寺、抵山川町舎于河

野覺兵衛家、

二十日、発山川停駕正護寺、命成田等試大砲於竹山下、

竣如指宿舎于湊浦、

二十一日、自湊浦移二月田別館、留浴温泉、

十一月二日、已剋二月田別館火、少将公避移湊本亭、

五日、発湊舎谷山廨、

六日、発還府城、

十二日、少将公放鷹於尾畔方、其將出也右司差夫修路

架圯、公行觀愀色形面、乃問從士曰、為我如斯乎、我

遊于茲不特放鷹、欲救急民徑避其圯撰齊濟水便、誠郡

吏曰使民以時勿費一丁、民咸敬服、明日頒其所獲賜近

侍臣、

十六日、逾鳥越阪復臨礪館、

二十四日、歸自礪館、頃日少将公念人破産多在火難、

命修法者禱以除災製其護符、

二十七日、使種子島時防〔防〕頒賜近臣等、末川久平亦与焉、
十二月十二日、少将公復臨磯館、徵木上清左衛門及其
門弟、命講草鹿丸物以備英覽、大目附以上趨召寓目焉、
十九日、還自磯館、

少将様西目海岸御巡見之序日記書拔、

弘化三年午春琉球国江異船来舶之旨申来、其段江戸江
御屈被仰上候、依テ江戸詰合之御家老島津石見久浮為
守衛被差下、尚亦為御名代久浮ハ五月出立、六月十七
日下着、翌十八日、為守衛指宿摺之濱迄被差越候、少
将様御下国、海岸御指揮被為在度御願被為在、六月六
日、江戸御発駕付、御側詰碇山將曹久徳江御家老職被
仰付、島津之御称号拝領ニテ直ニ御供、七月二十五日
御着城、磯館江御滞在、此年十月ヨリ西目御巡見、左
候テ弘化四年未正月十九日、宰相様御下国付江戸御立、
三月八日御着城、少将様御対顔被為在候、右ニ付少将
様御參府ニ付、三月十四日磯館ヨリ御本丸江被為入当
日御発駕、五月十日江戸御着府被為在候筈ニ付、三月
十四日方御老中上使御賜、十五日御登城、御參府之御

礼為被仰上ニテ候半欵、

但少将様江戸御発駕之前御暇御賜之上使御引請、夫
ヨリ御登城有之、御暇之御礼并御献上物有之、御
拝領物為有之筈ニ候、

伊地知小十郎様

川上筑後

弘化四年丁未 少将公年三十八美三

正月、猶在国、

二日、少将公巡詣春日・若宮・稻荷・諏訪・祇園・神
明、還詣〔詣〕護摩所、靈符堂御看經所、先是值其誕日及兩
名月歳将暮必賜宴近侍為例、然此在国不暇海防遷延曠
期至是、

十九日、混開慶宴催散樂於奧舞台、召近侍群官寓目焉、
此日太守公得大家告発芝郎帰国、

二月三日、少将公夜謙居於城宮、奥医師青山道策等侍
座、公問道策曰、汝觀伊地知所著島津御莊考乎、対曰未
也、渠夙坐事閉戸謝客好涉群籍、遭人訪古多对著書為
史所忌却招躬書、公又問、不知誰藏渠書乎、時道策知、
太守公取渠所撰靈社勲功記既藏掖宮、今宵令誦此亦如
何、公曰其書何在、道策求之宮女、宮女乃呈公取而觀

頗為大編、他日熟讀宜閣如初、

四日、道策來語季安曰、中外泄言雖所固禁、前宵直侍公謙居語次及御莊考、因窃來話賀被恩眷、季安頓首敬拜曰、昨靈社祭日会于久仰宅、且宅置裱匠嘗命裱裝亦成昨日前宵持回閣床即莊考此云、道策拍手大感奇遇、

乃取親之請假過讀、季安固辭曰、某所著書先是五年^{卯癸}官推法白国老島津久風、久風以伝大監察令徵且親時窃承諭呈六十余冊若御莊考、猶寬、前此^甲老君溪山公既有

所召呈備英覽、時甚感賞賜金十五兩及美濃紙俾以淨写有宜呈命、而留史局方曠叵写、老公竟斃迨其悉徵雖稍垂竣所未及呈而深秘本、則輕視之人実所危懼、然能体察如是情実以於秘読応限日假、道策大悦誓假四冊^{本題}

^{愚考、至老公覽還賜則}
^{曰島津御莊考故從之}

八日、太守公至府城、少將公子親謁神祖廟於大雄山、

此日復臨磯館、

十六日、由無返冊季安往訪道策、道策曰、僅読二冊精博詳審実足感心、余未得親、願俟全読時某出袖視所著書

六十余冊呈上、時之目次以報告他無一本於官府、則危懼莫大焉、子亦親可以察矣、道策曰諾請目次亦假將併

親以俱還之、

十七日、道策齋御莊考及著書目次詣磯別館、時少將公

埃雨稍霽將棹舟遊觀漁獵、既駕浮海、因雨復降会公還館、驚頭才之丞・村井東養等侍座、乃召道策、道策進

曰、嚮命臣所求御莊考幸獲秘本忝疾所覽、公曰、否嘗聞老公細語渠事必其視之、道策乃退持四冊及著書目次進

于左右、時凡大鐘、公取親読竟不釈卷秉燭繼晷、内寵^{須磨}自旁問道策曰、呈何書乎、甚適英慮無暫見息迄可亥尅二

卷読罷謂、道策曰、此実大業、但序所載新納時升今何職乎、對曰、嘗上大阪雖竭精勤迨与知邸朝倉議事、忤旨罷

職未幾又進御使番今知高奉行、又問季安男何職乎、称喜十郎今充監吏属造營事、時公又曰、先時方季安与松山

隆阿彌等將刻一齊文建碑柱菴墓、伊集院織衛俊仇聞太守公有訛不達、松山弟山口不及等殆至焦胸、織衛為人

安得与此拳乎、公笑語焉、而莊考命須磨磨于宮中云、

十八日、道策來語季安如昨日事、

二十日、少將公謁列祖神主於淨光明寺、為將以近筭朝于江戶也、奏者番及御側御用人相良甚太夫長是等先詣

寺恭迎公輿、公各巡拜位御座間、召見住僧献茗菓、事竣御供目附乃整從隊因長是聞公、公曰、從隊暫埃脚進于近乃起拜央、今少進于膝下卿応疾親伊地知所著島津莊

考也、叙事筆力其如何乎、長是對曰如命嘗觀焉、渠久閉戶本邦歷史封内旧記至譜系類鮮不涉覽、故其所叙方今博識多鳴于世不知、彼等所評如何、於加臣等頗服精博、公亦服曰卿等云爾矣其為、然概觀一冊全篇足知、但推所見私曲直類其如何乎、長是曰、凡得一証據述其說又起一疑弁解其誤、匪独渠耳太抵著述者之常也、公又頷曰猶可益誦、

二十三日、道策拜謁大中公、還逢磯宮老女等詣自舟乃告住僧、住僧迎令皆能拜、因隨被誘駕其舨舟亦造磯館、公乃召曰、先日問相良彼亦称宜、由是篇中有間欲問、且諸購書有台記・玉海・百鍊抄等、既聚、文庫可他日俾視、渠等如古今戰誰著述乎又往問之、

二十四日、道策來季安廬伝昨日事、亦頓首拜承对道策曰、古今戰大島出羽守忠泰所記、而其胤胄今盛太夫所家藏為原本云、

二十八日、少將公命島津將曹久德代謁諏方廟、還停駕於安養院又代謁祇園廟、而駕御船行首途式、皆如親謁例、

三月五日、少將公在磯別館觀華火、道策等亦趨召寓目焉、時公出御莊考手披中卷、援証于太祖誕生条多載東

鑑・武家系図・安國寺申狀・聖榮日記等書目、而於其中比企尼出于何書乎、命道策又有以問焉、

七日、少將公詣南泉院謁列祖廟亦為以近発也、

八日、午昼太守公至府城、少將公預回自磯待迎于御对面所緣頰、御一門及各嗣子彈正公叔等皆陪其末拜伏迎焉、而少將公、松壽院君、山城忠教君、彈正久珍等入陪宴於城宮、少將公候間起問道策、先日所命未問渠乎宜以速問、而山城君等晚景退、少將公夜還磯館、

九日、道策又來季安廬伝先日命曰、自承旨逢公光着以多端、故未暇來達、昨亦承促無辭可謝願其速答、

十日、山松忠厚卒于田浦第、此日季安抄写東鑑治承五年辛丑七月十四日為養和元年十月十七日条、及武家系図比企掃部允

遠宗等伝、注之私考曰、遠宗称掃部允、其妻生丹後局以其乳為賴朝公、乳母匪但哺養、迨元曆元年賴朝公譖于伊豆、夫婦從行、不論水旱受歲常租、佃于比企郡以給食糧、迄治承四年凡二十年、而遠宗逝至妻寡居為尼号比企尼、是年政子生若公、蓋於賴家庶兄而天也、賴朝公德尼忠勲念其佳例以甥義員為尼猶子、以其妻亦為乳母可以知也、然武家系図脫丹後局、東鑑唯言緣座不載其属、而吾藩旧乘義員之於丹後局或載姉或記妹或書

娘、未免孰誤、拋是考之丹後局必比企尼所生、而於義員養妹也、故随父母久奉膳厨、得幸孕太祖亦可以概知也、粗叙所稽聊答道策、

十二日、道策持詣礒館拜呈左右、公取熟見、其云養妹協公明旨、欣然謂曰最當の説也、因此莊考吾可自随以如江戸著書目次授汝令、還時道策曰、於此目次若有公用渠息玩古亦不減父賜之料紙応写以献、時公亦謂曰〔マ〕調所等不亦間然、故命老女岡村候公既發後至老女等発宜以俾授、

十四日、未尅少將公詣府城、黄昏又還礒館、

十五日、卯尅從隊皆踈下馬、少將公御馬驗一本、発自礒館還府城拜別太守公、已尅発駕、島津久德等從、

十八日、道策詣礒宮、老女岡村乃伝所承命、使道策授季安美濃紙三束、仮其息手写著述書以呈江戸、至寬永軍徵等大部而紙不足猶統有給、此日季安聞事就道策宅拜領謝恩、但是泄他特所禁云、

二十三日、内寵及老女等発礒館、五月十日、少將公至芝邸、

六月、命豊後久寶預參海岸防禦事曰、大家屢有所戒、故特命之宜議事領異船官員以処置焉、因罷聞利権職、

十四日、以見習菊池矢市郎為御小納戸、給事少將公、

二十七日、国老調所廣郷承太守公旨、使御趣法方御側御用人海老原宗之丞清燦、命御記録奉行得能彦左衛門通古、徵藏史局季安著書六十余冊悉出於御用部屋、即日通古以一函呈于近侍、公乃披取軍徵日熟覽、而語近侍曰、皆是昔時之実録也、唯輯成編猶並其時而觀其事焉、

七月、前此在去歲春遣村橋左膳久〔マ〕率守衛兵渡海琉球、与倉山作太夫久壽議内密事、既而此月琉球報事、其船未至於是、

二十一日、国老調所廣郷承旨、更命島津權五郎久儔代之總督、物頭谷川次郎兵衛久武為鉄炮頭、御小姓与植村九之助長裕・田中喜藤次並為目附、山本勘左衛門・竹内直助・佐藤半藏皆為騎兵、其他属物頭・与力一名・步卒此云足輕十名、巖候風潮渡于琉球、

二十六日、維學心院薨去、

八月二十四日、出御小納戸折田八郎兵衛為道奉行、九月、前此季安被錮官途後雖有赦窃錮如故、至是二十三日、国老廣郷承特旨赦之、

二十七日、佛朗西提督帥七百人所駕艦一艘・五百人所

駕一艘其中四十唐人二百人所駕火輪船一艘中二十唐人碇泊于那霸

港、使訊言、於琉官此中五百人所駕〔V〕、既渡日本

送四五旬於長崎·箱館、而歸上海、今三艘俱出自上海至寧波九山、自九山來于茲、乃

十月三日、提督率屬官八人及兵卒九十九人·唐訊二人上於海岸使其訊示十章條約說琉官曰、請使領事官帥商民等買地儼舍逗留互市、琉官等曰琉球無地可產金銀銅鉄及他穀糧、實惟貧弱不足易物交通大國、伏雖以拒、

提督等聞与亞米理幹既成條約、強責佛國亦印此條約、

琉官又辞至如亞國若於海洋薪水食糧或乏所求唯応乞耳抑於授地儼舍留領事官等實惟大事、奏聞清朝非以承詔

叵私敢聽、貧弱海島伏垂憐察、提督猶強曰臣等所達皇帝條約也、雖毫釐差不能損益須決心对變色忽起、琉官

追跡適船尽理屢請不敢聽允、

十二日、官人及兵卒二百三十余人上陸、猶益責一決对甚振猛威、琉官猶拒曰、於授地儼舍条小國不堪再三尽理、官人皆怒乃罵叱曰、欺我佛國猶小國然乎、兵卒四十余各揮劍銃忽蹈堂上迫困琉官勢將破事、於是總理官布政官亦不得已加印條約、乃一通留于琉球採漢字·橫字二通、而又曰、條約如応願刪還國告奏聞皇帝汝等

宜識、時請所留佛人亦駕船還不敢承諾曰、宜益遇待教之琉話及真俗文通弁訊吏用、且言提督等今踰半年渡于

日本、与此定約如寒沙塚、迨明年秋將帰佛國欲泊琉球自三年前所留喚医、罹疾率其妻子欲帰清國、故皆駕其船、

十九日、三艘皆俱開帆出自那霸、向未申去、是年〔V〕月以飛舟報本府、而〔V〕月達江戶、故齊興公疏其状呈于閣老、

是歲十月、先是先公所世修軍政、至寬永中遵大家制多所變革、爾後迨新納久了師小幡景憲聞甲州兵、凡談兵者棄先公制鮮不崇甲州、故其徒弟分為二派、曰古流、曰新流、其古流出自久了、久了以伝之平田可竹·伊東一空等、而新流出自園田成芳、成芳受之赤上、赤上受之小幡、而成芳伝之島津久貫、一空等所定專信甲州未嘗根拠兵出乎農、久貫乃粗稽先君制有以改撰号曰、異國方百有余年于茲矣、方今異船屢覩海岸雖有急變難遽出兵、且未聞甲州用銃戰鬪、而今異船專備大炮不可拒擊亦無銃隊、故齊興公欲專拠大中公·貫明公·松齡公軍制不泥甲州、採和漢宜以令全備、此月朔日、改異國方曰御軍役方、時島津讚岐貴典承旨、撰公位命島津山城

忠教・島津内匠久德為御軍役方御名代、由頃異船屢謁封境及長崎等、公有所慮建御軍役方令置官議事、大家亦方伝旨、若臨急變將徵援兵必其勿怠、故並命爾、以時莅局每有講議、輒宜与聞焉、久德有疾息又八郎久長代趨拜命、竣又貴典命島津豐後久寶帶御城代為副御名代、由事同前、大家徵兵可馳援官軍、方公在城宜屬御名代副其所陣、竣又貴典命調所笑左衛門廣鄉、為惣奉行、特令授旨以建御軍役方專基乎、先若所修軍政斟酌和漢融會機變定必勝策、而方公或御名代有出陣輒可從其軍、此日公又使廣鄉降特旨、命海老原宗之丞清熙為御軍役方惣頭取、令以援証精博建御軍役方其議事、群官所疏亦応日積汝為進止宜竭熟講以窺明旨、而方公或御名代有出陣可從其軍、竣又廣鄉由公脩軍政親出英断特承旨、命二階堂志津馬行健為御軍役方御取次、令以時莅局鉅織入聞於公左右、竣又廣鄉召命御使番知御記錄奉行得能彦左衛門通古、為御納戸奉行、而廣鄉又使御側御用人猪飼鯉太郎尚香、举伊地知小十郎季安為御徒目附、

六日、海老原清熙承廣鄉旨、命御納戸奉行知御記錄奉行得能通古、御広敷番頭稅所七郎右衛門敦寛・郡奉行

田中清右衛門綱繩・御作事奉行見習法元六左衛門・物奉行見習野元源五左衛門^{〔マ〕}・川崎四郎左衛門良寛為御軍役方取調掛、有馬衛守為御軍役方兵道御役者、御徒目附伊地知季安・御家老書役伊十院七之丞・染川喜三左衛門・迫田甚助、御用部屋書役伊東正兵衛・新納八郎右衛門等皆為御軍役方掛、

十七日、權建其局於鷲間御城代島津久寶・御家老調所廣鄉・御側御用人吉利久包・海老原清熙・有馬衛守・得能通古・稅所篤寛・田中綱繩・法元^{〔マ〕}・野元

・川崎良寛・伊地知季安等始列班位因賜慶宴、久寶・廣鄉各皆觴之凡出辰尅退于黄昏命也、

二十八日、御名代島津忠教公子島津久德、帥副御名代島津久寶・惣奉行調所廣鄉・惣頭取海老原清熙・大目附二階堂主計行^{〔マ〕}・御側役吉利久包・御用人伊勢雅樂貞長・御納戸奉行有川勇四郎・三原藤五郎經禮其他御小姓組番頭・御軍役方掛等、自鷄鳴聚稽古場、出自車門、修鍊御流義大砲備及鈿銃隊於吉野原、

十一月、行賴朝公六百五十年諱法事於花尾山、十四日、百僚群臣咸朝賀焉、

嘉永元年戊申 世子年三拾九実四歲

三月十五日、改弘化五年為嘉永元年、

二月三日、公發府城巡蒲生至福山等、

十八日、還自櫻島舍磯館、

十五日、追尊大中公建德豐殿于南林寺、至十一月二十

九日竣功、

二十四日、調鍊大炮於館下、召田中綱繩・季安等寓目、

三月二十二日、異船一艘自東向西颯于喜界島荒木梟洋、

來泊于灣港、可四五町洋、十三人駕小舟上海岸、島吏

迎接言語不通、言詛墨利加船為漁獵來似乞水菜、令界以

回向白桶梟去、又逢一艘于小野津洋、二艘相並向寅卯

去、

四月朔日、命新建般若院院撤隣傍士宅十区許、新闢通

衢广大倍旧、此日起功至明年十二月三日告竣

六日、異船壹艘颯于德島喜念崎、又三艘颯于同島西洋、

八日、朝又一艘來泊于同島龜津港、棹小舟上陸、島吏

迎接似言啖咭理船為乞菜水乃令与、去向東海不知所行

之、

十二日、命周防公子蒞政府及參軍省与聞兵政事、

二十二日、以二階堂志津馬行健為大目附、賜爵寄合、

二十五日、罷御使番知御記錄奉行平川宗之進遷任助教、
以季安為御記錄方添役知御葉園奉行預參軍政事、

五月四日、寬之助君天五日、年四歲以五月七日為諱辰、号靈光院

殿是也、

二十二日、国老調所廣鄉承旨、使御側御用人相良甚太

夫長是、命始置御軍役奉行及御軍賦役、而是日以御納

戶奉行得能通古為御側役兼御軍役奉行、以高奉行安田

助左衛門・御広敷番頭稅所七郎右衛門・郡奉行田中清

右衛門綱繩・御記錄方添役知御葉園奉行伊地知小十郎

季安・御作事奉行見習法元六左衛門・物奉行見習野元

源五左衛門皆為御軍賦役、

六月二日、撤預異国船官局為御軍役方官局、

九月十一日、講大砲調鍊於吉野原、

十一月二十三日、第四公子生于江府、名篤之助君、母

伊集院氏中二兼珍養女、名曰須磨、

嘉永二年己酉 世子年四十歲実四十一

正月六日、異船一艘自西向東颯于大島大和濱、可三里

洋、向子丑去、

二月七日、又一艘颯于同島實久西、可六七里洋、向西

去、

十一日、又一艘颯于同島東臬、可五里洋、自子向未去、十三日、夕尅又一艘自東向西颯于與路受島、可三里洋、十四日、曉又一艘向西颯于同島可二里洋、八月前此留琉佛人還自琉球、國頭王子來朝本府、二日謝恩、

二月十九日、公親制武備令、

二十五日、罷二階堂行健大目附職貶爵小番以協旨也、

閏四月二日、西上尅第五公子生於芝郎、母田宮氏、名曰秀、名儔次郎君、

九月朔日、以御納戶奉行知御使番田上百二為世子給事兼行御小納戶、

四月十二日、免海老原清潔職令老于家、

二十四日、以末川久平代為御軍役惣奉行、得能通古為御軍役方御取次、

二十八日、講鉤於天保山、

五月十六日、褒賜勵武芸土芭蕉布各二端、

六月二十二日、篤之助君天年二歲、是為篤入院君、

此月命割田祿三千斛備贍窮土用、

十一月八日、世子給事御側御用人行御側役種子島六郎時昉卒、

十二日、以御側御用人行御側役豎山武兵衛利武為世子給事、

嘉永三年庚戌 世子年四十一歲實四十二

正月、命島津將曹進其爵世列一所持、先是命御勘定奉行以入計出上歲總計、因又命算自弘化二年乙巳八月迄三年丙午七月一歲總計、限此四月就御勝手方御用人令以呈上焉、

二月二十一日、以早川務兼照為御小納戶見習、給侍如故、

二十二日、觀上武士躍踊於天保山、凡千三百八十余人、二十七日、觀下武士踊躍凡三千、

三月四日、御弓奉行赤山鞞負・御裁許掛中村賀右衛門〔吉井七之丞〕・御広敷横目野村喜八郎皆不趨召

自刃死焉、命名越左源太・村野傳之丞・木村仲之丞〔罪于家〕

五日、追貶二階堂主計除其世系壞墓勿祀、

十四日、流名越左源太於大島、山之内作次郎於臥蛇島、脇岡五郎太於惡石島、松元一左衛門於喜界島、村野傳之丞於德之島、和田二十郎於沖永良部島、磔近藤隆左

衛門・山田一郎左衛門清安・高崎五郎右衛門、屍於境迫門逼示邦人、使以知聞隱謀罪、

二十九日、御馬預見習仙波小太郎亦不趨召自刃死之、

此日 內大臣近衛忠熙公籬中薨于京師、法諡常興善院公養女、而於儲君令姊也、

四月十一日、命當番頭島津清太夫・御用人寺尾庄兵衛

・御記錄方添役木場次右衛門・屋久島奉行吉井七郎右衛門・御茶道頭山口不阿彌・御裁許掛見習近藤七郎左衛門・御右筆見習有川十右衛門・御小納戸格新納嘉・

表御同朋松山隆阿彌・小番奈良原助左衛門・御小姓与有馬市郎・琉館藏役大久保次右衛門・御広敷番頭八田喜左衛門・御裁許掛見習有村仁右衛門待罪于家、

十五日、流清太夫・七郎右衛門・七郎左衛門・不阿彌

・大久保次右衛門於海島、

二十五日、御家老島津壹岐久得代還自江戸、途避城下降自石坂踰四郎迫、迨將入宅自割其腹及喉、尚未能死傍人相之、

二十六日、命罷其職除家世系奪島津号令號称族平屋氏、是時流言初其発赴江戸也、高崎来密議事移尅甚久、至是以与惡徒行此罪云、

五月朔日、以御目附東郷彌十郎為御小納戸命築台場於天保山

五月四日、官窃賜四本喜次郎・小田勘助・黑葛原周右

衛門・樺山彦五郎金各三星、

六月、天保山台場成、

十九日、始試大砲焉、

二十日、三番組士小笹與右衛門時年十八發五百錢炮誤斬右掌至以斷掌、隊長喜入氏等饋米啗之、官乃賜金令療養焉、

七月朔日、中山王使玉川王子來朝府城、

八月七日、大風拔樹、

二十一日、公以琉使玉川王子發如江戸、国老川上筑後久封監護王子、物頭郷田仲兵衛・使番大迫源七・馬立江田平藏兼目附事・肥後五左衛門・大山彦左衛門・西田彌

右衛門・高崎喜兵衛・谷村十郎太皆列其隊、

十月晦日、公至江戸、王子亦從、朝謁獻賜皆如先例、

十一月十九日、少將公及公以琉人朝謁、

十二月三日、大家召公手賜茶器、世謂朱衣名器也、

二十八日、命島津又八郎久長急裝兼程 如江戸、

嘉永四年辛亥 少将公年四十二歲美十三

正月十一日、拳鎌田政純陸大目附、給職祿二百石班別
島津主殿次席、

十六日、午上尅妾伊集院氏生令姫於芝邸、名暉姫君、
妾曰須磨、中二兼珍養女也、

先是經費不給募庶士群官、令算田祿石収三升俵米、亦
乘石三収以于官庫限有年數、旧臘公念士之特命赦之、
令各以備其武事、

二十三日、皆拜命焉、

間歲齊興公年踰六十且患痔疾、因不任事、

二十九日、就閣老阿部伊勢守正弘稟于大家、請致仕以
伝封於世子匠作、

二月二日、閣老召世子於白書院、松平和泉守乘全伝命
許公所請以令襲封如父祖、時南部遠江守信順亦代老公
趣召拜焉、即日降制命令于封内、俗謂御袖判曰、宰相
公致仕伝封寡人如公所請、封内士庶慎心万端尊崇大家
政道、敬身先範堅遵國家綱紀勿苟怠慢、老公亦命国老
降制令曰、老倦國務稟得致仕伝封匠作、旧邦庶政一如
先規、士庶国人猶愈精勵可以各竭汝職業焉、

三日、公乃稟改薩摩守、此日以御納戸奉行知御記錄奉

行橋口今彦兼古、知御小納戸頭取御小納戸事、遷御小
納戸頭取驚頭才之丞為御納戸奉行、給侍山城公子、以
奧御茶道重久嘉甫、

十五日、公造于朝間大獻大家家慶公御太刀・御刀各
一腰代金二・卷物二十・白銀百枚・御馬二疋禰・儲君
家定公御刀一腰代金二・白銀百枚・御馬二疋禰・進見

於白書院、御奏者森川紀伊守執御太刀陳諸闕内、公拜
於障子涯、紀伊守贊之、松平市正亦贊執御刀陳闕内、
公再拜障子涯謝襲封恩、閣老松平和泉守乘全贊之、時

賜座於闕内大家口親懇言、公亦敬对拜恩、南部信順
其竣、為老公例贄物件進見大家拜告老恩、亦紀伊守贊
之、既又一門島津兵庫久長・家老川上筑後久封・島津
將曹久德・若年寄班鎌田圖書政純等遵例陪從、獻大家

御太刀銀馬各一腰・縮細各五卷、儲君御太刀銀馬各一
腰、番頭吉井仲久包、用人川上龍衛久齡・友野市助長裕

・側役豎山武兵衛利武・山口直記利紀獻大家家慶公御
太刀銀馬各一腰・縮細各三卷、儲君家定公御太刀同各一
腰、皆同拜 恩御奏者松平紀伊守贊久長、松平右京亮贊久封、島

贊久包、本田中務大輔贊久齡、戸田淡路守贊
長裕、大田撰津守贊利武、臨坂淡路守贊利紀 竣而悉退、此日公
饋老女銀各三枚・表使銀各二枚亦如之、

二十七日、大家遣閣老松平伊賀守忠優齋銀百枚・卷物三十、使於芝郎以賜公告令之國、因又伝命宣明日辰必造于朝、儲君亦遣久世大和守廣周齋卷物二十使以賜之、皆如先例、乃訪閣老第各拜其恩、此日命島津豊後久寶、喜入多門久通・川上矢五太夫久、預參公始國事、二十八日、公造于朝進見大家及儲君於白書院拜賜告恩、奏者番松平市正・閣老松平泉守乘全皆侍於御前、各以贊之、大家口親懇言賜御腰物及御馬、公乃敬對退於黑鷲杉戸涯、家老川上筑後久封亦獻御太刀一腰代銀馬・縮緬三卷、進見大家及儲君、公俟竣謁和泉守拜其恩、時和泉守伝旨曰、宜往注意以督邪宗匿於封内、且朝覲途勿增從隊、公拜竣退造西丸謁奏者番牧野遠江守・鳥居丹波守於大広間拜賜告恩、

此月二十一日、島津又四郎貴敦撰公位召命島津豊後久寶兼行宰相公給侍御家老事、

二月十七日、国老島津石見久浮監護琉人還自江戸、乃登府城報事也、

三月朔日、午尅公首途芝郎、島津將曹久徳等從、三日、夫人徳川氏養備次郎君為所子以立世子改称虎壽丸、此日聞事於月直閣老、

六日、以御使番中山次左衛門實美為御抱守、九日尅辰、公發芝郎、国老島津將曹久徳等從、二十三日、至伏見邸留滯三日、訪所司代及近衛第如先例、公之訪第也、拜觀 後醍醐帝震翰於其壁間、迨召燕室、又有懸軸拜進熟覽則親所筆短冊也、公甚赧愧曰豈凶拙毫以汚華壁哉、伏請黜去、二十五日、遣川上龍衛久齡代謁日光宮告享封也、此月島津久寶・島津久浮・末川久平承公及老公旨、遍令封内皆遵其制各勵汝職如先例、四月二日、以御小納戸菊池藤助武清兼御抱守給侍虎壽丸君、

四日、久齡帰自日光、

五日、遣鎌田圖書政純權充家老代謁鎌倉諸廟、亦告享封且齋公賜蓮金院書及嶋津久徳所副書皆致焉、

九日、政純帰自鎌倉、

五月三日、叔父島津安藝忠剛迎候出水、候公起居、九日或作五日、公舍向田、

六日、棹舟如樞崎久見觀漁者拳網有獲鯛、笑曰、鯛尚生活曷離其海而來川乎、所謂設明矣、是実可惡也、孰以足榮也、

九日或作八、日巳刻、公至府城、

十五日使小松相、馬往謝恩、公束帶巡謁五社、

十六日、公親裁制令諭国老等曰、今也宰相公既告老而

寡人受封、惟是焦思宜皆匡補吾所不逮、因自汝等至百

群官遵列祖規範咸守正路克祛私欲可以通上下情、度利

害得失臨事盡議処置国政、就中士民皆研心乎文武忠孝

專守信義尚節儉風、可以勵身於武道、如農工商亦各守

家業日夜勤職可竭孝養於其父祖、汝等遍令闔国勿苟誤

聞以違是旨余猶統令、

十七日、謁神社〔祖力〕〔南泉院〕廟等大雄山、

十八日、巡謁高祖廟等於淨光明寺・福昌寺・深固院・

惠〔燈力〕兩院、

十九日、巡謁聖廟神農堂・福迫諏方・小城権現・神明

護摩所・靈符堂御看經所、

二十日、巡謁不断光院・興國寺・本立寺、

二十一日、巡謁隆盛院・宇治瀬・妙谷寺・壽國寺・南

林寺、為襲封始入国故也、

二十二日、臨御座間受一門朝賀、忠剛及三次郎忠冬等

獻太刀各一腰・馬各一疋、以拝賀焉、出臨御書院受家

老・若年寄・大目附等賀、又臨对面所受百僚群司賀、

如新年式、此日公使山田壯右衛門爲正、賜忠剛越後編

二端・折魚金七星勞其遠迎、且賜料紙箱一筒・越後布

二端爲土産焉、

六月朔日、公召宴御一門、各俱獻一種一荷、恩賜有差

爲始就国也、公之得告也、異人留滞琉球凡踰八年矣、

日本沿海亦年漂泊如有所窺、故大家屢命戒海防備、公

行国政、亦雖先欲令群士專勵文武能守礼義以正風俗、

方今聞士窮民皆苦衣食則莫急乎救其飢寒、况昨年大風

秋穀不実米価日騰、公聞而乃恤其將餓、乃命有司發廩

出米五千斛以賤価売買於市、公親著米価令十章授諸有

司令以諭之、国老島津久寶・島津久浮・末川久平謹承

其論、

十日、巡覽群司吏局、

十二日、受家伝宝器於对面所、

十五日、遍令封内禁賣米価矣、

十六日、出廩米二千石授商家令以賤価以売于市、

十九日、臨兵具所觀武器、又臨国史館觀文書史籍、

〔同日〕、謁先廟於福昌寺還詣大乘院、

二十三日、謁南林・千眼両寺、

二十四日、臨磯別館留滞垂釣、

二十九日、還自礮館、

七月三日、公騎臨天保山觀試大小砲、

七日、罷島津將曹職、

十六日、公親命喜入多門久通為國老職、

十七日、公臨御座間召大番頭島津右門久福、口親命為

若年寄班列島津求馬久遷上席、

二十一日、復臨礮館召樺山伊織久〔マ〕・末川久馬久長・

郷原轉久興、試炮術各三十發、日暮乃輟、公中的如其

發數、久馬皆中而星踰其半、轉亦次之、竣皆召座置酒

賜宴、戌寅刻皆拜恩還、時公語曰此夜吾又可射焉、伊

織等比辭過新道數發声速子尅止、皆感公壯健無倦云、

二十三日、還礮館、

二十九日、琉球護送土佐國萬次郎等三人、回自佛國者

來于本府、置之於西田町、萬次郎曰十三四年前釣于土

佐海、為颶所漂到佛國岸多送年〔今カ〕幸如此云、

此月十一日貶御小納戸頭取御用取次見習伊集院平〔マ〕

為御弓奉行、御馬預中島清左衛門為寺社方取次、命和

田乘助復砲術師如父祖時、

八月八日、臨鑄製場觀鑄大砲、竣舍礮館、

十日、還自礮館、前此訪扱窮士七十四人、此日賜粟米

各一苞、有深感喜夜詣城下獻賽錢以拜恩者、

十二日晨、大熊運次郎偶觀其八包在芝原、乃告御目附

云、

十九日、大家賜宰相公御鷹之雲雀、

二十日、公謁先妣賢章夫人廟於福昌寺、

二十二日、公臨評定所觀取囚徒折其獄凡五人、

二十五日、會連歌於護摩所如例、公乃召一句

國民もゆたかにみのる稲穂哉

淨光明寺實之

天のめくみを仰くこの秋

此歲大有年

二十九日、公親蒞觀射於演武館、上方射者凡百十五人、

平田平六門人川上貞太郎・有川九八郎・東郷左太夫門

人猪俣休右衛門、双矢皆中褒賜弓各一張矢各二手、

九月三日、公謁花尾廟、

四日、公復蒞觀射於演武館、下方射者凡二百五十三人、

左太夫門人大迫喜右衛門・平田助太夫・烏丸平次郎、

双矢皆中褒賜弓矢如上方例、

六日、臨礮別館、

七日、公特褒美池田市兵衛兼福時八・川西加右衛門時七

東鄉市助^{時七}・別府四郎兵衛^{時七}・力老善射曰自壯至老靡有懈怠因有是命、

十六日、公蒞觀犬追物演武館、

十七日、復蒞觀加藤權兵衛家伝天真劍術、

十九日、復蒞觀大脇彌五右衛門・小野強右衛門所各伝

飛太刀劍術、及有川彦左衛門所伝水野劍術居合、鈴木

彌藤次所伝直心影劍術、關口柔心拳法、竣還礮館、

二十五日、復臨演武館、觀白尾金左衛門所伝大島槍術、

大山後角右衛門所伝太刀劍術、竣還礮館、

二十七日、復蒞觀篠崎七郎左衛門・東次郎左衛門所各

伝水野劍術居合拳法、海老原庄藏所伝關口拳法、竣還

礮館、

二十八日、大家家慶公訪公入部使聞老松平和泉守乘全

驛馬致、賜公鮭魚、乃召留守居附役於其宅授之令以発

御伝馬、是歲豐熟穀賤、公命有司增其佃糶其積穀倉廩

令以利農、遭穀貴時減其佃糶令以救士民、是前漢所謂

常平法也、故始自本年、命府士及郷士、皆糶官廩凡歲

租入十斛以上輒石別二升十斛当二斗、職祿做之、十斛

以下石別一升五合、各算稅額限十二月二十日報于高奉

行一石以下租入除云如諸郷佃穀石別一升準此、而預事有司議定其

佃宜速償之、而年易新穀可以俟之、

晦日、復蒞觀田中太郎左衛門・大山後角右衛門所各伝

太刀劍術、和田源太兵衛所伝常陸劍、坂本康四郎所伝

精一劍術・金子拳法、深見休八所伝心影劍術、田代宗

次郎所伝神人薙刀術、竣還礮館、

十月二日、復蒞觀伊集院彌七郎所伝示現劍術、川上八

次郎所伝天真劍術、山内居合、竹内腰廻、亦還礮館、

四日、復蒞觀川上十郎左衛門所伝鎌倉騎法、

八日、復蒞觀比志島靜馬所伝神當騎法、町田庄七郎所

伝大坪騎法、高橋甚五郎兵衛所伝高麗騎法、

九日、公手加島津壯之助君元服賜称又次郎、

十日、復觀東郷彌十郎所伝示現劍術、

十一日、亦如之皆出礮館竣還礮、

十三日、公還礮館、

十四日、島津又四郎貴敦代公蒞觀種子島次郎右衛門・

和田乘助所各伝稻留砲術、

十七日、貴敦復代觀郷原轉、末川久馬所各伝稻留砲術、

十八日、出常平倉令、

二十一日、辰尅発府城小憩于水上・横井兩驛、如伊集

院謁松公神主於妙圓寺、竣舍于驛、国老久實従、

二十二日、発如伊作途憩日置廨往舍于廨、

二十三日、発伊作廨停輿石原、入田布施觀砲術調練、

竣過阿多小憩于廨、抵加世田次解三日、

二十四日、詣日新寺觀土踊躍、

二十五日、発觀調炮於大崎又觀騎馬、

二十六日、発加世田停駕經峰、〔防乙〕抵防津舍一乘院、

二十七日、往觀台場、入鹿籠舍于枕崎別館、

二十八日、往觀調練於其台場、

二十九日、発停駕於笹箇迫戸、入知覽過今鹽屋、入顯

娃停駕于花取山、行觀石垣台場舍于邑廨、

十一月朔日、発觀顯娃娃台場、入山川觀炮術於調練場、

小憩于龍山寺舍于邑廨、

二日、行觀港口台場、途過指宿停駕大崎台場又觀水尻

台場、過湊浦臨濱崎太平次家浴二月田温湯、

九日、公上疏問朝觀期、

十九日、閣老阿部伊勢守正弘報朝旨曰、大家之修日光

宮也、公既上金五万四千四百助其工料、且戒琉球備、故優

定期発於八月下旬亦可也、

此月公降令曰、各尚質素皆隨分限竭思節儉、就中微祿

每事省略勿漫酒会嘗開慶宴、老公建制禁爭勝負飽至強

飲頃禁寢弘、公雖有聞將以加刑且特有免、命大目附自

今以後禁漫酒会且勝負飲、国老久寶・久通・久浮・久

平承旨、晦日、徧令封内、

十二月朔日、大家賞日光助役賜公時服五十、時公在国

支封淡路守忠寛代趨拜之、公出令禁讎聚爭飲、若猶犯

令可以当罪、

五日、如原良放鷹至永吉還、

八日、拳豎山武兵衛利武陞当番頭給侍如故、公騎馬如

谷山放鷹獲鶴三隻、近侍皆騎從、

十日、召助教鮫島黃裳始講論語於牡丹間、後以十日・

二十日為侍講日、

十五日、為嗣封入部催榮於内朝、召中外群官寓目焉、

公不蒞試騎外庭云、此日恩赦罪人、褒賜犬追物射手三

十六名太平布各一匹、特賜島津下總時服、撰公射事故

也、

十六日、臨磯館、

十七日、雨雪、乘輿棹舟渡于櫻島、

十八日、宰相公及勝姬君自芝邸移居高輪邸、

二十四日、発二月田舍谷山〔谷山〕、聚山川・喜入・谷山

砲隊觀調練於中鹽屋、竣二十五日申尅還府城、

此月扱学生隔年賜十五人月俸、各石得以励業、

二十八日、島津豊後久寶承旨伝大番頭、六組頭徧扱食

士賜戸別金子各一兩凡三百兩、小番新番七十一戸、六

組三百二十九戸、累年夏穀乏扱零落土雖救賜米、至此

節季念愈迫乎食、特発内庫令以賑救宜皆拜受益励職事、

五年壬子 公年四十三歲実四十四

正月、猶在国、

元日、謁五社、還臨御座間受御一門及近侍群官朝賀、

出臨御書院親觴御家老・若年寄・大目附等、如旧規、

四日、公臨内朝使年男酌賜侍中群官酒、如例、

八日、公謁南泉・壽國兩寺、

九日、放鷹于伊鋪、

十日、謁〔淨光前寺〕〔福智寺〕松峰・玉龍兩山、

十五日、以樺山伊織久寛陞御家老職給祿千斛、班列末

川近江次席、時年七十七、以御納戸奉行橋口今彦兼古

陞御側役給侍宰相公、御小納戸葉丸猪右衛門為頭取給

事如故、

十六日、公召御城代島津豊後久寶・喜人多門久通・島

津石見久浮・末川近江久平・樺山伊織久寛於御休息所、

口親賞積年之精勤賜宝刀各一腰、

十七日、以見習福崎七之丞為御小納戸、

十八日、輸金五万仟百兩獻泉官、助造營日光廟工料、

十九日、公如谷山放鷹獲鶴、

二十二日、大家家慶公遣使番會根内匠来邸、賜公鶴一

隻所使鷹捉也、聞老久世大和守廣周召知邸屬吏、授御

伝馬令以馭致送之州府、

二十八日、公既敬領大家所嚮賜鮭十尺、召御一門以下

至直触諸有司、各頒賜之且皆飲酒焉、前此旧冬公做常

平法令于世祿者定糶分量、至是公又採耿寿昌說親著大

較校歲豐凶解积、其心穀貴賤所以糶糶之理分上中位增

減其価、

二月朔日、示国老島津久寶・喜人久通・島津久浮・末

川久平・樺山久寛等、令以教諭領事群官凡七章皆出乎、

公仁德視民猶子博救其急矣、乃久寶等遍令封内往々伝

写、朝野拜誦莫不敬服焉、

二日、割田祿三万石献宰相公養地於指宿・谷山、

四日、田于尾畔、

七日、命新造兵具藏、前此為虫所壞故有此命、

二十一日、公臨畋于吉野原、島津久寶從、初以十九日

雖令其期、前宵以雨令延二十一日、亦前夜雨、時季安及中野織右衛門以御軍賦役、騎從先行俟于履掛原、味爽久賣來曰、丑尅出宅造城候公起居、公曰雨流車軸亦可出馬、故急路寅尅過才門阪、則公至必近、家老島津久浮為之總督、川上矢五太夫監其事、一番組頭菱刈空之介、新納主稅・島津藤馬・喜入壬生率組千二百八十二名、五番組頭末川久馬・島津隼人・川上右近・伊集院亘率組千二百四十八名、諸与力二百八十八名、國分士千六百六十八名、阿多士七百五十五名、帖佐士七百十五名、串木野士千四百三十四名、櫻島千六百十一名、市來千四百三十五名、踊士三百八拾九名、蒲生士八百十八人、入來三百六拾三名、薩吉田士五百九拾五名、隅山田士二百九名、加治木士千二百五拾二名、凡一万四千六拾三名、公親發^{〔V.V.〕}、四歳鹿於五拾步許凡獲十三匹、

晦日、命公弟周坊殿次子勝山右近為島津圖書久為所子、閏月朔日、以御軍賦役田中清右衛門綱繩陸御納戶奉行、掌務如故、

四日、出令可俟穀熟以定貢期、

六日、公朝服^{敷斗目御半袴}敬領大家所馱致鶴於府城、乃遣島

津下總久徹如江戶謝其恩、

七日、公臨礮館、方今桜花將日盛開、於是十二日、召國老等三職謙飲賞花、

十四日、命史官編集年中行事、

二十日、公臨忠剛礮第享謙慳旨賜花瓶一箇・折魚金七千匹、忠剛亦獻懸物一幅以謝恩、乃探幽・安信・尚信与画醉吸三聖之図也、

二十七日、公歸府、

三月四日、命撰士人熟武技者四十八名賜蕉布各一端、

於其中五名前既受惠故特賜三端、而如松方正之進勵示現釵又達射術特賜四端、皆褒獎之、

七日、公騎馬如吉野小憩莊屋所、停馬於藤井綴喜別莊、射獲雉六隻吹瘡猪鹿四疋、還舍礮別館、

九日、歸府城、

十六日、公駈馬如伊集院、蒞苗代川陶業所觀製造磁器、

島津久徹抵江戶、

十九日、挾勉学業者賜十^{〔V.V.〕}人太平布・芭蕉布、各有差、

二十五日、使早川務兼照召史職伝之内命曰、宜皆熟覽旧記実録詳審解事每顧問輒俟有以報焉、將親徹觀故予論之、榎本貞皎拜命、

二十八日、賜高年者物、有差、
四月朔日、造于大府行謝使礼、
七日、關老召授之回翰、

十二日、發邸帰国、前此咲咭喇国軍機大臣遣使齎彼国
皇帝所報琉球王書翰、駕火輪船此歲正月來泊琉球、徑
入首里親授国王、且言留滯喚人聞頃不重宜遇加厚、琉
官愈因無辞可拒、又告其急三月達本府、国老島津久實
承旨使川上式部久美、命御軍賦役田中仁右衛門綱繩・
安田助左衛門・松本十兵衛・伊地知小十郎・野元源五
左衛門、令以各有竭思上疏、此月二日皆就久美各拜進
焉、前此疏問朝覲期、大家命曰宜朝初秋、然以喚人留
琉球故又請延期、於是更命曰宜癸八月公之監庶政也、
親著条令三章、其一曰、弘化年中宰相公特降制令、被
禁中外来往酒會聞頃寢弘、爾後近侍皆守旧制、非有要
用宜停往来遵弘化令、其二曰天明制有講弓炮芸禁争勝
負座紊風俗、近聞博賭偏貪銃丸至或闕場亦追贖丸、雖似
励精非士所業、研心文武克循師教要得其妙、其三曰於
衣服制專崇節儉、勿用縮緬或羽二重、自紬大織至西洋
布或綿布類可拆用麤、遽易所貯却因招費避朔望等不咎
平、而如朔望或 上旅邸雖接賓客勿恥履服肩衣袴、

亦自非賜服皆求麤品勿用美服、凡此三章須皆遵守勿苟
違旨、就中近侍衆所瞻望、故今拆麤品頒賜近侍、冬夏
準倣、可以示法所貯美暫因許平服、限寅十二月勉換其
間、此月七日示国老久實等、使山田壯右衛門爲正賜久
實等西洋布各二端、蓋令顧有懲、即日久實・久通・久
浮・久平遍令封内堅守条章焉、

〔下〕二十六日、以御小納戸見習早川務兼照爲本職、

十四日、公臨閱馬於吉野牧、前此禁騎士恣驅牧原、至
是許各馳馬于原、而公臨棧敷遙觀之、騎士咸觀遠近高
低縱橫馳驅凡三百七十六騎、墮者亦多却似猷興、還憩
于莊館觀騎士通行、

十七日、公東帶謁大家神廟於南泉院、

二十日、公使山田爲正命史職曰、凡內庫所貯群籍和漢
若干篇矣、若或欲覽宜以有請必其假之、江田國雅拜焉、
二十八日、命新納内藏久仰以原職知御軍役方惣頭取事、
五月朔日、府土上野藤太郎夜穿出物藏窃官金仟四百余
也、官蒞檢察莫知誰盜、乃聚府下市人等悉雖糺責以竭
按察、無罪可証徒累數日、公聞而恤貧民失產特有所
命、於是五日、其免疑者各得速復產多拜恩、還皆深公
仁德云、既而至七月横目大橋八郎太閤、上野家甚貧乏

傲居妹婿阿多源藏別墅、頃易旧日多買器財貸金於人姿
盡美食如豪富、然乃八郎太初遣按察悉得其実聞以于官、
故此月二十二日、俟渠出勤捕召評定席、竟速水問白罪
狀云、公聞庶士風俗衰頽頤益其甚嗟嘆痛切矣、抑府下
士宅循各所居如鄉里、然因交友別曰某鄉中、而非交友
雖合壁隣互視猶敵相為匪非、故自幼兒每逢行路輒互張
肱方讓却擣起事、微細飾偽爭勝心躁氣怒至揮杖角當偽、
即負亦莫顧恥、

三日、乃公召島津久寶於前嘆士風衰口親降命、士崇操
履劇文勵武為國干城行守礼讓何爭之、有縱爭揮杖非士
氣節、內自父兄外至隊長由忽教誨、寔可嘆息、須命隊
長嚴戒庶士盡改士風、久寶承旨無辭可遁畏服而退、

七日、公臨礮館觀野村彥兵衛發棒火箭、乃八日、及喜
入久通・島津久浮・末川久平・榊山久寬命責隊長、專
隆教誨深戒諸士遍勸子弟勉報國恩焉、

十日、公還自礮館七日赴之

十一日、兵具藏上梁、

二十二日、江戸西丸火、

二十七日、前此庶士之將旅也親屬義故必催餞飲迨往就
舍、同僚設宴備器具埃、而至其還皆饋土産雖久俗習屢

所禁也、由公發駕既在近國老島津久寶等有所承旨、遍
令諸士各宜守制勿苟違焉、

二十八日、玉里館官吏局舍悉備宰相公給事、群官始出
仕焉、此日伊集院氏須生令女於府城、名典姬君、

六月二日、公臨內庭觀成田正封父子及其高弟銳銃士講
習訓練、近侍亦皆令与焉、以二・七日定其課矣、此日
島津登久包還自琉球、

六日、公駕舟如礮館、

十日、召小銃師家末川久馬久長・鄉原轉久〔つゝ〕・種子島
次郎右衛門時習・和田乘助正 於礮館、令各試業以備
英覽人別二十発、末川久平亦趨召侍公側、公使豎山武
兵衛利武賜久長等鉄炮各一挺正甫作三、
勿八分、竣賜謙于前、

十二日、公還自礮館、

十三日、召久平於前口親命曰、四家炮術皆学稻留、猶
宜仍旧而旁就成田正右衛門及子彦十郎・田原直助・木
脇嘉左衛門・岩下新之丞可以学御流儀、各教徒弟永兼
涉之、猶射術師以日置流学、射礼於木上氏世其家、汝
能理会可以諭示、由是十七日、末川久平聚子久長及鄉
原轉・種子島時習・和田乘助於其宅、尽理伝旨各皆敬
服、即聚門弟俾学以修鍊焉、

十八日、公親〔謂服カ〕大祖廟於淨光明寺、

二十五日、公召成田彦十郎・木脇賀左衛門等能熟其法者四十八人、練習大砲及劍銃隊於內庭、竣使木脇試騎銃技馬馴不驚、又使其馬挽大砲後試ヒスト銃云

七月十八日、公臨礮館、

二十七日、命喜入久通代末川久平赴旅權知御軍役事、

二十八日、公如礮館、

二十九日、公召六組頭及當番頭詰衆等四十余人於礮館、

使成田彦十郎・木脇賀左衛門為隊長、率組頭等講習劍銃隊、公蒞觀之竣乃命曰、劍銃本是戰兵技也、然為其將者不知其法不足以麾、因今觀之必復有觀勿怠焉、

八月朔日、還自礮館臨受朝賀、竣如礮館、

六日、卯尅公自礮館如砂揚場、蒞覽六組調練、凡射銃者九百人割四拾八人為一隊、隊長百八人、組頭十八人、掌旗者十八人、持旗者三十六人、大砲十二挺、射之者八十四人、大番頭二人、將其隊始午終末、各整隊列還砲館術、皆拜軍神賜神酒、婦公乃過松原山〔南林寺〕往覽台場復回礮館、

八日、還府城、

九日、公首途謁諏方社進納青銅百疋臨安養院、還謁祇園進納白銀一兩、

皆如旧式、御家老末川近江久平等從、凡御家老之從朝

勤雖為旧例、大慈公時因用不足自減省來、權闕亦久、

此行公欲往還復旧予請老公許之、由之久平從之、自組

頭高橋縫殿種〔マ〕等承土風令同僚相議莫善乎、扞人於其

鄉中取締事、以時蒞席教誡子弟、乃上所拏名問可否於

大目附川上矢五太夫久連、久連以稟久寶乃窃聞公、公聽

如議、於是組頭乃誡子弟勿苟非礼以施乎人、又勿苟非

礼以言乎、各既上誓、而此月十一日、種〔マ〕召命内田武

兵衛正瀨・伊地知小十郎季安・川南清兵衛・郷田源八

等七人、為滑川方限取締人、其他城箇谷方限安田助左

衛門等、岩崎方限折田平八・大山彦右衛門等、之屬每

方限若干人、故正瀨等誠方限、亦惟無他夙夜精勵文武

忠孝可以守誓、若渝此誓約定絕交、

十四日、命御軍役奉行御軍賦役、立人形於犬追物場、

備公親從隊以供英覽其設備也、公所在必建其中、凡府

士以紺分色以四十八人為戰兵一隊、各持劍銃皆隸組頭、

置伍長六人旗具各一、諸郷士以灰分色九十六人為一手

二分為半手、地頭領主各將其隊置物主二人副之、而一

隊備公前、一隊備前右、一隊備前左、一隊備公右脇、

一隊備公左脇、一隊備其後、一隊備後右、一隊備後左、

又備大砲六挺為一隊、每隊兵士七人率之一人將之、通計一萬仟二百八十二人、公臨午乾巡覽、而召田中綱繩屢有質問、竣還府城、此日有命百僚群官亦得寓目焉、十五日、公臨御厩觀習騎法、因選駿馬十五匹益資騎法焉、

十六日、公親謁先廟於松峰・玉龍之二山、

十七日、謁神祖及列祖廟於大雄山、

十九日、季安遷御記錄奉行以唐船改知御勘定方小頭、

野村彥兵衛御勘定方小頭知橫目、皆為御軍賦役、

二十三日、公方將發親著条令九章、其一章積、領事群

官竭精勸農、要民不窮益增戶口以利上下、二章積、那

鄉巡撫守汝誓詞、郡奉行・寺社方等亦深戒酒色、察鄉

榮勞及吏邪正、至遊民類利害得失勸善懲惡各守其職、

三章積、諸士精勵文武不苟負法、至如諸鄉地頭伝令專

正風俗、但雖組頭躬情文武、惟口督責由令不行与俱勉

實、四章積、博謁訪扶旗耆孝子遍恤鰥寡孤獨為治道本、

五章積、音信贈答必分用輕以供禮節、若有求官市人鈞

利厚致賄賂、須堅禁絕勿以被贖、六章積、宏麗居第併

広宅境、自始就藩十八年間大極華美、總是困媒莫如質

素遵卑室語、七章積、衣服制如嚮所令、八章積、軍備

第一為士專務、器械食糧防禦調鍊究思乎治可勵備亂、

九章積、府下諸鄉督察米価賈賤、至甚節上下宜、此条

令猶尽熟議可以行令、明年還国欲觀其効、此日示国老

島津久寶等、乃及喜入久通・島津久浮・末川久平・樺

山久寬遍令封内皆守教命、

二十三日、公發府城、御家老末川久平、御側役豎山武

兵衛利武・名越彦太夫、御納戸奉行鷲頭才之丞、御小

納戸山田壯右衛門為正・福崎七之丞季〔下〕早川務兼照〔下〕

・川上郷兵衛、御家老方奧掛書役上村十左衛門行〔下〕

書役市來正之丞等從舍苗代川、公令從者曰每日發駟以

卯中尅率為定期、衆咸歡悅、

九月二十日、抵大阪邸、

二十五日、溯至伏見邸、

十月九日、先詣高輪親候宰相公起居、竣至芝邸、

十日、訪闈老各第報着府事、

十三日、大家乃使闈老松平伊賀守忠優來邸勞之、伝宜

以近見命、

十五日、公造朝獻家慶公銀五十枚・卷物二十、儲君家

祥公銀五十枚、進見兩公於白書院、行朝覲禮、家老末

川久平、側役名越彦太夫恒〔下〕亦獻贊取調如例、

二十二日、以御小納戸菊池藤助武清、進為頭取兼知原職行御抱守事、是夜御軍賦役安田助左衛門、同書役若元清藏以事至邸、

十一月朔日、公降令、前此中外官吏至筆吏等凡上邸者、至任滿輒必命延期此曰詰重多如例、然至是公易旧制定皆為

二年交代明年正月四日達于藩令群士云

二十三日、公上疏請明年賜告、由患疝疾途厭炎暑欲過木會赴于西藩、閣老許之、

二十七日、兵具所及張番所成、

二十九日、令掖庭曰前此御広敷番頭近年上邸定為七人、公有所慮增為十人、

晦日、召鈴木善兵衛及其老父吉兵衛、為府下士列御小姓与〔下〕西向邸給各三人月俸、其家世執掃帚仕於臺德廟

而於御年寄壽滿有從弟属、故降特旨有此命、

十二月五日、世子始謁神明宮、御年寄志賀浦同典從、自時先後駭步備導衛從、

十六日、公応召造朝、大家進公官位叙從四位上任中將、初公自任少將十有九年、于茲而齡四十三既躡、於校宰

相公陞中將年久矣、以故家老川上久封・末川久平劄請懇款以求榮進、公不聽曰進位任官非求可陞、是吾所志

也、然久封等意、無此榮軫徒過今歲、匪雷闔国遠至琉球亦傷民望莫此為大、因陳微誠私以謀于南部信順君、君乃欲就阿部正弘有以所啓、故使知邸半田嘉藤次歲

典、就奧御右筆組頭荒井甚之丞亦託其事、渠諭告曰、假令無求応自中扞、然請閣老猶其獲宜、而未幾日有此

榮軫云、頃日異船動窺近海、若開兵端以芝邸衝賊火藥有深所慮、乃命国老川上久封求一區別第於青山方、是

時內藤紀伊守信親賜宅在澁谷方広輪菅万八仟坪、又小笠原直之進貞嘉賜宅在鐵炮洲凡三千四百坪、又島津淡

路守忠寬賜宅在白金方、久封乃使知邸等訪內藤・小笠原兩氏、俱定約買澁谷宅於吾藩、授鐵炮洲於信親、授

白金宅於小笠原氏、以各徙易、是月悉償澁谷佃金四千四百兩、鐵炮洲佃金五百兩於其各主、得澁谷一区遂以

稟朝、

二十日、閣老松平和泉守許之皆其請焉、由是割地百坪於高輪邸、授諸淡路守、而不分堺如故、亦以知邸稟大

家、

二十四日、閣老許之、

二十一日、右大將公移徙于西丸、

二十五日、公造朝拜官位恩、

此月公命築台場於洲崎新射場、皆如其命、

是歲公之在江戶也、召学材者賜題賦詩著文以試其材、

重野・上原等即席応命云、

六年癸丑 公年四十四歲実四十五

正月十一日、賞知郎早川五郎兵衛兼彝精勵職事、特進

御側御用人班、米俸職事如故、賞山崎拾積年之勤勞、

進御納戶奉行班兼加御伽、

二十八日、拳宰相公給仕得能彦左衛門通古、為御側御

用人兼行御側役、奧掛書役有馬次郎右衛門陸御納戶奉

行、

二十九日、世子虎壽君始着袴於御書院熨斗目、御抱守菊池藤助武清夫婦侍側扶持焉、

此月新建北御門、

二月十六日、旧臘所拜 口宣 宣旨至自京都、公拜戴

焉、

三月朔日、公有所慮取叔父安藝忠剛時尚存命明年卒之嫡女一、

為公所子使夫人養、時年十九、

十日、賜名篤姬以稟大府告此秋來於江戶、又告暉姬君

亦為夫人養所子、而命国老末川久平預篤姬君事、前此

御年寄小野島竭思掖宮精勤積年、至是公賞其功陞大年寄帶任如故、

二十二日、前此公命移屋久藏及其官舍於府下築地、築

台場於其址之至洲崎、此日起功、

二十五日、以御勘定奉行知御軍役方惣頭取新納內藏久

仰陞若年寄、給祿三百石、班列島津求馬次席、以御勘

定奉行島津登久包代之帶原職、遷御軍役方惣頭取、前

此公請大府製大砲船以備琉球国之運漕、而得其許、故

此月二日国老喜入久通承旨、命島津久寶預參其事、

二十九日、命置野戰砲一挺於今和泉海岸俾備外国寇、

乃官製也、此月先是史館巽有古池、植松數株於其中洲、

公命伐之而堅其地、四面壘石、甃建文庫告峻于安政二年三月、公命

上郎士各定課業、可勉文学勵武芸以勿間居、因使句詭

師上原源之丞・堀仲左衛門、同助重野厚之丞、每朔・

十・二十日輪講大學、每一・六日講示現劍、每四・九

日講天真劍、每一・六日習大島槍、每三・八日習四家

弓、六日・十九日講劍銃砲、十日・二十四日兵具方砲

術、而番頭亦每月兩次必蒞督焉、

四月朔日、開講、凡出聽者四五十人、

四月朔日、北御門成、

五日、御家老川上久封代公謁神明宮行首途式、還代謁御庭三社及稻荷・馬頭觀音・弁天、迨其復命公召觸之開宴賜御野袴、

十九日、大家家慶公遣關老阿部伊勢守正弘、齋卷物三十・御馬一疋・銀百枚來邸、併賜告知例公使以婦國、右大將君亦遣内藤紀伊守信親同來賜告知例、末川久平承旨、率百六十余人講習砲術於江戶羽根田、予告県官御小人目附・御徒目附蒞、

二十一日、公造于朝拜賜告知恩獻寶如例、

此月琉球〔衍力〕告告急、前年大風早魃及厲島皆歲甚荒矣、公乃告大府、凡非官事如私往來、皆將謝客絕贈專用儉約限至辰歲以補其耗、遍令封内亦如之、

五月二日辰〔姓〕、公〔姓〕發芝郎取路木曾、御家老川上久封、御側役豎山武兵衛利武・名越彦太夫恒〔姓〕御納戸奉行伊集院太郎右衛門俊德、御小納戸川上郷兵衛・山田壯右衛門爲正・福崎七之丞季〔姓〕早川務兼照、同見習井上庄太郎正庸・早川黑、御小姓豎山八郎利器・三原藤十郎義福・伊集院卯十郎・菊池藤七郎・長崎隼太〔姓〕田中七右衛門・鷺頭才次郎・中山尙之助・伊東才藏・名越彦兵衛・百千代松・谷村愛次郎・岩山十郎、奥御

茶道重久玄碩・仁禮雪庵・新納軍悅・三原玄甫、奥醫師志々目謙受・戸塚靜海・河野玄中、物頭兼御供目附東郷左七郎實敬、御供目附森川孫太夫・迫水孫次郎・

山口彦五郎・樺山直八・御用部屋書役伊東正兵衛・伊集院新之助、御家老座書役奧掛五代恕兵衛、書役田畑平左衛門、其他新番今井平九郎・和田佐一郎・伊東正八郎・篠崎彦十郎・伊集院喜之助・種子嶋市兵衛・本城直五郎、中小姓定御供中島郷左衛門・寺田平一・田代源之丞・野村與四郎・川上金四郎・田中三左衛門・

龜山甚左衛門・平吉左衛門・相良壯之丞・川井田一郎右衛門・馬場彦右衛門・横山太郎左衛門・木場増太・安田喜三太・肝付尚太郎・蒲池伸藏、御用人座書役兼御先触和田龍左衛門、兼御馬乘家村彦八等扈從、〔姓〕日、公抵奈良井、御小納戸福崎七之丞病死、

九日、以見習井上正庸代之為御小納戸、
十四日、小憩于赤坂、
十五日、小憩高宮、皆賜葛水、
十七日、抵伏見邸、
二十一日、抵大坂邸、
二十六日、旁族淡路守忠寬、品川邸以無所用稟大家、

授邸於久留島韋負家臣有留玄說、此日大家聽之、前此上邸於江戸、京、大坂交承往來者、給西海船賃爲例、此月公特垂憐令授往來九州路供、国老島津石見久浮承旨布令、

六月五日、篤君自_二今和泉第_一移_二居府城_一、

十八日、公至出水、

十九日、公發_二出水途覽_二郷土調練於大野原_一、

是月三日北亞墨利加大船四艘來泊_二于相州浦賀港_一、告_二

急_一江戸闔府_一駭駭、大家屢降令遽設_二防禦備_一、我藩邸若

臨急變、使組頭帥隊下兵各戍邸宅有予所定、方今川上

龍衛久齡戍_二高輪邸_一、喜入壬生久高戍_二田町邸_一、皆其律

令、則命組頭等聞徹發令各趣任所勿苟違令、惟令是竣

莫狼駭云、而十二日、異国船開帆皆去浦賀、然其急變

既達西藩議遽遣衆、

二十日、公舍阿久根乃聞其變、

二十二日_午、公至府城、即日遣御小姓与番頭島津隼人

久典發趨江戸、国老島津久寶承旨、命若年寄島津右門

久福權撰家老帥物頭四本次郎左衛門等、中野織右衛門

爲惣頭取府下戰兵、橋本千藏、湯池八左衛門・村田十

藏・山口吉五郎爲取払、深見休八・池水荒次郎爲宿割、

比志島彦左衛門・大山彦右衛門・上村直右衛門・三原善兵衛・平岡八郎太夫・有川喜左衛門・今村源右衛門・

東郷源左衛門・有馬糺右衛門・橋口權藏・平田茂八郎・

大脇彌五右衛門・皆吉五郎右衛門・野崎次郎・江夏喜

太郎・大山壯吉郎・高田十次郎・本田岩次郎・北郷清

左衛門・長崎正右衛門・橋口甚九郎・白尾貞齋・伊地

知道謙等三十人、其他兵具方与力二人足輕二十八人、

急皆弁裝、

二十五日、發行之戰兵九十六人、馳如江戸守衛藩邸、

此日公巡謁五社及先廟於玉龍・松峰之二山、久福乃裝

二十三日發宅赴之、

二十六日、謁神祖及列祖廟於大雄山、

二十八日、公聞国政、受朔望賀、

七月十日、公駕舟往覽新台場於洲崎、竣如磯館、

十三日、還自磯館、篤姬君首途本府、

十七日、異船至長崎港、

十八日、植村仲藏兼程至自江戸、前此異国所呈書翰翻

訳既成、故大府示公等俾言所考今齋來云、

二十二日、大家家慶公薨于江戸、寿六十一、法諡慎德

院殿、前此大家命和蘭訳解釈亞国所呈蕃字翰、專請通

和好開商法議、其所報關係皇國一大事、閣老以改寫其二冊示公等、使各竭思以疏可否、公藥略曰臣人所願先時既聞、和蘭王遣艦預告其事、又屢得審琉球留滯異人動、所強求非一朝夕事、彼等既知我有嚴禁猶難釀來、至今雖陳禁拒安能承服、因將發兵討以却、亦軍備未修、假令覓却軍艦如城去來如飛、況今許多異船屯泊唐土及諸海島、俟洋窺岸妨吾運漕以寇沿海必勝匪罔、實是一大事、而許其所願給石炭等似畏戰鬪与其所乞、匪翹永年墜皇國武威、对和蘭王亦至義不建切齒殘憾莫此為大、但迨異船來乎明年、忽焉拒願恐開兵端故、且和色莫如乎託事延期、勸開帆回俟可三年、而於其間速命群侯遍戒海岸、多造軍艦悉備可備以建必勝策、若其要地相州浦賀最中所挾、他亦竭議軍備既定、彼雖來寇臨變徵發迨迫其艦何難之有、且其戰鬪第一挾將、將非其人衆不一致、方今天下屬望莫善前巫相水戶老侯、伏請委任老侯以海防事、当此危急非知彼知己以良策獲必勝利實其難哉、伏願精議猶宜迴籌惟命是候、叨蒙朝旨為塞其責、誠恐誠惶敢布腹心頓首再拜、

是月二十七日、就閣老進呈焉、

二十八日、久福等至芝邸、乃詣高輪候幸相公之起居、

此月公命築大砲場於祇園洲、又撤花園於副城為講武場、急起功以夜繼日告竣、

八月五日、公使御小納戶賜久福十字章紹御羽織一領曰、方嚮將發雖以賜因時騷劇至今賜焉、

七日、前此公室自昔有所伝世射法謂之御流儀、至是公有所慮悉以其法授東郷左七郎實敬令以代公、誘進門弟代公教導焉、

九日、篤姬君首途、

十日、因老島津久實承旨、命島津下總久徵領防禦惣頭取議事於御軍役奉行、敵成山川・穎娃・指宿海岸、又命島津豐前久本雖世成梶山、公有所慮兼成志布〔志願力〕・内之浦・佐多・根占海亦如久徵、

十一日、前此停止音楽、文武芸術亦廢業為常、方今特命誘進武芸、於是遠藤但馬守使鶴殿甚左衛門、命諸藩益勵武芸焉、

二十一日、辰尅、篤姬君發府城如江戸、御側御用人向井新兵衛友、御代敷御用人小森新藏正名等從、先是公之始就國也、命有司精稽蘭書使以試造洋外軍艦及蒸氣船、頗通其理、而如琉球大砲船既得官許俾以起功、至是大府嚴命節儉、築堤飾炮以備異船、公乃以為扼堤

發炮雖以覓却窺隙、進寇避難退、洋去來如飛、時我關船不堪尾擊、今試製船專於水軍、為至要器不可不造、然洋外船雖制所禁以利在軍、伏請特議許其製造、且使運漕恒習海洋於海防事、水陸并備可益強兵、因又上請非知彼知己以議必勝不足竭精、皇國泰平不覩軍戰險二百年、方今異國蹈戰爭地所製器械實知利害、所悉創法得其便利、如蒸氣船足觀、蘭書能知其理、由是欲託長崎尹購蘭書、及大小炮有利軍用兵器許多、以資海防備、伏願為皇國允吾微忠、此月二十九日、疏稟大府、前此府士多居吉野土着糊口未暇教育、故命置學校自府學交代教授焉、

九月九日、進御勘定奉行額娃織部久武、陞大目附班列鎌田正純上席、

十一日、以御側御用人高田十郎右衛門利容代之為御勘定奉行、

十二日、大家頒慎德公所遺留物、賜宰相公兼則造脇刀、以寺社奉行島津藏人久武遷大番頭、以御勘定奉行北鄉男吏久〔久武〕遷寺社奉行、以御小姓組番頭兼御用人宮之原主計通哲・伊勢雅樂貞長並為御勘定奉行、

十八日五卜、積菜于聖廟、公束帶獻太刀一腰・折馬金

一枚、上香親拜焉、

十七日、公臨礮館、

二十三日、公臨副城召東鄉左太夫實敬及其門人、令講射芸於新射以備英覽、御家老・若年寄・大目附等趨召寓目焉、

十月朔日、還自礮館受朝賀、英彥山政所坊來朝賀、嗣位入部也、竣又臨礮館、

十四日、還自礮館、

十九日、国老久寶承特旨伝組頭等、賜窮士当室者金各一兩及其家屬人別金各二朱曰、曾聞窮乏既賜米金雖被賑救、猶迫貧苦不得精勵文武、稍向寒節念老幼益至難淡、特發內庫恩惠如是、宜皆拜戴愈勵文武以報鴻恩、

二十三日、篤姬君至芝邸、

二十四日、公親蒞試大砲於祇園洲新台場、

晦日、伊集院氏名曰須磨生令姬於芝邸、名寧姬君、於此日命建府下市每一町閭闔以備不虞、

閏月二十四日、公駕船如祇園洲新台場、蒞試大砲以告竣也、

十一月三日、公親謁稻荷社臨觀流鏑馬、以嗣位始祭故也、

六日、公出放鷹于尾畔夜舍于亭、

七日、又放鷹于下伊敷、

十二日、公巡檢隅日海岸、御家老島津石見久浮、御側

役豎山武兵衛利武・名越彦太夫恒〔ヤ〕御軍役方惣頭取

御側御用人御趣法掛三原藤五郎經禮・御小納戸山田壯

右衛門爲正・川上郷兵衛 御供目附森川孫太夫

・奥御茶道仁禮雪庵 御勘定小頭行御用部屋書

役伊集院新之助 兵道御役者有馬衛守 等從、

自渡戸口駕船渡于櫻島上藤野村、停駕於郷土藤野莊右

衛門家舍地頭解、

十三日、發憩湯村、小憩于古里農民善四郎家、而駕船

如瀬戸村、時方製造大砲船於其海渚、公蒞觀之、竣渡

垂水上海瀉岸、憩其別莊夜舍于邑別館、

十四日、發垂水駐馬西ヶ崎、途過新城小憩大戸浦、行

入花岡停駕牧原、夜舍於其別館、

十五日、發過大始良停駕松之尾、入鹿屋小憩村石、過

大始良駐馬五ヶ尾、經大根占又駐反鋏堀、入根占停輿

狩倉崎、舍大根占解、

十六日、發過田代小憩花瀨蒞觀景勝、抵小根占舍地頭

解、

十七日、發停駕濱走、憩土鑄原、如佐多逾片野坂、駐

馬大曲堀元、舍地頭解、此日国老久寶出公令書、命組

頭聚庶士於其宅俾皆拜聞、其令曰、割六組府士立二組

備、半年交承一備東面一備西面各用迦農大砲名也、亦置小

頭・目附・玉竿・口葉等各一人、抑小頭及目附職非能

弁識其進退緩急之機者、不得臨戰場指揮之、其任最為

要重職、方今試調鍊場多進退耳、而本年亦異船荐來於

江戸・長崎、大家屢命軍備至造大船以拒之、因有所慮

明年交代二組皆整行軍登于吉野原、可以縱橫試其進退、

故家老組・番頭組宜皆守其任各調鍊、以限正月十五日

有以俟命、

十八日、發駐馬于苙之峠小憩于島泊浦、又停駕于赤瀨、

如大泊浦舍郷土岡村吉兵衛家、

十九日、發如御崎、停駕元田尻詣權現社、還舍大泊浦元田尻、

二十日、復停駕赤瀨、復憩島泊、駐馬苙之峠、舍邑解、

二十一日、發堀元停駕于片野坂・大曲、入小根占憩土

鑄原、停駕濱走夜舍其解、

二十二日、發過大根占停駕松崎召覽調鍊、竣如島濱憩

于郷土前田彦左衛門家、發逾石ヶ嶺入大始良又踰橫尾

經白石、夜舍于其地頭廨、先是本月朔日、有帖匿名書

於御樓門者有司以聞、公乃命燔之、因開言路特令庶士曰、凡士以上若有欲言、宜書其姓名、就御側役以拜呈之、其他小吏亦各就官長可以拜進、爾後堅禁匿名書焉、

國老川上久封・樺山久寬此日承旨遍令庶士、

二十三日、發駐馬南村、往過始良憩地頭廨謁賴戶社、

竣又憩反田原如高山舍地頭廨、

二十四日、逗留高山、覽鄉士踊躍又覽馬術、

二十五日、發過波見踰國見峠、入內之浦駐馬天包舍地

頭廨、

二十六日、風雨逗留、

二十七日、發過謁高社還過

舍于柏原浦田邊泰藏家、

二十八日、菱田駐馬 六月、

覽鄉士調鍊於其海渚、竣詣大慈寺及即心院、

舍志布志廨、

二十九日、出自廨覽夏井關、還憩寶滿寺復舍于廨、

此月二十三日

今上帝宣下家定公為征夷大將軍、而公之將以明年朝江戶也、上表有請方通伏日欲如京訪所司代及近衛第、此

月大家許之、

二十七日、於本府命當番頭桂太郎兵衛久〔トヲ〕為一番御小姓与番頭、以當番頭肝付左門兼〔トヲ〕為三番御小姓与番頭、兼奏者番皆如故、

十二月朔日、少將公發志布志、往過松山駐馬田崎、憩

泰野町坂上、進入末吉停輿穩之上舍地頭廨、

二日、發停駕遠目塚、抵都之城舍邑別館、

三日、發行覽菖蒲原過郡元村、覽古於祝吉御所址謁稻

荷社、停駕野々三谷又覽森田陣跡、小憩茶園尾往舍高

城廨、

四日、發逾國見峠行狩山中、抵去川憩二見休右衛門家、

出于闕外駐馬上八重赤谷、而抵高岡舍地頭廨逗留三日

出如田尻途駐馬於宇津野善哉防等、詣法華嶽覽身投嶽

停駕於深年長野九郎右衛門家、還地頭廨、

五日、又出覽月知梅於香積寺、如穆佐詣悟性寺、聚閱

外土於其河原令調鍊砲術備英覽焉、竣還詣栗野而舍廨、

六日、又出過身投嶽詣法華嶽寺、竣如昨日、

七日、覽鄉士武芸、

八日、發駐馬赤谷詣本永寺、往入野尻過紙屋憩西田利左衛門家、又駐馬天ヶ谷舍地頭廨、

九日、發過高原停駕于解、行憩神德院又憩錫杖院、往駐馬于小塚鷲巢、進入小林舍地頭解、

十日、發停駕西之原覽鄉士調鍊、竣過飯野憩大河平在番所、主人孫八郎隆慶獻膳、竣又駐馬于飯野解、抵加久藤舍地頭解、留滯三日、

十一日、出放鷹於加久藤・飯野諸所、

十二日、亦出放鷹停馬金丸及坂之上、還舍于解、

十三日、亦出登白鳥山小憩満足寺、

十四日、發途放鷹、過馬關田・吉松憩於其解、往抵栗野駐馬熊峰、舍地頭解、

十五日、發詣若宮八幡駐馬於耳取峠、往經橫川憩於其解、入山箇野巡覽金山、

十六日、猶逗留遊覽諸所、

十七日、發金山往謁霧島、舍花藏院、

十八日、往覽榮之尾又覽犬飼滝、還舍花藏院、

十九日、發霧島停輿于田口村椎原八郎次家、過姬城停駕山野、抵國分舍地頭解、逗留兩日、

二十日、出放鷹於上小川敷根湊小村新田、府中向或召覽鄉士武芸馬術、

二十三日、發過清水憩郡田農嘉左衛門家、詣日吉山王、

停駕於臺明寺憩彌勒院謁八幡廟、駐馬松箇平、抵加治木舍邑主館、

二十四日、先是物奉行知御軍賦役福島半次郎・唐船改行御軍役方書役相良彌兵衛承旨、移檄乎公所巡檢二十二鄉自松島至鹿兒島郡吉田、使各籍御備組姓名皆聚其人数於帖佐棕瀨磧、就御軍賦役坂元彦五郎以俟駕、至此日公發加治

木如帖佐鍋倉村、前此鉄鋼產乎石州、而封内未產、公命有司遣人石州受其製法、採砂於大隅及筑前石見等浜、開鉄山於帖佐銷爛為鋼、由是此行公停駕鉄山、又昔泗川之役方聚首級、松齡公聞狐死戰場命大慈寺襲之衣修

法葬焉、俗謂高麗稻荷、以故公特謁之、竣至棕瀨磧乃臨御棧鋪、時所聚諸鄉及大河平孫八郎隆慶等、各整隊伍進退調鍊以備英覽、皆如上籍、竣公乃如蒲生舍地頭解、

二十五日、發自蒲生停駕涼松及大狩、入吉野憩于庄屋解還府城、

此月六日、以若年寄新納駿河久仰陞御家老職班、列樺山伊織久寬上席、以御勘定奉行島津登久包為若年寄、預御軍役事如故、

十日、以御小姓与番頭小松相馬清猷、帶原職兼御軍役

方惣頭取事、前此所命上下市每町構闕亦此月告竣、

安政元年甲寅 公年四十五歲実四十六

正月元日、公謁五社国老島津豊後久寶等從、竣還府城

受一門三職等朝賀、

二日、邸報至自江戸得、閣老阿部正弘伝命曰宜發正月

朝覲、

〔日之〕
四月公乃令装、

九日、公臨伊敷放鷹、召島津登親命講武吉野事、此日

命新納久仰權領琉球及改革内用事、

十一日、以詰衆島津右膳・物頭伊集院靜馬並為當番頭、

以町奉行田原藤太左衛門為御用人班、

十二日、種子島彈正久珍卒于種子島、先是大家之嗣位

也、以琉人朝于江戸為例、以故旧臘公上疏問其期、至

是閣老阿部正弘此日伝朝旨曰、宜率琉人在辰年焉、

十五日、以詰衆新納次郎四郎・島津郷十郎為當番頭、

御鉄砲奉行川上正十郎為町奉行班、御側役山口直記利

紀陞當番頭職掌如故、御小姓組番頭高橋縫殿・當番頭

伊集院隼衛兼行御用人事、

十六日、国老島津久寶代公謁諏訪社行首途式如例、

十七日、辰剋公騎馬出府城、親閱東西軍備於吉野原、

六番三番二組士三百余人、前夜限于丑牌悉聚于吉野、

各整其列守律發砲、其他四組士七百余入島津登將技

龍備令各發砲背律騷亂、登怒声誡之、凡八百三十四人

還舍礮館、前此御側役豎山武兵衛利武承公旨、迨將以

伝由利武亦從如吉野、此日御側役山口直記利紀代利武

命、御記錄奉行伊知地小十郎季安、同副役町田孫一郎

俊德・同見習佐多佳八郎直盛皆帶原任領古御文書取調

事、而公發輿後命名越彦太夫恒預其事宜亦識焉、

十八日、公自礮駕舟渡于櫻島、前此命造大砲船於瀬戶

村、故公往觀之而歸府城、○前此試砲術於調鍊場許三月

至八月間、至是公特許不論四季各可恒試焉、

二十一日、已上公發府城、国老島津久寶等從、

二十四日、小憇于高城移平、時会邸報至自江戸曰、本

月九日亞國異船漂來於相州浦賀之海洋九艘碇泊于港、

江府駭駭、乃以十三日發云、由是二十五日、遣上野司

為物主、与御軍賦役松元十兵衛率戰兵、木脇賀左衛門

・向井十郎太夫・日置半兵衛・二階堂與右衛門・岩城

三左衛門・有馬雄之助・川村與十郎・染川伊兵衛・谷

山次郎右衛門・上村四郎右衛門・相良勇右衛門・竹内

勇藏・岩下新之丞・仁禮平右衛門・伊集院常安・谷山
晚翠・鼓貝与力二人・足輕八人及出水・加世田・顯娃
等郷士九拾六名趨如江戸以備其變、至二十六日遽皆發
行、此月異船數艘漂来于川崎洋、稍將進入江戸近海、
大府乃使御目附急戒藩邸守衛海岸、

二十六日、命島津久福帥御使番・御目附等戰兵一百七、
兵往成高輪邸、方其屯成宰相公及国夫人英姫君・世子
虎壽丸君・勝姫君、屢犒其勞恩賚有差云、

二月十三日、国老久浮又承旨、又遣御小姓組番頭島津
藤馬久（イマ）為物主、帥御目附肥後五左衛門・御軍賦役永
田新八郎・書役助永田直右衛門・小頭川上班之進・林
小十郎・吉村才之丞・村田次右衛門・松元鐵之助・伊
勢勘兵衛・伊東藤七郎・細江彌右衛門・長束八郎次・
榎本十郎・前田十郎十二、兵粮玉葉奉行皆吉金六町田孫六病代

川上武右衛門・使番北郷八右衛門・旗頭毛利喜平太
・兵粮玉葉方福島助右衛門・野崎吉兵衛・坂本猪之助
・田原五兵衛・貴島新左衛門中江仲之丞代・大迫新藏・医師
池田龍悦・重信怒成、其他高岡十一人・小林八人・飯
野二人・財部四人・國分五人・福山二人・清水四人・
隅山田四人・蒲生六人・鶴田四人・樋脇四人・川内・

高城二人・東郷四人・伊集院四人・大口六人・山崎二
人・鹿屋四人・出水五人・加世田五人・川邊三人（イマ）・
城三人・兵具方与力二人・足輕八人、各急弁裝馳如大
坂令以候、統二十日至二十一日皆發赴之、

二十五日、公又降令凡冠婚等雖開慶宴、專尚節儉竭力
軍備可以各立士氣毋徒酒会、国老川上久封・島津久浮・
新納久仰・樺山久寬承旨遍布令焉、

二十七日、安藝忠剛卒于磯別館、老公心喪一日、此月
大府与亞船和約成多開帆去、由是二十七日、島津久福
等引成兵還于芝邸、皆命也、公之薨如江戸也、命国老
久仰等曰、凡於軍備宰相公有深所慮建砲術館令以勉勵、
況今異船頻来覬国、大家特命戒海岸備、因習銃隊不抱（拘之）
老幼須皆精勵、長者相議誘進幼者以勿懈怠、至此国老
降旨諸組頭各指揮隊下、

三月六日、公急兼程至芝邸、
八日、下町火、今町儼者赤田金助戌尅失火、延及九百
九十五軒、土蔵二十八、至翌晝滅、
十三日、大府使閣老松平和泉守乘全来邸勞之、
十四日、公命上邸守衛家人各給米俸如躬在職曰、因異
船来泊于浦賀遣人守邸、今聞家人迫于貧苦故特給焉、

十五日、公造朝獻例贊進見大家行朝覲禮、大家口親懇言、公亦敬对如例、公之將發也、命諸組頭及當番頭等為小頭率百僚群司聚、自辰尅修鍊炮隊於犬追物場、此月二十六日始肄其業凡三百十余人、乃御家老・若年寄・大目附亦蒞焉、

四月五日、若年寄兼領御軍役事島津登久包承命、博稽蘭書指揮諸組頭・當番頭・詰衆・大身分等、令以設騎兵隊俱肄銃砲於調鍊場、始自此日、川上久封亦以国老与焉、

十九日、拳御納戸奉行班知御軍賦役田中仁右衛門綱繩為御側役班知御軍役奉行、

二十二日、前此公命遣府下土有馬洞運・谷山土小倉玄昌・郡山土岩崎俊齊遊于長州、就学和蘭訳於青木周鼎之門居凡四年、亦遣府士八木玄悦遊于浪華学和蘭訳於緒方洪菴、既而是歲迨公過長州、命洞運等三人皆如浪華学之洪菴、玄悦乃適学江戸、於是此日賜三人金各四兩資旅費焉、又公之過伏見也、使島津久寶詣近衛第為虎壽君請娶信君乃許其婚、因公又此日使知邸半田歳典就聞老阿部正弘第告実談之、正弘亦賀焉、因命久寶致諸大夫中川讚岐守・今大路民部少輔書議上其請、

二十六日、宇和島侯伊達正城江守任遠請於公、欲使其臣就学西洋砲術於田原尚助、公許之、政城乃來謝饋尚助袴地二端、

二十七日、公命復造反射炉、以江夏十郎・市來莊右衛門・濱田平右衛門令預其事、命三原藤五郎統督焉、此月閣老降令諸藩曰、亞国異船皆退内海、但留泊日縱橫犯禁殆雖將以至開兵端、猶水軍未至全備、且枉心求如左、其一恤漂民、其二航海薪水食糧若遭其乏之求救所求、其三來乞定港於下田及箱館以助其願、皆權聽之、故所嘗戒水陸軍備益嚴脩築、若臨急變皆各奮關宜振国威以擊却、

二十八日、国老承旨遍令封内禁錫出他邦、

五月、公念育士材在精勵文武、堅誠諸門禁漫出入、親著教令朝日示御側役豎山利武・井上逸作・山口利紀、乃聚御趣法方御側御用人以下近臣群官、使御右筆有川直次郎誦以拜聞、利武等亦暢所承副乎其後、使御用部屋書役伊東正兵衛誦以達之、竣利武等視之、島津久寶令以識焉、其略曰、侍中庶官係外官瞻望恒正心身覃思文武、宜励夙夜以学其道、方今諸郷守衛多上藩邸愈守操履、勿苟言動穢乎非礼、而凡出門可專竭心、予抚善

惡往知地理雖固非惡、為遊樂出實是不善勿必新旧互陷弊習、就中他邸点檢出入可以嚴密、尤有用出受側役許勿恣出門、每事旧吏能教新吏勿令疑惑、新年規式如對賓客進膳羞礼周旋中規小納戸等頭取見習、平常蒞席可令肄業、利武等承其親令、

二日、前此書籍方岩城三左衛門・岩下新之丞以砲術小頭上邸江戸、精勵調練皆迫貧苦、以故国老久寶・末川久平有所薦舉、至此進岩城御徒目附、賜二人金各二十兩、職皆如故、

十一日、布令直觸以下群司曰、若臨急變撰於汝等列可任物主小頭以有徵發、故每式日輒必聚于砲術館及調練場、宜皆注意以識得其進退運動、此日久仰遍令焉、

十三日、先是亞國船之來神奈川洋也、上邸諸士守衛藩邸頗有功勞、至是公使豎山利武賜末川久平・島津久福牡丹或桐章御帷子各一襲、島津久典御平服上一具、竣久平亦承旨、此日使島津隼人久典皆褒賞金銀、各有差、時公探聞利武任所其他國分・加世田等土物遊品川、使利武命安田助左衛門堅誠其門禁出入焉、

十五日、前此近衛氏諸大夫今大路民部少輔等所報久寶回翰^九此日達邸曰、右府歡喜、將以來月七日就三條亞

相實萬・防城前亞相^[A4]以奏請

禁庭、君侯亦応以其日稟于大家、

二十一日、閣老阿部正弘召知邸西築右衛門、告明且公趨彼第、

二十二日、卯上尅公趨謁正弘、乃視一策以有問曰、亞人若問琉球事將如何對因今授之、公對曰、退視臣等宜竭精議有所對、既而辭歸写示久寶俾加熟講、乃敬對曰實惟枢要視同列等、以問琉球摂政・三司官、然後莫如処置其宜、

二十三日、公使豎山利武齋閣老所視策及久寶等所議疏詣高輪邸、因永江休之丞以備宰相公英覽、而未幾

二十四日、閣老正弘夜徵西築右衛門、西乃趨第、正弘曰往馳可以伝于君候、前日所視策因有急用明旦須必速見還納、

二十五日、味爽築右衛門馳回以聞公、公乃使豎山八郎利器馳高輪邸、以告実取閣老所示策、又命田中仁右衛門綱繩馳人急召利武亦馳造朝、乃使御用人忽聚從隊、卯尅公出邸趨阿部侯第、面謁正弘返所視策、且於其文欲請添削、附熟講書二通久寶等疏一通、正弘亦觀領焉、頃間錫山所出錫壳之於長崎・大坂・江戸、価甚貴焉、

於是此月十九日、公獻其所獲金千兩於宰相公、為國產始也、此日国老蒞觀組士演砲、而命六組可隔日澆勿各怠焉、

二十四日、前此公拜戴所叙任口宣宣旨、使御記錄奉行汾陽彦次郎光遠護送帰国、此日至自江戸、公之將発也、命大身分以下百僚群司修鍊劔銃隊於犬追物場、而今公在江戸聞、皆合心益多聚以肆其業、特命褒獎、俟明年還適宜精勵將親賜覽、

此月二十三日、国老嶋津久浮・新納久仰承旨令伝愈勵焉、時又大家与亞国船所条约令達自江戸、亦二十六日久浮・久仰伝預事有司以令議焉令見于前四月

六月 皇居炎上、今上御劔為火所燔、欲求名劔更備御劔、窃賜右府忠房君震震翰、洩公 叡慮令以進獻、

三日、原田才輔詣近衛第、君乃召前伝公密詔、窃視震翰令致叡慮、由是四日才輔致豎山利武書啓公左右、其密詔曰、薩州深切万端懇志未足叡歡、猶且有望似心耽欲雖顧甚愧、火後一劔惟是欲求、余略于此、君亦密以伝公詔、俾必以獻可尺在銘短劔、而如其飾君命官工欲歷 奏聞從所親詔、且君又伝才輔曰、凡因炎上領事

官司議所獻品、而於君意有所不協希、如君侯永以獻品宜貽名姓於 禁闕、昔織田信長所獻 鳳輦亦為所燔、則今公獻以備遷幸、万歲無窮何榮易焉、誠恐誠惶隨命啓上云、

七日、公応京師約上願狀、請為世子娶近衛氏令姫、就御先手渡邊下總守以呈之閣老松平和泉守乘全、

十一日、原田自京致利武書此日達邸、

十三日、国老蒞觀三六二組士講砲隊於訓練場、

十四日、畿内地震、至二十四日無動暫止、

十五日、大坂知邸聞說飛報大地震于伊勢・伊賀・大和、屋舍多倒至有压死、

二十三日、堀與左衛門自琉球帰至山川、此日命罷滯坂守衛、

二十四日、各發坂邸、此日大史江田國雅・新番伊東善兵衛護送御判物發府城如江戸、旁族佐土原侯亦從行如之、

二十五日、国老蒞觀一四兩組砲術、

二十六日、右府忠房君因嚮所諭又遣公書、命原田才輔及得淨院使遽以致豎山利武書啓諸左右、
二十七日、国老又觀二四兩組講砲隊、

二十八日、堀與左衛門発府宅馳如江戸、其在琉球也、亞船来自江戸示与江戸通商之約条、強欲如其約、琉人固辞、異人不聽將開兵端故枉応之、因告大家令報寔、此日虎壽公揮筆始習書、中山次左衛門侍焉、

晦日、国老復觀三六兩組講砲隊、

七月朔日、前此公得大家許、乃命三原藤五郎・御船奉行橋口左衛門・田原尚助等、製造大砲船二十四間二及十間各一艘、蒸氣船於隅州牛根郷、此日起功、先是公造于朝如年賀、輒必束帶從隊、皆冠觀世折烏帽子、蓋近世訛也、至是公有所念復大祖旧改、命帽匠製島津折十五頭以授從隊令各冠之、惟是無他道安所謂島津折即御所折、而唯左焉耳御能方冠如故閏七月、国老川上久封布令焉、

十一日、以奥御小姓伊集院藤九郎兼直為御小納戸、大坂衛兵還自大坂、

十六日、大坂飛檄達于江戸地震告也、此日堀與左衛門還自琉球馳至江戸、

十七日、牛根所製大砲船龍骨既成始居海汀、

二十日、公聞堀勲勞、使豎山利武賜金百三十兩褒賞焉、二十五日、国老蒞觀砲術於櫻島、前此原田才輔自京呈利武書二日達邸、利武以啓公、乃拜密詔於所世伝宝

器以國光銘且適 勅尺、敬復君書此日附其回使請以進獻焉、

二十九日、虎壽公始淨写以呂之二大書、前此亞墨理幹船来泊琉球既報本府、公亦雖聞將俟其退併告大家、至是公又以為、若来月亦於無報告將告美長崎鎮台、故使堀與左衛門速歸国伝命於琉球、令倣下田例応亞国求亦結約条、可以告諸其鎮台、先此公之過伏見也、使国老島津久寶詣近衛第、為世子請娶信君既得許婚、借稟大家亦得其許、故此月十八日、公遣国老末川久平往納徵於近衛第、君夫人亦遣御広鋪御用人岩正次郎兵衛、副之、

晦日、宰相公以特恩赦名越左源太・山之内作次郎・脇岡五郎太・松元一左衛門・村野傳之丞・和田仁十郎・島津清太夫・吉井七郎右衛門・新納彌太右衛門・近藤三左衛門・大久保次右衛門・山口不及、令召還自海島、閏月朔日、久平等至錦藩邸、

二日、前此公欲進獻所送古笙既至錦藩邸、乃知邸田尻次兵衛与得淨院俱抱詣近衛第、右府忠熈君親大感賞、乃召衆人令視監定、衆人一見則亦感曰、惟昔聖德太子所愛玩而名太子丸、其後伝于聖護院宮尚存關東、以有

美音飾画鈴虫、因易名鈴虫云、故君伝田尻曰、由笙亦名器応以執奏請併御小篋司二品之進献、田尻拝旨、前月十日所呈飛檄此日達邸、利武以聞左右、此日上村直右衛門・大山彦右衛門等十四人経木會路還自江戸、前月二十五日、比志島彦左衛門等七人回自江戸亦一列云三日、堀與左衛門銜命発邸馳還本府、

八日、忠灑公使御用人林縫殿・松井丹後介、致知邸書召両使明日造第、

九日、久平・岩正導田尻次兵衛詣近衛第 服熨斗、目長袴、暫候

竹間、因御用人林縫殿・松井丹後介陳公所献聘贄、以拝進如口辞目次、躬所献亦中外具書、而進見亞相忠房公・右府忠灑公及信君於奥御書院、為虎壽君拜許婚恩、

竣賜盛膳 一汁三菜 并薄茶御菓子、時信君亦臨手賜人形及御菓子、且使得淨院以 帝皇所賜御菓子頒亦賜之、既

而帰邸、

十五日、英国船四艘泊長崎港、求開互市強之不已、

十七日、久平応召又導知邸詣近衛邸、陳公献聘贄進見忠灑公於大御書院、先拜四ノ間牧徳治讚之、進自三ノ

間踰二間闕膝行登上壇猶進踰塗闕 進横臺、二重目、手賜熨斗敬戴納懷拝退如進、竣又陳躬贄再進取謁退伏竹間、時忠

房公・忠灑公又臨大奥、使御用人近召于前口親各伝答辞、且寓意松樹以賀伉儷親書所詠、使御老女村岡賜之久平、即御懷紙也、

松によせて祝の心を

忠灑

万代の契りをこめて二葉より

ゆく末しるき相生の松

久平拝戴、迨其将退、忠灑公乃留於二間賜御手提一組

三重上御、中御、昆布下御干菓子、信君亦賜御菓子篋筭四重 皆御菓子 且賜慶宴御

物誂子御料理至三膳、薄茶濃茶御菓子二膳、就御用人謝恩回邸、此日又忠灑公色

紙五枚・紗綾三卷、忠房公羽二重二疋・真綿五把、信

君縮緬二卷・紗綾二卷、皆使坂戸寛次郎齋訪邸各賜久

平、

十九日、詣第謝恩、

二十一日、久平事竣発京帰国、此月十三日嚮公献京短

劔達于二日、原田才輔乃持詣近衛第、忠灑公大歎、乃

三日持入 禁中進備 觀覽、帝特感喜曰、此是云國

光銘 新藤五國、光裏有銘 云短刀尺、实可謂家伝宝劔惇適朕望、忠灑

公亦深感其忠、乃召臣伝旨尋又論曰、加之飾則当挿小

刀因献薩工作益其具足汝宜有告、於是才輔七日裁書以

呈豎山利武此日達邸、利武以聞公、

十七日、大家服闋始詣神廟於紅葉山、公獻御樽肴賀新政也、

十八日、閣老久世大和守廣周奉書答之、

二十四日、世子虎壽丸公昨朝習書如常、自午罹疫發熱頻痢、丑刻竟天於芝邸、年六歲、

二十六日、遺毛葬大圓寺、告大家以二十七日、号曰覺法院殿、

二十九日、葬大圓寺、乃公使御小納戸川上郷兵衛如京師告世子訃於近衛第、

晦日、公寢疾自哭世子悲傷、至此療藥効少、中外憂懼、八月朔日、近侍相議、凡限七日告禱於目黑不動、

三日、井上逸作代謁焉、

四日、設中陰筵迄六日、行仏事於大圓寺、山口利記代謁焉、

五日、川上郷兵衛至京邸、

七日、公病間召国老島津久寶・豎山利武・山口利記等二十三人、入見寢室、賜茗及菓糕、近侍皆微得解憂焉、

八日、目黑因祈禱竣至此酬愿、井上逸作復詣代謁、時老女八十島繼其祈念有亦所請乎、利武等曰、障姫君、

寧姫君今也皆雖非有微恙預禱之、故二君乃薦各金星亦逸作代謁焉、

九日、忠熈公使林縫殿召知邸田尻次兵衛致旨曰、世子訃音於以使告殿下、亦雖応遣使以慰答、火後 帝屢被

臨幸、皇家宝器悉假吾藏晝夜警衛、由不可闕無人可使唯宜託卿以謝失礼、

十一日、久平抵伊集院聞邸報馳告世子訃、乃夜急程寅尅婦宅、此日百僚群官候公起居、

十二日、久平造朝報事、
十三日、川上郷兵衛在京詣近衛第以行使事、 忠熈公

召見於表御休息所口親懇答、
十四日、川上發京、田尻亦俾伝此回報、殿下聞訃心喪

三日素食停樂云、

十九日、前此公命薩治工正良・正平、造小刀各一刃至是皆成、乃使豎山利武此日檄致原田才輔、持詣近衛第

請拵獻、宜才輔報之^九、忠熈公乃以正良獻 帝、親留

正平取吾用、

二十六日、御広敷番頭町田孫七・同知横目丸田孫左衛門・同番家村助之丞等、奉覺法公遺髮、此日辰尅發大

圓寺、

二十八日、前此邸報言公亦罹疾聞者惶憂、国老乃令本

田加賀守親德此日告禱於諏訪廟、先是、公命有司開鉄

山於隅州帖佐、雖遣人石見受鋼炉法、昨午公臨猶念未

熟、命大坂知邸菱刈七左衛門挾迎雇其精者於石州、時

有兩人曰善九郎・金左衛門者迎來坂邸為七月、乃使林

正之助護送抵府下閤、此月預鉄山事赤塚利助率往令練

熟焉後三年安政四年命隅州冶正正光、以其鋼造二刀備英寶、時赤塚

請刻事於銘、公觀其文曰野郎善拙誰挾其材可以讓宜、赤塚乃屬

諸季安、故銘其一曰採石州砂銷爛為鋼更鍛造之、又銘其二曰採筑前砂

銷煉為鋼更鍛造之、皆刻冶隅州正光並裏鋼安政四年、今因言創註成

功、又公之如東也、恤士風頽、命新納久仰竭精教導劇

文勵武專崇節義、遍可以令一新士風、公今在江戶聞未

有効、此月降命愈促前令、久仰承旨亦誠群士、

九月十日、由公辰年朝觀率琉球人、島津兵庫久長承旨

撰公位召命国老末川久平、護琉球人往返江戶、

十三日、頒覺法院君遺留物賜国老等、島津久福乃拝領

御書物一匣五經全部・御長袴一具・御熨斗目一雙、末川久

平時在藩府、島津久實檄致御長袴・御熨斗目以賜之十一月十二、日拝領

十六日、以故虎壽君御抱守中山次左衛門陸御納戸奉行、

菊池藤助武清遷御小納戸、

十八日、魯西国船來泊大坂上天保山岸、齋其王翰來獻

之、幕府乃命返其船泊于下田若宮館港、

二十一日、島津又四郎貴敦撰公位、命大番頭島津藏人

久武為若年寄班、列島津求馬久憑次席、

二十八日、公奉大家命所製造於牛根之大砲船至此

竣功、記預事姓名於其檣、名曰昇天丸、凡長十五步、

十月五日、世子遺毛至自江戶乃葬福昌寺、

六日、国老蒞觀六組士砲術於其館庭、始巳終午、每

組凡三百余人、至十五日隔日皆竣、前此

禁庭宣下大府家定公襲將軍任前年十一月、更御判物以賜諸

侯為例、於是十三日、若年寄島津伯耆久福導御留守居

半田嘉藤次歲典、使御記錄奉行江田五郎左衛門國雅等

宰領公所呈御判物、以詣於本多中務大輔忠氏第進呈忠

氏、忠氏悉納焉、

二十五日、国老三職蒞觀百僚群官砲術於犬追物場、

十一月四日、辰尅大坂地震、屋舍多壞、因此火起、備・

藝・坊・勢・參等至豐後諸州尾莫不震動、如志州川決

流舍、自古患難死傷無如此云、

五日、府下地震、

六日、国老久仰承旨、召老年猶勵砲術者百有余人佗褒

賞焉、

九日、申尅北亞墨利幹異船飄于山川洋、順風稍過、指宿、將逾智林島、時山川群吏飛舟呼還、故碇泊於貝柄州、郷吏乃馳告本府、

十日、遣末川久馬馳如山川、国老新納駿河久仰等乃遣御軍賦役坂元彦五郎・同書役野村仲左衛門、率唐通事等往応接異船、因其所駕唐訳死乎海洋、言語不通播手僅察亞船以薪水乏來欲求之情、乃令応乞以飄去、然猶滯泊如掉扁舟測量綠海、故郷吏雖出哨船示警察意、留泊如初、命島津勘ヶ由・北郷作左衛門・樺山主殿・入來院平馬急装疾命、夜命遽設大砲於調練場、新橋下祇園洲益備焉、

十一日、彦五郎等又以飛報、由是国老新納久仰・掛御用人末川久馬久長等馳如山川、

十三日、島津下總久徹帥書役市來連右衛門亦如指宿、
成摺之濱、

十四日、大番頭島津隼見久徹領大砲隊惣頭、率目附高田猛八郎・四本休次郎等三十六人、小松相馬 以西目備惣頭取率一四兩組士百九十六人、皆赴之、北郷哲五郎久將代組頭桂内匠久 罹疾權充組頭亦赴焉、各所率隊下多馳統者、久仰等指揮令以開帆、

十八日、辰尅異船竟去、而比午昼不知所飄、
十九日、官吏發指宿舍喜入、
二十日、皆還、

二十一日、異船來泊種子島上岸測量沿海揚帆回去、不知何国、乃二十五日、遣末川久馬馳如長崎報事於鎮台此月命寺社奉行島津勲負久、領大砲隊領隊此曰惣頭後皆做之戍祇園洲、以五番組頭川上右近久照領戰兵戍田之浦、當番頭島山藤次郎義 權充惣頭副之、組頭町田主馬久憲・當番頭島津郷十郎久度領六番戰兵戍上築地、寺社奉行島津相馬久平領大砲隊戍都城第波門、五番組頭伊集院巨久 島津隼人久 領戰兵戍新橋及入來第辺、六番組頭高橋縫殿種 領戰兵戍江戸橋及金藏下通、詰衆川上孫左衛門久 權充惣頭副之、四番組頭義岡藏人久・諏訪數馬武盛領戰兵戍石燈籠街道、當番頭島津隼人權充副之、二番組頭菱刈奎之介隆徹・比志島靜馬國 領戰兵戍砂糖蔵辺、當番頭川田將監 島津健 權充副之、三番組頭鎌田典膳政純・當番頭樺山權十郎久中領戰兵戍南林寺下、當番頭關山糺金生・詰衆島津權五郎久 鑿權充副之、御勘定奉行伊勢雅樂貞章領大砲隊戍大門口、御勘定奉行宮之原主計通哲領四番戰兵戍調練場、

当番頭島津勘解由久 領佐志兵戎華倉、末川愛之助

代養父平馬 領入來兵戎儀別館、重富邑主周防忠教公

子將邑兵戎鶴江崎、加治木邑主島津兵庫久長將邑兵戎

木綿織屋辺、宮城邑主島津圖書久治將邑兵戎御作事方、

此月賜高橋縫殿・町田主馬金各百兩褒賞精勤焉、又命

島津靱負・島津相馬・伊勢雅樂・宮之原主計實無賴令

以謹身焉、是歲御軍役方惣頭取兼務川上式部久美之任

琉球、於是十二月五日改元安政元年、前此嘉永七年也、

六日、拳四番組頭諏訪數馬武盛、令帶原職兼知御軍役

方惣頭取事、

九日、命御軍賦役福島半次郎・表御小姓白尾登五右衛

門代御勘定方小頭・御作事方下目附高崎孫四郎・藏方目

附知御作事書役濱田民左衛門、率志布志等四郷士四十

八人及從僕百余人、急裝往衛江戶藩邸、

十三日、前此所造大砲船成、始自櫻島來府下浜、

凡長十五步、橫四步余、受米二千五百石、左右砲門各

置十挺、觀者甚多、

二十三日、今上皇帝深患外寇宣旨天下、令銷鐘

鑄大小砲備要衝岸以擊異賊、其詔曰頃年墨夷

船來泊相模、今秋亦魯夷入畿内海、國家急務實在海防、

因諸国寺院各弁時勢、除名器報時外悉可銷之以擁護

皇国云、

二十四日、国老始駕觀大砲船蒞試發砲、

二十五日、福島半次郎等衛吏發如江戶、

二十六日、改元令達自江戶、

二十九日、罷横目黑葛原周右衛門・川上藤九郎・山本

納助・今村太郎左衛門・仁禮源四郎・三島八郎・橋口

彦八郎、藏方目附木脇彦左衛門・是枝小左衛門・東郷

善次郎職、皆久監事雖練達吏務有名、以酒色至贖名声、

故令諭旨自謝其愆焉、

十二月二十六日、改安政元年、

安政二年乙卯 公年四十六歲實四十七

正月十一日、進御小納戸早川務兼照、加十人月俸、

二十三日、公子周防忠教君及令息久光公ナリ又次郎忠德君・御三

役等多駕觀者、命曰昇平丸、黒帆裾、

二月十三日、使御船奉行石原龍助駕其船、發自前濱如

山川港颯東洋、

二十三日、開帆、

三月十八日、始至江戶、奥州儒臣大槻平治駕此船乃為

詩曰、

四海三櫓我一櫓 驚看新造擬西洋

只応直筆伝千載 日本軍艦是濫觴

二十八日、大家遣使賜宰相公鶴令鷹所捉也、

二月五日、復遣使賜鶴如之、

十四日、国老蒞觀備東西及長崎砲隊調練、凡三百五十

余人、

十九日、併土佐侯中邸附三田邸、

二十四日、国老久仰奉命率預事官吏巡檢東郊鄉里、為

察武備勸農飾否觀民榮勞也、

五月六日、久仰還自巡檢、

二十六日、罷_二島津又七郎職_一令_三終身幽_二居于永吉_一、

婦_二養母_一以有_二醜声_一也、亦去幽于今泉、乃忠厚季女、

而命旁族島津權五郎入嗣宗祀、

三月、此前公寢疾藥禱竭_レ力得以全痊、於是六日、公

開慶宴於掖庭、因島津久福等獻金三星以奉寿之、公亦

賜麻袴地二端、時宰相公賜金七星、皆拝領焉、

十六日、納覺法君遺毛於福昌寺、

十七日、令百官群吏勿陳貧苦貸金官庫、

十九日、自前年閏七月公寢疾久不朝謁、今年二月疾痊、

二十六日、出謁月直閣老牧野備前守、邸報至自江戸、

此日群臣朝賀、

四月七日、宰相公由患痔疾請回國浴温泉、十三日、大

家許之、

八日、命江田國雅・新番本城直五郎・中小姓長井善之

進・前田清左衛門護送御判物発江戸、五月二十六日至

府城、此日女房奉書亦至、

二十一日、閣老連署領增上寺救火使、

二十二日、島津下總為国老知軍役事、賜樺山伊織紅裏

御小袖、時年八十、以賞多年功勞特免先公旦月直也、

二十五日、令貴族至士婦許礼節服縮緬、

五月、命置文庫於史館、前此癸丑二月命有司擬近衛第

庫令造史館、此年三月落成、国老新納駿河久仰承旨、

使伊集院太郎右衛門俊德以伝命御記錄奉行江田國雅・

汾陽光遠・伊地知季安等、永授之於史館、使俟湿乾備

藏群籍用、

六日、國雅造朝、就俊德拝恩焉、

十三日、国老承旨令群士論異船時宜、

二十六日、国老以下趨召寓目、

晦日、命島津石見上邸江戸、島津藏人亦如江戸代島津

伯耆領守衛事、

六月十日、奥平左衛門君卒、禁菜五日、法諡龍德院殿、

十一日、大目附復令禁漫催謙飲至博勝負、

二十九日、命島津圖書久中防禦海岸、領山川・類

娃・指宿等事、時久中幼旁族島津內記久代指揮焉、

七月、下令群士二稱凡具慶設謙飲、

二十日、修慎德公大祥忌於大雄山、至二十二日、

八月二日、大家遣使賜公鷹所捉雲雀、

二十八日、命喜入主水為大目附諏訪數馬兼知御軍役總

督事、

九月十八日、大家老女召藩老、賜宰相公御羽織、

二十二日、宰相公發高輪邸、十一月十日至玉里館、

二十四日、始置西洋通詞、

二十八日、既至江戶、故此日獻昇天丸於大家、備

皇國守衛、

十月二日、夜人定江戶大地震、由是失火、公避難於

庭・小森新藏負夫人・追避其所・乃設布屋、俟明旦

如澁谷館方、其益震、大家使仁木二郎八郎來唁安否、

時御内玄闕・掖庭玄闕皆崩、櫻田西長屋燒亡、御數台

悉崩、至三日已剋鎮火、

二十六日、大身分以下百官講習銃隊於犬追物場、凡百五十八人稱病不會者二十餘人

二十七日、前此製大砲船於櫻島瀨戶、此日既成、長二

十步、揚帆入上港、

十一月十日、宰相公還自江戶、歷大口路、自柁城

航過城下一入玉里館、御側役有馬舍人純・得能彦

左衛門通古等從、

二十五日、大家召見公於御座間、手親賜公佩刀二腰及

菓子、

二十八日、宰相公特旨赦高崎・近藤等數十人之党錮、

公聞群士齡踰五十、尚勵砲術者此日命悉褒美之、

十二月朔日、宰相公臨于府城、受一門貴族百僚群士

朝賀、竣還玉里、

四日、命隨官等級定上邸舍広狭焉、

十一日、宰相公出自玉里一舍中村館、

十五日、往浴温泉於指宿、

十七日、伊勢雅樂宅舍火、

三年丙辰 公四十七歲實四十八

四月、前此公欲下篤君為近衛忠熙公養女、窃有

以請殿下亦聽、由是公命島津久福還自江戶途使于京、以候起居竣与殿下結成其義、此月三日久福発邸、十二日至京師、十四日、導知邸伊集院太郎右衛門俊徳詣近衛第^{服髮斗、目長袴}、因安平次齊宮陳公所獻晒布十疋・鮮鯛一折、以候起居、躬亦獻御太刀一腰、御馬代銀十兩、皆授目次、又因諸太夫中川讚岐守致奉使辭曰、御養女事寡君所使臣尚懇請以結其義也、口状具書願以啓之、而暫疎命於竹之間、時乃賜宴^{吸物、銚子}、讚州以伝達殿下乃對之曰、回酬宜俟他日、久福謝而帰邸、忠熯公乃使室田織之進來訪旅舍賜御肴一折、久福拜戴謝恩、讚州亦撒告明日徵、十五日久福^{服如、前日}、因御用人松井丹後介等進見右府忠熯公於大書院、立野勇贊之、乃膝行進于近^{御上、段涯}、手親賜髮斗、而口自謝答公之献物問安、竣又膝退、躬亦獻御太刀馬代、再進拜謁、立野勇贊之、既又見忠熯公及亞相忠房公於小書院召進於前、忠熯公口自見對御養女事於殿下、亦歛慶許諾之意、乃忠熯公賜色紙^{和歌、玉川}一匣、羽二重式疋、忠房公白縮緬二端、皆拜戴退于柳之間、老女村岡・龜岡・花井・岩瀬亦応接、伝信君命賜御文庫品^三及金三星、竣又忠熯公使讚岐守会久福於竹之間、以伝命曰、殿下養女篤姫君既許諾之奏請

禁庭、昨十四日被蒙 勅許、宜以此旨被回報云、恩賜慶宴^{御祝酒及二汁三菜、御菓子濃薄御茶等}、拜恩還邸、忠熯公又使坂戸寛次郎就客舍、賜綿五把、忠房公賜綿三把以餞之、十六日、久福詣第^{服如、前日}、因御用人林縫殿陳公所獻鮮鯛一折、以拜謝篤姫君御養女被許諾之恩、立野勇贊之、竣又賜宴^{吸物、銚子}拜恩還邸、十九日、発京邸五月十二日帰府宅、五月八日、命島津藏人、其在江戶參知国政、使以国老名施行焉、十八日、命論大目附申寛政令、勿漫選舉一身以下之勤務昇庶士、六月十九日、命減省貴族群官年頭、節句從卒、二十一日、罷末川久平職、有請故也、二十九日、公親著制令八章、以禁餞餽^禮贈答、今記其略一曰、百僚群士咸尚質素、列祖降令有所屢禁、宜遵旧制餞贖于往饋産於還、自非親子兄弟勿必用之、縱令臨旅逢離筵招、可必謝辭以贖亦卻之、二曰、今既受贖又勿守制以致方物、三曰、方其発行且到藩邸、同僚勿必誤飲飲饌或贈物件、雖親子及至兄弟等宜堅守儉必漫費、四曰、其往還亦須日注意妄費旅資、五曰、祿五百斛以

下庶士、冠婚葬祭宜其礼聘限銀二匁互通其情儉、猶隨
意勿苟踰制、六曰、五百石以上至九百石亦限一匁、猶
其欲減宜皆隨意、七曰、千斛以上宜準前章、猶欲其減
亦可隨意、八曰、承命上郎百僚群吏請貸府金多如例、
然畢竟風俗至因奢侈皆迫貧苦、方今海岸屢戒防禦、加
之江戶地震大火、千仞万費費用不足、平日各皆可顧其
身深嗜質素單思節儉、每事減省尽力軍備、以勵文武以
上制令謹皆遵守、可以群僚揭示壁間、若違犯則其必加
罪、国老島津久徵・川上久封・新納久仰・樺山久寬遍
令有司、此月準大家制定衣服令凡八章、

七月、公召親在府群士演武試学、予国老承旨二日出令
勵之凡十五章、
四日、与戶田侯氏綏淡路守、結兩敬盟、
七日、出令禁称具慶漫催謙欽、
九日、与德島侯松平阿波守為兩敬好、
十二日、始置中村奉行、給五人月俸、班列玉里奉行、
十四日、宰相公謁列祖廟於玉龍山、
二十三日、島津讀岐守貴典撰公位召造椿間、命久福為
御家老職班、位列川上久封次席、竣又貴典召于前口命
久福宜辰年護琉球人往来江戶、以末川久平罷職也、

二十四日、修覺法君大祥諱法事於福昌寺、
二十五日、国老承旨令百寮士庶各以勉勵、其略曰、禁
絕驕奢克守廉直各竭職事、勿漫謙飲穢身臧賄、就監察
不挾親疎專公善惡、勿苟枉理以差賞罪、如市商亦勿迷
己欲以恣利得、此日下令、此日国老聞邸報下令曰、新
待賢門院以本月六日薨、故命輟梁凡三日、
八月朔日、邸報至自江戶曰、篤姬君為近衛忠熙公所子、
將以此十一月入大府宮、故此日受土庶朝賀、
六日、与稻垣侯交遊、
八日、宰相公如中村館、
十四日、還玉里館、前此命建製墨所、至此命群吏頒官
局以給公用、

十六日、大家命公罷增上寺救火使、以明年率琉人故也、
十九日、脩賢章夫人三十三年回諱法事、
二十五日、夜戌尅江戶大風、芝及澁谷兩邸破損多焉、
命市人訟就町奉行禁就他官、
二十七日、大目附降令、禁市人帶長脇指或指日傘踏木
履・下駄及雪駄、且緒用飾天鷲絨革類亦禁焉、此日又
四郎貫（四）撰公位、命川上彌五太夫久連為若年寄、
二十九日、命嶋津出雲為惣頭取、領志布志・内之浦・

佐多・根占等軍備事、此月阿部侯命公以篤君為夫人所生子焉、

九月四日、松山侯松平定毅君隱岐守卒于前月十一日、此

日訃至、群臣伺公及老公起居、乃老公弟、而公叔父也、

十六日、若年寄島津藏人病卒于江戸、

二十五日、大身分以下諸有司講習砲隊於犬追物場、

二十七日、命島津久徵為御軍役方惣奉行、

十月六日、国老島津久浮卒、

九日、宰相公臨舍于中村館、

十六日、發館如指宿温泉、

〔イ〕日、命川上久封以留守家老、明年二月発如江戸、

十一月四日、前此拮大身分以下群官未講習者、此日命

聚于砲術館悉俾講習焉、

十一日、篤姫君入于大家宮中、

十二日、修廣大君十三回忌法事於福昌寺、

十五日、尊篤君称姫君様、幕府家定公將以十二月納

徵日行婚禮、由是大家賜公及老公鯛各一折、別賜公夫

人亦如之、

十二月三日、宰相公還自温泉二月

七日、回中村館、

六日、島津兵庫久長卒、停柩三日、

十一日、姫君納徵、

十八日、家定公納姫君行婚姻礼、称御台様、

二十日、以大目附鎌田出雲為若年寄、領守衛事上邸江

戸、權知国老職、

二十二日、追命致仕末川久平以忤旨如黜職刑、命新納

久仰領利權事、

二十三日、三次郎拱公位命島津久福為国老、明年率琉

人如江戸、御台様賜公及老公于鯛各一箱・白銀各一枚

以賀歳抄也、

二十七日、命禁投破魔障松飾、

二十八日、申幕府制嚴殺産子矣、

四年丁巳 公年四十八歳実四十九

正月十一日、以御小納戸東郷彌十郎為御小納戸奉行、

御同朋頭重久玄碩為御納戸奉行班職掌如故、以御小納

戸山田壯右衛門為御小納戸頭取、給事如故、此日西向

邸西筑右衛門客舍火、延焼隣舍四軒、公乃疏謝失火大

家不問、二月邸報至、二十八日群官朝賀、

十八日、修大信公二十五回諱法事於玉龍山、竣于二十

日凡三日、

二十三日、老公臨觀騎兵隊於訓練場、

二十四日、修文恭公十七回諱法事於大雄山、至二十六

日凡三日、

二十五日、国老新納久仰代宰相公、謁諏方・祇園行首
途式、

二十八日、宰相公發玉里館、三月十八日至高輪邸、

四月朔日、以当番頭豎山利武陞御勘定奉行、職掌如故、

五月二十四日、公自江戸至府城、御側役豎山利武等從、

閏五月十五日、以御目附梅田九左衛門為御小納戸、

七月朔日、以御庭奉行知御鳥預頭取江夏十郎為御小納

戸班、

九月八日、以御小納戸見習兼奧小姓三原藤十郎為御小

納戸、

九日、申尅伊集院氏生第六公子於府城、名哲丸君、

五年戊午 公年四十九歲癸五
十歲

正月十一日、以御小納戸早川務兼照為本職頭取、肄業

江戸知邸事、

三月、前此甲寅正月、公命史臣季安等、撰輯史庫所世

伝大祖得佛公以來古文書、乙卯九月權建局於新文庫、

蒞召椽匠悉椽之、至丁巳七月大較將成凡四千八百六

十七通寬陽公
以前也

二十一日、史臣彙疏就山田為政問裱裝品、公乃降旨曰

自昨年欲親臨悉覽文書、以問季安等定其品位、至是四

日、因公如温泉使山田為政檄、命季安及町田俊德等曰

前自温泉公念必就覽、遭事多端竟以不果迨還城、時偶

臨史館可被熟覽、此日諭旨云、

六日、公如指宿、為温泉也、

二十三日、夫人德川氏恒姬君養哲丸君立為世子以告大府、

四月九日、公還自温泉、時方督責庶士群官、分隊異日

覽文武芸、專為急務殆無虛日、繇是季安等更有所議、

二十一日、就御小納戸伊集院中二兼直請分古文書以呈

近侍、每公靜閑輒賜英覽、俟竣其皆更呈別文書、其為

如何兼直以聞、公乃命曰自昨年欲親入新庫覽遍文書、

必其可遂此之為、則〔マ〕後可以從汝等議、蓋就見為始

所以崇敬先公、

二十五日、使国老新納久仰承旨、謁以伝哲丸君於掖宮

嚮立世子、邸報達故也、

七月八日、公如訓練場覽大小砲備、

九日、臨対面所受琉球王子朝賀、此日公嬰疫痢、中外惶憂藥禱竭力微効日鮮、時哲丸君生未周年、先是令弟周防忠教君嫡子又次郎忠徳君於公為令姪、以故欲嗣又次郎君妻暉姫君、使哲丸君立其世子以襲封國、而未宣言、

十五日、城代島津左衛門久徴、国老新納駿河久仰等皆趨掖宮、就侍医女官候公安否、侍医曰、診脈赴衰、亦痢減食進如微効、頼此皆夜帰宅、唯山口直記利紀等代直近侍、而公疾大漸知回復起、乃顧命須磨^{世子}及山田壯右衛門為政等述其所欲、可以明日夙召左衛門・駿河等伝此遺命、素汝等亦宜銘于肝、於是為正等駭懼与利紀議、乃遣御小納戸馳告周防君、又利紀致左衛門・駿河・登及豎山利武等檄各一通告、以趨召周防君及左衛門等直馳造城、入謁寢室親承遺命、乃觸誓約、時因駿河等卒移對達遲檄、雖鞭馬馳及候氣息殆垂屬纊、泣聞顧命於其席、

十六日、命国老島津伯耆久福衛公顧命馳如江戸、啓諸老君宰相公以請大家、
十九日、久福発宅、
二十日、公竟薨于府城、

二十三日、忠徳君進謁殯主於御座間、左衛門久徴・駿河久仰・豎山利武等侍坐其席、久仰乃述公遺命以伝忠徳君、竣令諸士亦如之、而諸士皆奉靈柩、出自府城入福昌寺、

八月五日、行殯葬礼於其道場、法諡曰順聖院殿英徳良雄大居士、時世子哲丸公生僅二歳、令弟忠教君応官所議撰主葬祭、

維時安政五年歳次戊午秋七月

順聖院殿故從四位上左近衛中将薩隅日三州主兼領琉球国英徳良雄源公、遽嬰疫痢藥禱不効、至二十日癸巳之曉奄然易質於本府城宮、越八月五日丁未随浮屠法行殯葬礼於福昌禪寺、儲君哲丸公生僅二歳、喜悲未弁、由是族臣忠教応官所議、臨中陰筵代儲君虔陳薄奠以恭祭于源公之靈、其辞曰、

嗚呼哀哉

英明遠照 徳化皆臨 爵陞四品 名冠諸候^(歴)

識貫和漢 文並孔丘 威震夷狄 沢及琉球

惟智惟勇 誰不懷柔 礼樂射御 無一不周

嗚呼哀哉

俄罹微疾 棹涅槃舟 忽渡彼岸 何促遠遊

靡聽不駭 無視不憫 泣涕如雨 拳国沈愁
音容難尋 泉下悠悠 此歲何歲 遭斯不休

嗚呼哀哉

結南柯夢 月冷霜浮 靈柩欲絆 昇魂巨留

風弘虛壁 香薰空樓 臣今揮淚 代幼孩侯

蘋繁雖薄 謹陳庶羞 吊詞雖短 恭述心憂

嗚呼哀哉 尚嚮

此日久福亦陪法筵獻祭文如左、

安政五年戊午秋七月

邦君順聖源公遽嬰疾痢、世子哲丸公時尚乳孩、故至其大漸 顧命令弟及国老等、欲立嗣令姪又次郎

君妻 暉姬君教 世子公為其世子以襲封国使執政

大夫臣藤原久福銜 命兼程趨如江戶啓諸

老公以請 大家 大家乃聽授臣檄令徹 姪君服父

喪衣以趨江戶十月齋還報事、十五日姪君拜命、

時 公既薨於輓推任男久代而奉焉、將及百日於是

二十五日不堪哀慕之情、使食邑西福寺虔陳薄奠恭

陪法筵以祭于 源公之靈其辭曰、

自公襲封 八載未移 惟德革俗 百官遵儀

愛衆舉直 無吏狹私 愧望其懿 懲守其規

惠露逾沾 仁風益吹 天何促齡 邦人忽悲
嗚呼悲哉

夙歲聰明 典墳受師 學涉倭漢 芸選槍騎

旁該蛮煩 欲尽窮奇 精思達旦 練兵躬靡

三櫓創艦 水軍備夷

八月八日、大家家定公薨、

二十六日、島津久福往啓 宰相公於高輪邸、前此宰相

公得大府告將發之國、故託近屬此日發邸、由是近屬諸

侯會議于澁谷邸、

晦日、奧平侯昌服持公所顧命願書、呈於月直閣老間部

下總守詮勝第、

九月朔日、訃音亦達、戶田侯氏正就內藤紀伊守信親報

以其爽、

三日、信親乃召御先手大久保喜右衛門伝之朝旨、以命

忠德君受父服忌趨召於江戶、奧平侯代君拜命、乃四日

久福發邸馳國、夫人恒姬君聞公訃音疾愈大漸、十日遂

卒於芝邸、年五十四、是為芳樹院君、

十月十一日、宰相公至自江戶入玉里館、

十四日、久福還府趨館報事宰相公、乃使国老新納駿河

久仰詣重富第、迎忠德君移自明日居于府城、故十五日

久福進謁忠德君於御座間以報朝旨、君乃拜命受父服忌將趨江戸、時值百日、乃二十五日、詣福昌寺特設法筵命許多僧侶虔陳庶奠恭祭于順聖公之靈、其辭曰、

照國大明神者故薩隅日三州太守兼領琉球國、贈中納言從三位源齊彬卿之靈也、神克修德尊王朝敬幕府忠貫、日月迨比易簧、憂世將乱徵、余久光有所顧命故銜遺託、文久二年趨京及東、繼兄誠忠建白公武一和皇國厚蒙

勲感幕府亦褒賞、而其十二月贈官如右、寔特恩也、因及嗣侯少將茂久議請崇神建社、越翌五月神祇管領卜部良義服其精忠、荐授神宣特諭例規陞右神号、於是創社於城隣南泉門外、命鑄一鏡刻概於陰敬崇神体迎享祭祀焉、伏願神威明赫益輝万邦永鎮護 皇國封内寧謐子孫昌盛士勵文武民各勤業莫歲不熟以至無窮元治甲子八月穀旦從四位上中将兼大隅守源久光謹書

齊彬公御三役
御城代 島津豐後 御家老 島津左衛門下總

川上筑後

島津伯耆

島津登

新納駿河

榊山伊織

若年寄 島津隼晃

鎌田出雲

川上彌五大夫

大目附 喜入主水

顯娃織部

川上龍衛

其以前 島津石見

末川近江

右兩人御家管中退役

十九年十月五日東京へ送ル(黒岡久直ヨリ子息帯へ送ル)
十月廿四日右上村休介殿調(元御家老座書役ニテ鹿兒島
県庁書記官ヲ勤務中)

〔順聖公年譜尊攘堂(京都大学所蔵)にて校訂〕

豎山利武公用控

(東京大学史料編纂所蔵)

〔表紙〕

豎山利武公用控十四冊之内 一

(自安政元年四月廿一日至七月廿五日)

〔扉〕

公用控

嘉永七年寅四月
廿一日より
七月廿五日迄

一

本文四月廿二日 御聴ニ入候、

御国許三月廿九日立式日中急到着ニて、左之通八ッ

後相届候、

右同

〔黒田寄渡〕
一松平美濃守様御所望ニ付、先度長崎詰染川喜三左衛門
〔長崎附人〕
〔経礼、側役兼筆法〕
へ向ケ、彼御方へ引渡候様ニとの趣を以、三原藤五郎

〔方掛〕

より懸合、錫五百斤相廻し候処、御家来桐山市郎太夫
相請取候由ニて、錫之請取書并染川喜三左衛門より之
問合、三原より相廻し候、

右同

一筑前金山江差越居候富嶋仁右衛門其外、帰国相成御国
許江致候由、尤彼表金山追々盛立候由ニて、右帰国便
を以吉良源八郎・興膳八藏より挨拶旁ニ付、三原藤五
郎へ遣候問合式通、右同人より相廻し候、

右同

一御側御用人并御側役より之御左右啓意通相届候ニ付、
此分は則当番御小納戸江差出候処、井上庄太郎請取と
申来候、

右同

一三月中御国許之米相場不相変由、諸式方横目申出之書
付一鈔相届候、

御小姓組

有馬洞運

谷山郷士

小倉玄昌

郡山郷士

岩崎俊齋

本文四月廿二日達

御聽候處、被下切可被仰付との御事ニ候、

右之三人事去亥年より長州青木周弼方江致入門、蘭学稽古いたし候様被仰付差越居候處、当春

御通行之砌、長門引払候て大坂へ差越、緒方洪庵方江致入塾、致稽古候様

御内沙汰被為在候、致着坂候處、長州引払ニ付ても段々及入価、旁無摠愁訴申出候ニ付、壹人江金四兩ツ、当座払を以御取替相成候ニ付、何分之儀被仰渡度、〔大坂留守居〕菱刈七左衛門より問合有之候事、

一大坂緒方洪庵方江致入塾候八木玄悦事、〔新平〕当地江差越、蘭学稽古いたし候様

御内沙汰被為在、今日着府有之候、折柄大坂出立之節錫才領被仰付候旨、菱刈七左衛門より御届申来候、且亦拙者方へ差越候問合一緒ニ、七左衛門より豊後殿〔島津久宝、城代兼家老〕之御用封書通有之候ニ付、御同人江則差出候事、
一金貳拾兩

上村良節江

右は近々出立之筈候處、長詰ニ付仕廻難波ニ付、右通り御取替之願重久玄碩より承候ニ付達
御聽、右之通同人江引渡候事、

本文四月廿二日達 御聽候、

一原田才輔一封相届、今般炎上ニ付旁承候儀共申来候、近衛様諸大夫類焼ニ逢候人数、左之通ニ候由、
原田より申越候、

本文達

中川 宮内少輔

御聽候、就ては御見廻可被遣哉奉伺候處、何れ無之ては不相濟との
今小路民部權少輔
佐 竹 主 税 頭

御沙汰ニ付、田尻次兵衛へ申越、京都にて取仕立方いたし候五百疋又は千疋之間致吟味、以奉札相廻し可然旨、次兵衛へ可申越問合、正兵衛へ為書置候、

四月廿二日

一御金繰一条ニ付、豊後殿江三原藤五郎より申上越候問合書通・総帳二冊、
一菱刈七左衛門より豊後殿江、申上越候砂糖入札一件問合書通、

右式行今日豊後殿江御返し申候事、

一黒田松賀事、マツノ程能カ余程数年相勤候ニ付、御広敷御用人格被

仰付候ても可宜

思召候ニ付、取調へ入 御覽候様被仰付候、

〔尚施、奥医師〕
一田宮安實事、

新御殿江罷出、御講釈等申上候付、当番之分は御免被

下度内々相願候由、右ニ付跡不差支欵差支候哉、志目、謙受

〔奥医師〕
江承候様

御沙汰ニ付、則謙受へ承候処、何も不差支由承届候、

一昨日拙者木屋江永江休之丞参、荻野御役替之儀、此節

御附若年寄表使勤被仰付、御下向迄は御本丸へ罷上

り、園川同様相勤候様

御沙汰被為在候段承候ニ付、今日達

貴聞置候事、

一田町人足一条ニ付、御作事奉行并御趣法御用人調へ書

付二卷、豊後殿より私へ可渡旨被仰候由にて、直記よ

り請取候、

一若殿様へ

〔近衛忠興〕
信君様御縁組之御内談、〔老中、致弘〕〔江戸留守居〕

〔近衛忠興〕
次差越、御取次を以申上相成候処、何も御存奇不被為

在候旨被仰聞候由、半田より承候ニ付、左候ハ、御家
老衆江申出被置候様申置候事、

本文之儀四月廿四日永江休之丞へ達 御聴候様申置候事、

一竹下清右衛門事、先度水戸様より山方運阿彌御使を以、

鑄鉄銃製造方ニ付御借入被成度被仰遣候処、其節は下

田へ被遣置候留守事故当人罷帰候上申聞、何分可被仰

遣との御返答被遊候ニ付、今度罷帰候ニ付ては鑄鉄製

造方之儀承候処、自分鑄鉄之方は毛頭不存旨承候ニ付

達

御聴候処、罷帰候ニ付承候処、不存との事申出候、夫

迎も御宜との御事候ハ、可被遣との御返答可被仰進

候得共、其節は一先高輪江奉伺候上、誰そ御使相勤可

然との御沙汰被為在候、

四月廿二日

一今夕御国許より急飛脚到着にて、御左右并大砲船銅張

方は出来上候付、海中へ卸方いたし候処、余程都合相

濟候由三原藤五郎より申来候ニ付、右式行則御小納戸

江差出達 御聴候、

本文四月廿三日入御覽候、

一三嶋并沖永良部砂糖船、当月四日山川入津有之由、右同人より申来候、

四月廿三日

一長崎江致渡来候魯亞西船〔マ〕一条ニ付、染川并御家老衆より之御問合、且長崎致出帆候一条之書面入 御覽、則豊後殿江相渡候、

一下町出火ニ致焼失候唐反布御届有之候ニ付て之御問合入 御覽候処、唐反布都て残り無之と申候ては、跡江残り候反布片付方も不出来候ニ付、琉球江滞居候反布も有之候間、取寄候様可致との 御沙汰ニ付、其趣豊後殿へ申置候処、伊集院尚五郎参り、唐反布之儀は先年菓種代致不足候ニ付、右へ差足候処を以反布御免ニ相成候処、以来は不用之反布類不差登せ様ニとの御書付も相渡置被成候付、反布取寄之処は何様御座候哉、尤此節跡へ唐反布無之段御届ニ相成候ては、已来反布差出され候義は難被為叶哉ニ付、此節御届書此涯致混雜候処申立候ハ、随分其筋相済可申哉など、承候付、申上候処、其通ニても可然、もし其筋難出来候ハ、琉球持越候節、別段御願立ニ相成候ハ、六ヶ敷儀も

有之間敷可相済との 御沙汰被為在候ニ付、右通尚五郎へ申聞置候、唐反布致焼失候旁之儀、阿部様江は御直書を以被仰上候ニ付、近日中御逢之節宜御申取置可被遊との 御沙汰ニ候、

一若殿様江

近衛様御女子

信君様御縁組之義ニ付ては、阿部様御方御内談も相済候ニ付、其外御近親様方御相談も被為済候ニ付、

近衛様諸大夫中川讚岐守・今大路民部少輔江、豊後殿より被遣候書并御願書入 御覽候、

一御願濟之上

近衛様江御使、此已来

郁君様彼御方江被為入候節は、番頭御使之由ニ候得共、御貫請之節豊後殿御使被相勤候ニ付、此節も御家老衆御勤之方可然哉ニ御使番より之調へも有之、近江殿御勤之筋伺有之候ニ付、其通被仰付候、

右之書面都て豊後殿江御渡申候事、

一右御使勤ニ付ては、御広敷御用人も御使勤有之候由ニ付、両人之内伺具候様豊後殿より致承知候付申上候処、両人之内ニても又番之頭之内ニても慥成者候ハ、何

れとも宜候ニ付、致吟味候様ニとの

御沙汰被為在候ニ付、其趣豊後殿江御達申置候、

一於犬追物場、大身分初諸御役人迄、砲術調練致稽古候

様被 仰付置候処、段々多人数ニ致出精候ニ付、御書

付ニても御褒美戴き度との事、駿河殿より被願越候由

ニ付認候様、昨日 御沙汰仕候ニ付、今日認方仕入

御覽候節、乍恐御直し被下度奉願上候処、至極宜との

御沙汰被為在、同案忝通は 御手許江差上候様承知仕

候ニ付、忝通は差上、又忝通豊後殿江相渡候事、

一大身分初其外領地有之候面々并郷士迄も、御軍役ニ付

段々駿河殿より被伺越候書面忝通入 御覽候処、御心

寄之儀も不被為在候付、豊後殿江御返し申置候、

一福島氏・向井より田中仁右衛門義転役ニ付ては、色手^{〔又〕}

当之義も有之候得共、自力ニ難調候ニ付、金貳百疋位

御取替被下度、豊後殿江訴出候由にて 御伺申上呉候

様、御同人より致承知候付申上候処、

御許容被遊候ニ付、其段は豊後殿江申置候、

一上野江御金御預ケ之義、豊後殿江も御咄申置候、

一右同条福岡・向井江も相達、御金繰何様可有之哉、二

箱ニても、三箱ならば猶宜との 御沙汰被為 在候ニ

付ては、三箱差上候ても何も御差支不被為在候旨、御

趣法御用人兩人より承候ニ付、達 御聴申候処、当分

は 宮様御留守之義ニ付、来月末比ニも可相成との

御内話奉伺候、

一今日永江江差越、眞如院之方宿元先年百千代松江被仰

付候節、御小姓被仰付置候得共、些不相当ニ付小番家

格被仰付度、近々申渡賦御座候旨御届之様、尤 御沙

汰も不奉待上御取扱可相成段も口合置候事、

四月廿五日

一今日西村新兵衛罷出居候ニ付、

御前御沙汰被遊候後、逸作致面会、篤と引合置候様被

仰付候付、同人江其趣申達置候、

一山川入津いたし三嶋并沖永良部島より致着岸候彼表詰

見聞役より、御裁許へ向遣候届書四通、御家老方より

出上り候処、

御覽相済御下ケ被遊候ニ付、豊後殿不被見得候故、迫

田甚藏江渡置候、

一大阪表三月中之総書一冊

御手許より相下り候ニ付是亦甚藏江相渡候、

一於琉球提督より送り候鉄砲、差登せ進上仕候様被 仰

付、豊後殿より問合相成候処、提督事又可参と申置候

義も御座候ニ付、夫迄は扣置たる旨琉球役々共より申

出候由、彼地相詰居候郷田仲兵衛・川上式部より之問

合入 御覽候処、少しも不苦候付、不構当年中差登せ

候様可申越旨、

御沙汰被為在候、豊後殿調練稽古之場ニ被参居候由ニ

付、迫田甚藏江右

御沙汰之趣申置候、

一於犬追物場大身分初諸御役人迄、炮術調練致稽古候様

被仰渡置候処、一統心得宜

御趣意之程深奉汲受、追々出席人も相嵩、分て致出精

候段被

聞召通、別て 御満足被

思召候、就ては来年

御下国之上、おのつから

御覗可被遊との御事候間、猶亦相励致出精候様可申越

旨被仰付候事、

一昨日廿四日、眞如院宿元被仰付置候百幸衛家御小姓ニ
被仰付置候得共、外々江不并候ニ付、小番家格被仰付

候義ニ付、永江休之丞江口合置候趣、

宰相様江被申上候処、成程不并ニ付可宜との

御沙汰被為在候旨、休之丞より承知仕候、

一右同日竹下清右衛門事、水戸様より鑄鉄製造方ニ付

御借入被成度被仰遣候処、当人事一向鑄鉄之方は不并

段申出、就ては何とか御返答不被仰進候ては不相成事

候間、同人は高輪掛り之事ニ付、御方御取次を以奉伺

候様被 仰付候旨永江江口合置候処、

宰相様江申上候処、定て鑄鉄之義は不存筈、勿論不并

者を遣候ても不用之事候間、是非と申事候ハ、新納

次兵衛事は鉄砲も張候事故可被宜、暫之内は何も御差

支不被為在との 御沙汰被為在候由、

右式ヶ条今廿五日休之丞参承知仕候事、

四月廿七日

一大身分之面々、私領御軍役ニ付受持場等之伺、豊後殿

より被差出置候ニ付今日入

御覽候処、是迄右様之事宜との御事ニて候、勿論表通

右通被究置候ハ、差掛之節は亦御差図可被遊候ニ付

其通心得居候様達置候方可然哉と 御沙汰被為在候ニ

付、其趣御同人江相達右書面相渡ス、

一伊達遠江守様より御家来、原田直助江為稽古被差越、

其序ニ梅田家江も稽古ニ可被遣との御事ニ付、右之趣

三原藤五郎江申越置候様被仰付候、

一 江夏十郎

市來庄右衛門

濱田平右衛門

右は今老ツ反射炉御造調可被遣ニ付、右之三人掛り被

仰付候間、三原藤五郎江申越候様被仰付候、

一御袴地式反

原田直助へ

右は伊達様被下候との御事にて、昨日御出之節私へ御

沙汰可被遊思召候処不罷居候ニ付、井上庄太郎江御渡

被成候由、尤私より原田へ申越候様 御前様御沙汰も

御座候由、庄太郎より承御品も相請取候、

一今日 水戸様江庄太郎差越候付、竹下清右衛門之一条

御返答ニ相成候ハ、宜との

御沙汰ニ付、左様御座候ハ、清右衛門儀鑄鉄方之儀弁

不申候由申出候、夫迎も不苦候ハ、此 御方様にて

は何も御差支不被為在との趣にて、被仰遣可宜哉申上

候処、夫通宜との御事ニ候、尤高輪江も引合申候処、

井上次兵衛と申者有之候旨申上置候方宜との 御沙汰

ニ付、其趣庄太郎江相達置候、尤於 御国元出来候大

砲玉可被進との 御内話も奉伺候、

一金百五拾兩

森山榮之助江

右は此内八丁がらみ短筒進上仕候由、兼て御内話も伺

居申候処、此節井上庄太郎江取合、金貳百五拾兩御取

替之願申出、就ては我々共致吟味候様被仰付候付、右

御返として百五拾兩も被下候ハ、宜との吟味にて申上

候処、其通にて宜との

御沙汰ニ付、庄太郎江引渡候、

一岡村事、大年寄之被下方同様被仰付候 仰出、

一島田御年寄被仰付候 仰出、

一鳴井若年格表使勤被仰付候 仰出、

右三行近江殿へ渡ス、

一百幸衛代々小番被仰付候 仰出、

右豊後殿へ渡ス、

一彈正殿御方被附置候御年寄萩野、若年寄表使勤被仰付

候 仰出、

右豊後殿へ渡ス、

一 川越付役相勤候、

石塚岩右衛門

右七拾余才、長途之歩行も出来兼、勤方御断申上候考ニ付、品能被仰付候、引替ニ御金拜領被仰付被下度、御徒目付より内意有之年功取調候処、未四五ヶ年も不相満候得共別て勤功有之候ニ付、其御取訳を以金拾五両余被下候ては何様御座候哉奉伺候処、少し不足之様思召との 御沙汰ニ付、左様廿兩被下候て可宜哉申上候処宜との御事ニ付、則染川六郎左衛門江引渡為戴候様相違候事、
一 田町御屋敷外通之貸屋之者共、追々引払候様被仰付候ては、代々罷在候者江は御金被下方も無之ては不相成哉との
御沙汰被為 在候ニ付、何れ其通被 仰付宜御座候半申上候、就ては何分福崎助八など脇々之間合もいたし取計可申哉と申上置候、
一 上村良節明廿八日出立ニ付、私引進にて御目見被仰付候、

四月廿九日

一 今日式日飛脚被差立候、

一 内野太左衛門事大坂致着坂候処、

近衛様御用御時計取繕方被仰付候付、京都江家内共差越居、跡は切衣服等差置候処逢盜候由、殊ニ御国元江罷下り答ニ付旁込入候ニ付、大坂にて金拾兩出入ヲ以相渡置候旨、山田壯右衛門迄菱刈七左衛門より申越候由、壯右衛門より申出候、右ニ付今少しは御取替不被仰付候ては、道中筋彼是ニ差支可申哉と申上候処、大坂にて取替置候十兩、外ニ金式十兩可被下との 御沙汰ニ付、取替置候十兩は払切ニいたし、外ニ式十兩被下方宜取計候様、七左衛門へ問合候事、
一 大砲船銅張方卸方相済候段申来候ニ付、達御聽候返答いたし候事、
一 富嶋仁右衛門福岡より致下着候義、三原藤五郎より申来候ニ付、入 御聽候段返答仕出ス、
一 伊達様御家来松根内藏并九藤段右衛門致出立、長崎江も差越、染川より之間合相添相廻し候ニ付、達 御聽候返答仕出ス、
一 福岡侯御所望之錫、染川喜三左衛門方江三原より相廻

し候処、相届候ニ付、福岡より取ニ參候ニ付引渡候義、
右同人より申越候、達

御聽候旨致返答候、

一河野四郎兵衛、御勘定方小頭勤方は迄之通御役被仰付
候 仰出入 御覽、左候て近江殿へ相渡ス、

一島津淡路守殿、去丑年御拝借金被仰付候ニ付、当年より
年府（御）にて三百五拾兩ツ、上納有之筈候処、去年御馳
走役被蒙 仰、存外御物入有之旁ニ付、右年府（御）之義、

当年より五ヶ年之処御用捨被仰付被下度、御同意之趣
中山次左衛門迄御頼之由中山より承、尤明日は当地御
発足ニ付、其内ニ否御承知被成度趣承候ニ付、今日奉
伺候処、御願通可被仰付との御事ニ付、豊後殿江前条
ニ付御物入為有之段を被聞召通候趣を以、表向相達候
ハ、可宜哉ニ御口合申置候処、則御達有之候由にて、
早速澁谷直記私木屋へ被遣、右御礼被仰上候、

一今日東條和山私木屋へ參、

典姫様 寧姫様之御間、往々は御縁談可被成候旨 御
沙汰相伺候ニ付、其趣幸橋へ罷出可申上、乍去右之趣
私より問合無之候ては、彼御方御役々承知も無之疑惑
可仕との事ニ付、左候ハ、明日も相伺候上否御返答可

致候間、兩三日中相扣居候様申置候、

四月晦日

一今日和山より承候御縁談之義相伺、尤私より問合不遣
候ては、御向之御役々疑惑も可有御座筈候ニ付、牧田
佐左衛門まで懸合具候様承申候ニ付、問合認可奉入
御覽旨申上置、右問合出来候ニ付入 御覽候処、近日
中高輪江御直ニ可被仰上との 御沙汰にて、右問合御
手元江被留置候、

一明日 御登 城可被遊哉と奉伺候処、御疝積（積）氣にて御
断可被遊との

御沙汰ニ付、書面を以近江殿江御達申置、左候て半田
嘉藤次江相達候、右ニ付御断書并御病名之御名札、御
右筆見習野崎より差出候ニ付、暫在て差返候、右御断
之書面、明朝差出候て可宜と半田江申置候、

一先日被相下候御門出入并学文武芸相嗜候様ニとの 御
書取ニ付、我々共より之添書正兵衛江為認入 御覽候
処、宜との 御沙汰ニ候、尤仰書は御右筆より読上ヶ
候ハ、自ら表江も相響猶可宜哉と申上候処、其通宜
との御事ニ候、

一篤姫様御一条ニ付、水戸様〔徳川吉昭〕より阿部様御沙汰被遊候由、

右御都合を水戸様より湯川殿江被遊御沙汰、右同人より此 御方様へ被申上候由 御内話奉伺候、

- 一 豊後殿・近江殿より、書籍方江相勤候岩城三左衛門事、砲術稽古旁ニ付別て致出精候由脇々より目ニ付候由、就ては極困窮仁ニテ帷子抔は無之由、外々之励ニも可相成候間、御徒目付ニても被仰付候ハ、いか、と申候御相談承候、外岩下新之丞鑄製掛之由候処、先年より致別勤度申ニ付、三原藤五郎抔より相止置候事候間、兩人共御内々金貳拾兩計ツ、も被下候て、何様可有之哉被申候ニ付、明日も申上候様可仕旨御返答申置候、
- 一 先年濱松之井上侯江御金御取替之儀、島田御本陣置鹽藤四郎肝煎ニて、年々年府御上納方相濟候得共、異国船一条当年之処、置鹽より御断申上候書面二通・帳面一冊、豊後殿より被相渡請取置候事、

五月朔日

- 一 今日四時御用之間ニおひて、先日御渡被下候奥向江被仰渡候 御書取、御右筆有川直次郎誦方いたし候、右ニ付最初拙者より御筆之御書取拜聞被仰付候間、各御承知と致演説候事、左候て井上逸作・私・山口直記相

詰候、拜聞相済引統我々共より之添書、御用部屋書役 勤伊東正兵衛御香盆載せ少々末座ニて読上ル、左候て跡ニて篤と拝見有之候様相違候て引入候、

但本文ニ付、前日御趣法掛御側御用人初、其外奥 向之御役々、明日四時御用触差出候事、

- 一 昨日豊後殿より請取置候濱松駅問屋役人并置鹽藤四郎より御取替金一条之帳面一冊、并御趣法御用人より調へ付候書付入 御覽候処、願通御免可被仰付旨承知仕候、

書籍方

岩城三左衛門

- 一 右御備組ニて致出府候処、極貧者帷子抔も所持不致、勿論砲術稽古方等別て致出精、脇目ニも余り候事之由候間、御徒目付被仰付当分之通被掛置、左候て金子貳拾兩程御内々被下候て何様候哉、左候ハ、脇々之励ニも可相成との事申上候処、何通、

岩下新之丞

- 一 右之者も御備組ニて出府いたし居候処、是も同様困窮之由ニ付、金子右同様被仰付度、豊後殿・近江殿より相談承候趣を以

申上候処、伺之通被仰付宜との

岩下新之丞

御沙汰御座候、

右三行豊後殿江御達申置、岩城之

仰出相渡ス、

志々目友二

右肥後七左衛門

公義大砲船御造建ニ付御用被仰付候処、手伝無之候て

は手廻り兼候由ニ付、右友二手伝ニ被遣、早川五郎兵

衛より申上置候処、困窮之者之事故、場所柄ニ罷出候

儀難調義ニ付、御取替願出候由にて金拾両被下度、福

崎助八・早川五郎兵衛より承候ニ付申上候処、伺通被

仰付候ニ付福崎江相達置候、

一今日御登城、御疔積氣之御病名にて、今朝御断半

田嘉藤次御使相勤ル、

五月二日

岩城三左衛門、炮術訓練小頭致出精候御取訳を以御徒

目付被仰付、是迄之通書籍方江被掛置候 仰出入 御

覽、豊後殿江相渡ス、

一 岩城三左衛門

右は炮術稽古方別て致精勤候処、極貧者ニ付御取替被

仰付度、豊後殿・近江殿より御相談承候ニ付申上候処、

伺通被仰付候との御事ニ付、豊後殿へ御達申置候、

一昨日奥向江被仰渡候

御筆之御書取、御内々拜見被成候様ニとの趣を以、

御筆豊後殿江御渡申置候、

一去丑十二月中大坂総帳一冊御下ヶ被遊候ニ付、豊後殿

江渡置候、

一竹下清右衛門事、水戸様より鑄鉄銃製造方ニ付水府

迄御借入被成度、此内以御使被仰進、其後清右衛門江

承候処、鑄鉄之義は全不弁段申出候、夫迎も不苦候ハ

ハ、此御方何も差支不被為在候旨被仰進候処、何れ御

借入可被成との御事故、右之趣口合置可申考にて永江

休之丞へ差越候得共、外出之由承候ニ付、則相披致帰

宅候処、山方運阿彌より此御方御小納戸迄、清右衛門

事水府江下り日限旁申合度儀有之候ニ付、明日四時頃

御屋形中ノ口江向ヶ参呉れ候様、相達可呉旨申来候由

にて、右来書山田壯右衛門より平太郎江為持、当人江

達し呉候様承候ニ付、則御用申遣候処、私宅江被参候

ニ付相達し候処、御請ニ付平太郎召呼右来書相渡シ、
清右衛門事致御請候ニ付、其通被及御返答可然旨申付
候、右ニ付猶又右之趣永江間合いたし候事、

渡邊大監

大關泰淳

右者

御門主様御方之仁にて、彼

御方様江御預金之儀ニ付、湯川安道殿江致沙汰候人之

由御座候付、向後為見合留置候、

五月七日

一 御代替ニ付、来ル十一日比

御誓詞 御出席被^{〔遊殿カ〕}候哉、御出席被遊候ハ、御名之下

へ引札にて、^{〔池田慶政、岡山藩主〕}松平内藏頭様江御留守居方より次渡可申

候ニ付、何分奉伺候様豊後殿より承、諸家様より之通

達被差出候ニ付奉伺候処、何も御差支不被為、在 御

出席可被遊との御事候間、豊後殿江御達申置候、

五月八日

一 近衛様より被進候御直書迄通、

一 山田壯右衛門へ得淨院より遣候文迄通、

一 寶永之度

禁裏炎上ニ付、近衛様御殿

皇居相成候節、此御方様より御進献被為在候書留之

帳面一冊、

一 得淨院より差上候文、

右四行豊後殿江も見せ候様ニとの 御沙汰ニ付、御

渡置候処、今日返上之相請取申候、

一 野元一郎并三原善兵衛・深見休八、御役替等被仰付候

伺三通、

一 高輪・田町御固メ人数江被下物之伺書式通、豊後殿被

差出候ニ付、御役替等被仰付候面々、伺通被仰付との

御事ニ付、

仰出、豊後殿へ相渡候、

一 御固メ人数へ被下物御品之儀は、我々共吟味之趣有之

申上候処、其通被仰付候ニ付、明日も御同人江致首尾

賦ニ候、

一 田町御固メ之節、江藤喜太郎夜具ニ致和厄候^{〔方言、悪戯カ〕}ニ付、御

裁許掛并横目聞合書二通、我々見置候様ニとの趣を以

近江殿より被相渡候ニ付請取置候、

一炭屋長左衛門先祖江、伊勢兵部少輔貞昌・嶋津下野守久元より閑道筋并御逃口等之義ニ付て之書留帳一冊、并当人所持いたし候武州川越在澁井村之屋敷絵図、又御代々様御位牌近隣之寺蓮光院へ祠堂銀十兩相納候寺証文一通、又右之屋敷江之道筋一通、伏見迄之道筋書卷通袋ニ入付、拙者証書相添御記録所江致格護置候様、榎本新兵衛江相達、右袋入書付相渡候、

一西向江罷在候守衛人数之内、余程外出いたし候者有之哉ニ御聞通被遊候由にて、糺方いたし候様

御沙汰ニ付、早速伊東正兵衛を以、新地廻足輕へ聞合方申付候様相達候、右ニ付西向御門之首尾合何様可有之哉 御尋ニ付、定て御留守居差引いたし候義にても御座候半と申上置候ニ付、則西筑右衛門へ申遣候て承候処、丁度右通之事ニ付、猶又取締向屹と有之候様相達置候、

一守衛人数之内郷士杯外出ニ付ては、猶又嚴重有之候様上野司江申達候て、右之首尾合申上置候事、

一福崎助八并肝付清右衛門、近々合立ニ付被下方之義相候候処、伺通被仰付候、左候て当人より之願ニは無御座候得共、規前被下之、別段ニ被下候ハ、難有狩可申

との事ニ付、助八江は百兩、清右衛門江は式十兩程仕廻料として被成下度奉申上候処、伺通被仰付候、左候て書面伺ニは御内用向ニ付急被仰付、中途江も御用有之候ニ付、遅速無構被仰付度との書付ニ候処、急之義取止候様、尤実々急成御用之儀は別段之事候と 御沙汰ニ付、最早急々儀は無之筋可宜と、豊後殿江申出置候、

一親科ニ依家札ニ被入置候本鮫嶋名字之幽昌事、京都にて致稽古候処、 近衛様江被召呼御診等も被仰付候由ニ付、当分之身分にては不宜候ニ付、今度豊後殿家来ニ被仰付 御赦被仰付との御事ニ候、依之御広敷医師被仰付候仰書、豊後殿へ相渡ス、

一昨日差上候田尻次兵衛より相廻し候伏見御内用金総帳五冊、今日菊池藤七郎を以御下ケ被下候、

五月九日

一忠憲公より被進候御直書并寶永之度

禁裏炎上之節 近衛様御殿

皇居相成候節、其節之 近衛様は関白にて、右之御伝を以表向之御内々にて、品々御進献物被為在候御帳留

之書拔帳一冊、并得淨院より彼是申上越候文卷通、山田壯右衛門へ右同人より遣候御内用書、且

禁裏御役女中之名前帳一冊、豊後殿江拜見為致候様ニとの御沙汰ニて、御下ヶ置被下候ニ付、今日御返上仕候、

一 当春亞米利幹船渡来ニ付、高輪并田町、右門殿・準人殿被相詰骨折ニ付、拜領物之伺有之候処、近江殿・右門殿江は御帷子一重ツ、準人殿江は御平服御上下一具被下、其外江は銀并金子被下方、伺之通被 仰出候ニ付、御沙汰之趣伺書ニ朱書入、豊後殿并近江殿江相渡候、

一 前条ニ留置候寶、永年鑑ニ炎上有之、其節

禁裏江表向之御内々ニて 御進献被遊候御帳留書付一冊返上仕候処、御入用も不被為在候付、御用部屋江致格護置候様被 仰付候ニ付持上ル、

一來ル十一日、守衛人数江拜領物被下方可仕旨申上置候得共、十一日は御日柄ニ付、來ル十三日何様可有之哉と迫田甚藏申出ニ付、申上替可置候ニ付、其通ニて可宜致返答候、

一 前条ニ留置候通、守衛ニて相詰候諸郷土共、品川等江

差越候義、新地廻り足輕を以為探候処、大概名前相知れ候ニ付、安田助左衛門へ向後右様之義無之様可相達旨申渡置候旨をも申上候、尤以後矢張不聞入者ハ差下し可申旨申上置候、拙者地頭所之者多く候、其外は國分・加世田此二ヶ郷ニて候、

五月十二日

一金千両

但桐さんふた緒摺萌黄絹真田付御台もみ板足付

右は今般錫格別直段宜ニ付、御初穂として 宰相様江被進御用ニ付、御直ニ御手許江差上候事、

五月十三日

一 今夕菱刈七左衛門より伯州之鋼吹并炭さか一条之間合并先方より永井清左衛門江差越候手紙、七左衛門より相廻し候ニ付、玄碩江相渡候様ニと伊東正兵衛江今十四日相渡候、

五月十四日

一 越後縮 二反

但右御反物は御小納戸方より出ル、

一銀十枚

但銀は御内用上りにて取揚候、

右は佐藤茂右衛門事、

〔宗直傳、阿部飛守〕

聰徳院様・阿部飛彈守様江 御入奥之砌より御附にて

相勤候処、及老年御役御断且隠居迄願之通被成御免候
段御聞届相成、是迄数十年御世話申上候義、御祝被成
被遣候との趣にて、拙者より佐藤茂右衛門様と致宛書
候書面并銀十枚、山田壯右衛門江相渡候事、

五月十五日

〔虎壽丸〕
一若殿様江

〔近衛忠經傳〕

信君様御縁談御一条ニ付、豊後殿より先達て 近衛様
御方江御懸合相成居候処、今朝帰飛脚帰着にて、左之
通御返答有之候由にて、御家老座書役勤迫田甚藏より
請取候ニ付、向後為見合留置候、

一御札致拜見候、

薩摩守様御初愈御勇健被成御座、目出度御儀奉存候、
次貴様弥御堅固被成御勤珍重之御事ニ御座候、然は
信君御方 虎壽丸様江御縁組之儀、先達て御領掌被進

候ニ付、於關東

大隅守様御始御一同幾久御喜悅被成、御一類御近親様
方江も御示談之上、兼て御内用向被御頼置御老中阿部
伊勢守殿へ、御内分被御申達、於御地ハ御先格之通諸
事無御滞相濟候旨ニ付、此節表向 公辺江御願書御差
出被成度 薩摩守様被思召、依て兼て被仰進候通此御
方御都合向之義御承知被成度拙者共迄御示、猶此上御
運ひ之処宜取計様、尤其御方様にては別紙御草稿通、
御先手を以御用番之御老中方江、御差出被成候御先規
ニ御座候由にて、御双方御差障無之御日限御比合之処
も、此御方にて御取究被為在可申入様、当田尻次兵衛
方江も御申越可及勤弁様御紙面之趣致承知、則申上候
処、於 右府殿不斜御満足被成、左候得ハ御縁組御頼
被仰立候御比合御日限之義、別紙書附ニ御日並、於
此御方御差支不被為在候間、右御日并之内にて、猶其
御方様御都合之日限御治定被仰進候上、於御地別紙御
草稿通御願書御差出し御座候様ニと寛食候、尤同日於
此御方も別紙之通伝奏衆へ御願書可被差出候、依て御
草稿一通相廻し候、此段御承知被下度、御報旁可得御
意如是御座候、以上、

五月九日

今大路民部権少輔

中川 讚 岐 守

嶋津豊後様

御縁組御願被仰立日限

六月

本文何れ御差支之御日柄ニ候得共、被成方も不被為在候ニ付、七日ニ取究申越候様ニとの

七日 十一日 十二日 十四日 廿日 廿四日

御沙汰被為在候ニ付、

御口状覚

右大臣殿御女信君御方

松平薩摩守殿嫡子

松平虎壽丸殿へ御縁組被成度思召候、此段宜御沙汰被

為頼入候、以上、

近衛殿御内

月 日 今大路民部権少輔

三條大納言様

坊城前大納言様

雜掌中

一原田才輔より書状一封之内一通、拙者より遣候返翰、

外ニ添書二通、内壹通は炎上ニ付 御廻之節、脇坂様

速ニ供奉被成御褒美御達有之候一条、又壹通は近衛様

諸大夫類焼被致候面々江御見舞一条ニ付返答、外ニ壹

通是は活翁大人へ甘泉之手紙、内は東坊城様 殿下御

氣入ニて御酒被下、其外金之御益并銀十枚被遣候一件

也、右都て今朝 御退城被遊候上入

御覽、直ニ今日町便より返答仕出ス、

一野島より才輔へ、此 御方様より被下方一条ニ付、御

礼文右同人より被相廻候ニ付差返ス、

一守衛人数之内、段々致外出遊過候者も有之候由御沙汰

被遊候ニ付、此節は豊後江申聞、表向吟味御座候様可

仕旨申上候処、夫ニて可宜、尤不聞入者は御差下し方

有之候て宜との 御事ニ候、

一他御屋敷、昔は上番所も為有之事之由候処、文化之度

御儉約之砌御引取ニ相成候由、上番所無之候ては不取

締ニ付、御取建被遊度との 御内話も奉候候ニ付、左

様御座候ハ、直ニ 仰出御差出ニ相成候方御宜奉存

候と申上候処、自分其 思召との 御沙汰承知仕候、

一琉人立之節九州路通行之義、駿河殿より豊後殿へ自書

を以右之趣申上候処、是は逆も不相濟との 御沙汰承

知仕候、乍然差掛り之処にて御願立ニ相成候ハ、又
可宜哉ニモ 思召候、先日も私江 御沙汰被下候通、
琉球之一条ニ付阿部様江被為入、御打合も可被遊との
御事奉伺候、就ては近日中 高輪江被為 入候ニ付、
其節琉球一条ニ付、阿部様江御談合被遊候義共御伺可
被遊との 思召被為在候事も奉伺候、

五月十六日

一 近衛様諸大夫より豊後殿江被申越候

若殿様江御縁談御一条之返答、并御願書被差出候御日
限書、且近衛家より御願立ニ相成候御願書写し一通、

今日豊後江相渡、左候て御願書被差出候義は、六月七

日御治定被遊候旨御達申置候、

一来卯春代交代(寄之)

喜入主水

一同秋交代

島津隼人

右人柄奉伺候様、豊後殿より致承知候ニ付申上候処、
表にて致吟味候様ニとの

御沙汰ニ付、右同人江御達し申置候て、御書附も御渡

し申置候事、

一 表使已下其外女中 御留守中致骨折候ニ付、金子被下
方有之、壯右衛門江〔折カ〕を以御年寄江引渡候、

一金三拾両

島山

右は 御留守中折々高輪より懸此大奥江參諸致差凶御
用向相勤候ニ付、右之通被下候、御年寄へ引渡方右同
断、

一 守衛向にて致出府候諸郷士之内、段々徒遊ひ有之不宜
趣、御内々は入 御聴候ニ付、表向御吟味被成候様
被 仰候旨、豊後殿江御達し申置候、

五月十八日

一 櫻田御屋敷并西向御屋敷両所江上番相詰候仰出事書、

豊後殿江相渡ス、

一 諸士詰中江御門出入之儀ニ付、豊後殿・近江殿より被
仰渡候書付書通、達 御聴豊後殿江相渡す、

一 今度守衛方ニ付被差登候諸士并諸郷之面々、右同断之
書付一通、是亦入

御覽候処、少々御加筆も被成下候ニ付、右御同人江相
渡ス、

一六村清左衛門御役替被仰付候 仰出、右御同人江相渡
ス、

一今日狩野勝川殿表より御入来にて大奥江被罷通候、右
ニ付ては御案内等何も御側役ニは不構候事、

一浦賀櫓屋宗兵衛より、安田迄差越候浦賀軍船乗試等有
之候書面、入 御覽候処御留ニ相成候、

五月十九日

一伊東宗益殿使杉浦金次郎より井上逸作方へ参、御内用
向ニ付金式百両御下ケ被下候様被申越候由にて、申上
貫候様承候ニ付、申上候処、其通可仕旨

御沙汰ニ付、右通逸作へ相渡ス、

一聰徳院様来ル廿八日御帰ニ付、其節何ぞ可被進哉之旨

小野島より申上候ニ付、御金にて候ハ、御手数数ニも不
相掛、先方様却て御仕合と思召候との事、尤小の島

へ引合候様ニとの 御沙汰ニ付、右へ口合候処、御金
一包にて可御宜との事ニ付、左候ハ、其趣可申上、就

ては何比御渡申候て可然哉と申候処、廿七日ニ差通し
呉候ハ、宜との事承候、

一浦賀船宿櫓屋宗兵衛兼て御出入心願之由、豊後殿より

承候ニ付、可宜との 御沙汰ニ付、其趣御同人江申置
候、

〔宗直殿、島津筑後守〕

一随眞院様より先日豊後殿江、小野仁兵衛事来秋交代前
之由、就ては壹度くくに人代り候ては些御込被遊候ニ

付、来々秋まで仁兵衛へ詰越被仰付、其節之代りは仁
兵衛外壱人掛被仰付、右兩人にて交代被仰付候ハ、

別て御仕合之由 御沙汰被為在候由、何分伺呉候様致
承知候ニ付、右之形行申上、左候て外壱人伊木七之助

・横山慶左衛門致吟味、是亦申上候処、横山被仰付候
方宜との

御事ニ付、其通豊後殿へ申出候処、直ニ取扱いたし可
然哉之旨被申候ニ付、其通にて御取扱被成宜候旨相答

置候、

一金千両

右は先日 御手許へ差上置候錫代にて、御初穂として

今日

宰相様江被進候由 御沙汰奉伺候、

五月廿一日

一今日夜五ツ時前、御国元去月廿九日被差立候式日之場

にて、平田藤五郎外ニ卷人到着にて、左之通相届候、
一右府様より御直書一通、

右は御返書之由にて差上候様得淨院より申来候ニ付

今晚大井より 御帰館被遊候節、御直ニ差上候、

一平紙包

右は 御進献御品書にて、

近衛様御直書之由、封之儘御披露と脇付にて、右同人
より則差上候、

一得淨院より拙者江二封、

内壺通は 御直書差上呉候様ニとの事、

又壺通は 御進献物被為在、別て御都合向御宜との

義ニ付、

一得淨院より 豊後殿江壺封、山田壯右衛門へ一封、井

上庄太郎江一封相届候ニ付、銘々為届候事、

一名越彦太夫より普門院江御金百両 御沙汰之趣有之、

御趣法より御内用上りにて取揚引渡候様、先便問合置

候処、前条通取計相濟候旨返答有之候、

一名越彦太夫へ、汾陽清右衛門嫡子御小姓之吟味先便申

越置候処、聞合方いたし候処、歳十四才之由形行申来

ル、

一三原藤五郎より、出物蔵辺曲輪之画図為差登候、

一右同人より、今度伊達様御家来炮術稽古方ニ下着有之

候得共、未為何 御沙汰無之候事故、先其儘召置候ニ

付、何分相伺申越呉候様問合有之、

但本文ニ付ては、先便より 御沙汰之趣申越候得共、

未相届内と相見得候、

一右同人より米相場付為 候、

一右同人より、下町出火ニ付、当表より被仰付越候義相

達候由にて、御受被申上越、猶又追々可奉伺との事ニ

候旨申来候、

一伊達様御家来梁川平左衛門事御国元致出立、西目筋罷

帰候由之問合、三原藤五郎より申越候、

一紙張文箱 壺通

右三原藤五郎より

御前江差上呉候様申越ニ付、直ニ今晚差上候事、

一御船大徳丸 式拾反帆

支配人指宿田良浦

中村周次郎

砂糖式拾七万八千拾六斤

右寅四月九日山川入津

一 蛭子丸 式拾三反帆

船主山川之

河野覺兵衛

砂糖式拾九万五千八百五拾三斤

右大嶋御船ニテ寅四月廿五日山川入津

一 御船圓通丸 拾式反帆

支配人下町之

坂元爲次郎

砂糖拾式万五千百拾七斤

一 御船松惠丸 拾六反帆

支配人柏原之

甚兵衛

砂糖拾壹万六千四百拾五斤

右式艘寅四月十四日山川入津

一 御船宮福丸 拾式反帆

支配人山川之

瀨左衛門

砂糖九万式千六百五拾四斤

右寅四月十五日山川入津

一 興行丸 式拾三反帆

船主山川之

河野覺兵衛

砂糖拾七万百拾九斤

右寅四月十三日山川入津

一 三神丸 式拾反帆

船主波見之

重平兵衛

砂糖十八万拾八斤

右寅四月廿六日山川入津

右德之島御用船

一 成徳丸 式拾三反帆

船主阿久根之

源兵衛

砂糖三拾八万式百八拾八斤

右寅四月十三日山川入津

右喜界嶋御用船

一 御船金毘羅丸 六反帆

支配人内之浦之

與三兵衛

砂糖七万五千四百式拾七斤

右寅四月廿五日山川入津

右沖永良部御用船

右之通、友野市助・三原藤五郎より山口直記・拙者連名宛にて、五月廿一日夜相届、

一 下町火災ニ付市中可致難渋候ニ付、常平倉御囲米申請可被仰付旨、先便問合候処、当分式千八百石よ御囲相成居、一緒ニ差出候ては却て可致混雜候付、此涯三百石丈申請相成候様被仰付候旨、三原より山口・拙者方へ申来候事、

右五月廿一日夜相届、

一 佐土原様へ御取替金九千四百四十兩之内、於御国元被相渡候金五千八百四兩之儀、旧臘引渡方取計候段は承知之通候処、御返金一条ニ付、彼御方家老中より証文差出請取、御趣法へ致格護置候段、友野市助より申越候、

一 嶋津淡路守殿より、大炮船御造建ニ付、彼御方大工御国許へ被遣候間、御国大工同様召仕候様被仰付候趣、先便三原藤五郎迄申遣置候処、致承知候との返答、五月廿一日相届候、

一 魚油三千盃

右爰元御買入にて、久吉丸帰帆便より積入可差下旨、

三原藤五郎江申遣置候処、承知いたし候旨返答、右同日相届候、

一 白西洋布三拾五端

一 スホレキウス 五斤

右は伊達遠江守様より御所望被成度、梁川壯左衛門より無拠申出候由、然処御品柄之事候得は、不申上候ては御返答難致、勿論御焼失ニ付ては、御格護之御反物無之との趣を以断被置候由、且スホンキウス之儀は、在合有之候ニ付取入差上置候段、藤五郎申越候付達御聽候事、

一 今晚阿部伊勢守様御方より西筑右衛門江御用談之儀有之候間、御勝手江罷出候様申来候ニ付、罷出候由之處、明朝御用談被遊度義被為在候間、四時前迄ニ御出被進候様ニとの御事にて、其趣入御聽候処、弥御出可被遊旨被仰出候ニ付、五時御供揃之仰出、御家老兼江御達申候事、

五月廿二日

一 今朝三部時分 御出ニ相成候て、阿部伊勢守様御方江

被為入候処御逢被成、左候て琉球之義、亞人より万一尋候節之御答振認有之候御書付御渡被成候ニ付、得と家来共江申聞候上、何分可申上との御答にて、右御書付御預御持帰被遊候、右御書付書写し豊後殿江も拝見被仰付候、尤被致吟味候様被仰付候処、右より被申上候は格別成義ニ付、御国許同役江も申遣、左候て琉球撰政・三司官江申聞候上、右之通御取扱被成下、夫迄は御扣置被下候様ニとの書付にて則差上候、

五月廿三日

一昨日阿部様御持帰り被遊候御書付并御家老衆より申上之書付、永江休之丞江致持參、宰相様入御覽候様同人江相渡置候、

五月廿五日

一昨夜阿部伊勢守様より西筑右衛門江罷出候様申来候付罷出候由之処、先日其御方様御預御持帰被遊候御書付、急成御用候間、御封書にて御差出被成候様、且又伊勢守様御事少々御不快ニ被為入候得共、今日は押て御出勤被成候御事にて、明朝は御逢被成御逢度段々御

申込之御方も被為在候得共、右故御断被成候御事ニ御座候ニ付、被為入候ても迎も御逢は御出来不被遊候ニ付、御早く御封書にて御差出被成候様ニとの事御座候由、西筑右衛門罷帰候時分は夜明比にて、入御聴候処、私早々罷出候様、泊番田中仁右衛門より申越候ニ付、則罷出候処、直ニ御中奥御寝所江罷出候処、今朝是非阿部様江御書付御持參にて被為入候間、御供触差出候様被仰付候得共、本道にては御間後ニ相成候ニ付、御用人江申遣只今御供揃と触させ候、弥三部比之御出ニ相成申候、然処伊勢守様御逢被遊候ニ付、御預御持帰り被遊候御書付并思召を以御本文御直し被下候処、御預被遊度御書面式通、亦御家老衆より被差出候書付壹通、阿部様へ御差出被遊候処、至極御尤之事と御沙汰被為在候由御帰殿之上奉伺候、

追て右御書付、拙者より永江休之丞へ渡置候ニ付、未明ニ八郎を取ニ遣候由、

五月廿八日

一阿部様より
聰徳院様御手伝を以、極内被仰進候御書付之趣は、今

度は下田にて亞人共琉球之事は不申由にて、此方よりも不申候ニ付、以来之処得と為致承服置候様ニとの御事ニ候、尤福山侯之御書取拜見被仰付候、

五月廿六日

一阿部様より御持帰り被遊候御書付等、先日永江休之丞迄相渡置候得共、急御用ニ付御差出ニ相成候様阿部様より被仰進、御取返し相成候故、今日亦々永江氏へ相渡置候処、何も御心寄之儀不被為在との御事之由にて、同人より為持差返し候、

五月廿八日

一金五百両

右は

阿部様江御品代として

聰徳院様御手伝を以被進候ニ付、御直ニ差上申候、

一金百両

右は此御殿江

聰徳院様御逗留被遊、今日御帰りニ付為御土産被進候ニ付、御前江御直ニ差上申候事、

一去二月大坂総帳一冊

一同四月 右同

右 御覽相濟、今日豊後殿へ相渡ス、

一毎年蔵方被仰付候節、蔵方不被仰付人江右之場にて御金被下方有之、当年之儀はいか、可被仰付哉と駿河殿より御問合有之候由、右ニ付ては毎年被下方有之候御規ニは無之候故、来年は御下国被為在候ニ付、来年被下方可宜哉と豊後殿より承候ニ付、申上候処、当年も無扨向は被下方有之宜との 御沙汰ニ付、其趣豊後殿へ御達申置候、

一郡山様より去春東條和山を以

典姫様御賞被遊度被仰進候由、未否之御返答不被遊、余り御延引相成候ニ付、御二方様之御間被進候様、牧田佐右衛門迄致懸合、宜との 御沙汰承知仕候ニ付、和山召呼、打合候様可仕旨申上置候、

一徳永助右衛門事病氣ニ付ては、迎も御供等も調兼申候ニ付、御国勤之方へ御内意申上、呉様福崎助八より承置候ニ付、道奉行・御細工奉行勤へ転役之伺申上候処、宜との 御沙汰被為在候ニ付、
仰出豊後殿江相渡置候、

五月廿九日

一 今日式日飛脚之場にて、税所喜三左衛門・押川助七被
差立候、

一 紙張箱

一 御書 一通

右脇坂淡路守様江被進候ニ付、京都御留守迄今日式日

〔居脱カ〕

より相廻し候、尤御側御用人中様江と、拙者共より問
合相添候事、

一 先日御願濟ニ相成候琉球船を大砲船之姿ニ仕調候様之
事、并越通船三艘此地迄御取寄ニ相成候旁之義は、何
様可被仰付哉、岩元清藏より承候ニ付罷出候て、右之
訳合私ニは弁不申候間、いか様別段可被仰遣哉奉伺候
処、右之儀は

御駕駕前三原藤五郎へ被仰付置候ニ付、御願濟之書付
さへ差下し候ハ、宜との 御沙汰ニ候、尤右ニ付御訳
合を御書取にて御下ケ被下候ニ付、岩元へ相下ケ候、
一 先日御願濟ニ相成候阿蘭陀御注文之御国許へ申遣候様
可被仰付哉奉伺候処、今日便より申越候様被仰付候、
右之御書面ニは御手許へ被召置候哉申上候処、御願濟
之書付は一ツも 御手許ニ無之との 御沙汰ニ御座候

左候て当年蘭人持渡候荷物品は、早々染川喜三左衛門
へ申越候様、勿論御注文之品々は

公辺江御申出ニ相成候ニ付、其節は猶又御国許へ可申
越旨被仰付候ニ付、岩元江相達候処致承知、直ニ草稿
為見候事、

一 原田尚助より差出候大砲船之調書帳一冊、此通にて可
宜、猶又致吟味候様、尤

御筆之御書取被相添御下ケ被下候ニ付、豊後殿江相渡
候事、

一 阿部様より被進候内密御用御書付、豊後殿より返上被
仕候ニ付、 御前江差上申候、

六月朔日

一 和蘭御調文之儀被成御免候との御書取、今日御下ケ被
下候ニ付、近江殿へ御渡し申置候、

六月二日

若殿様御供使

一 有川金之進事淺山流致出精、先年より目録取可差免旨
師範家より申事候得共、金子少々及入価候儀ニ付、是

迄は断置候得共、跡之者より習得候ハ、彼是外聞も
不宜候ニ付、何卒御内々御心付被成下度、御供目付森
川孫太夫・迫水孫次郎より承候ニ付、井上氏申談候上、
私より達 御内聽候処、伺通被仰付候ニ付、金五両の
し相付、右へ頂戴可為致旨、孫太夫江申渡御金相渡候
事、

一和蘭御調文御願濟之御書取写し

御手許へ差上候事、

六月三日

一御国許御家老衆より御中途豊後殿江向ケ相届候琉球表
異国人一条之書付、数通一緒ニいたし御下ケ相成、右
之内ニ小本二冊有之、此分を御手許ニ被留置候旨井上
庄太郎より承知仕、右相請取候処、折節三部過ニ相成
候ニ付、能勢江為持御家老座江差返候、

六月四日

一昨日大黃之義

公辺御下役之方より御留守居方江内談有之候ニ付、右
御答振之書面、豊後殿より被相伺候ニ付、入 御覽候

処宜との御事ニ候、左候て余計御用も御座候ハ、御
書付にて可被下旨口達申候ハ、可宜哉にて是有之間
敷哉との 御沙汰被為在候ニ付、其趣豊後殿へ申置候
事、

一戸塚靜甫事、志々目謙受を以承候趣は、自分事脇方江
引移、今少し医道致修行度御座候付、若御下国御供共
被仰付候御事共御座候ハ、乍恐何卒宜様申上呉候様
ニとの事ニ付、今日達 御内聽置候事、

一金千疋

右は当春明石や外壱人御用有之、山田壯右衛門召列同
人処江召置候、此内致出立候、右同人処ニ召置候ニ付
ては、朝夕等余程及失脚候事、右之通被下候ては何様
御座候哉奉伺候処、伺通被仰付候ニ付、前条之通壯右
衛門江為戴候事、

一湯地彦太夫江戸詰之砌脇方より金子借入候ニ付、浦川
金次郎・富山半次郎・村上彦七証拠ニ相立候処、右公
訴いたし候由、就ては右三人当地ニ罷在候ては、度々
上之御面働ニ相掛候義ニ付、今日浦川・富山兩人は出
立被仰付、左候て已来江戸可被障置との事ニ候、尤彦
七儀は当分御国許江罷在候由、態と達 御内聽候ニは

及間敷候得共、右通相合居候様ニと近江殿より致承知候、

六月五日

一水野土佐守殿、今度高木主水正様御屋敷五千五百坪代地ニ拝領有之候由、就ては未坪之場所不相知候ニ付、此御方様若御用共被為在候ハ、御屋敷統之方を可奉願との由、水道方之方豊後殿へ相見得被申候由承候ニ付、達御内聽候処、既ニ其事ニ付拾致心配候ニ付、猶又承候様承知仕候ニ付、拾へ承候処、水野家ニは自分致出入候処ニて右之義承、尤右之御小納戸相勤候者、奥田家より養子ニ參候仁ニて、急々申談候事なと委細承居候、右ニ付豊後殿より水道方之方江は、水野家より申出候通、宜取計給候様可申聞との御沙汰被為在候ニ付、其趣豊後殿江御達申置候、

一淺井銀右衛門事、一代御小姓組被仰付候年数ニ相成居候ニ付、申上候処、運ひ付候丈之者は其通被仰付候方宜との御沙汰ニて候、
一中小姓之面々、田町出張之節江夏喜太郎江致和厄候一条ニ付聞合書式通、口達を以先日申上置候ニ付、右二

通は近江殿江御返し申候事、

一守衛方ニ付致出府候諸郷之面々外出一条ニ付ては、名前書達御内聽、右書付豊後殿江御返却いたし候事、

一御城坊主親病氣ニ付、跡代り悴へ被仰付度、半田嘉藤次より申出入御覽候処、其通可被仰付旨御内窺相濟候ニ付、右書面逸作より半田江差返ス、

一山口直記今日ニて二七日ニ相成候付、忌御免被仰付度申上、左候て右門殿江申出置候、

一大阪より町便到着之由ニて、菱刈七左衛門より御献進一条ニ付極内申越候処、致承知候由返答相達し、右

一条ニ付ては此内五百両一度、貳百両一度、田尻次兵衛方江差登せ候旨申越候、

一染川喜三左衛門より、朝鮮人漂着五島江有之、對州御留守居へ御引渡有之、其節漂着人江唐戰爭之儀承候由

之処、四部三程は明軍攻入候由、其後之事は不存と申候由申越候ニ付、申上置候、

一是迄和蘭御調文品之一条、其外大炮船旁一々御願濟相成候ニ付、夫々江御挨拶被遊候方宜は無之哉と御沙

汰ニ付、尚又五郎兵衛申談候様可仕旨申上置、左候て五郎兵衛方ニて大概考合被致度、其上承候様可致旨申

置候、

六月六日

一 豊後殿より被差出候、下町出火ニ付長崎江御届相成候
ニ付、反布類は少々残居候ニ付御届申下ケ方可取計旁
ニ付、染川喜三左衛門江御問越ニ相成候御問合ニ、張
紙を以喜三左衛門より返答申上越候書付、入 御覽候
処、随分此通にて可宜との 御沙汰被為在候、尤御届
ニ付ては能外蔵々糺方いたし、御届もいたし候事候哉
と、猶又相調へ候様被仰付候処、外蔵江反布類少々は
残居候由、未弥と申儀取調兼候得共、今式百反位は可
有之哉ニ 思召候との越【趣カ】を以、長崎奉行荒尾殿江御直
ニ御沙汰可被遊との御沙汰奉伺候ニ付、今日は御同人
御出勤無之候故、右之趣迫田甚藏江申聞、右御問合相
渡候、

一 御同人より被差出候唐国戦争之義、五嶋江致漂着候朝
鮮人江承候写し一通、此書面之趣染川より拙者方江向
ケ同案差越、直ニ入 御覽候ニ付、右は同書付ニ付伊
集院尚五郎江相渡差返し候、

六月七日

一 去年二月 西丸御城主御出入被仰付度、半田嘉藤次よ
り願書等差出候ニ付申上、御内伺相済候ニ付、嘉藤次
より首尾書を以筑後殿へ申出候由之処、当分迄不相分
御家老座へ引合候処、御帳留ニも無之候由、いか様筑
後殿御失念ニても有之候哉と申事候得共、其節詰合候
書役も無之、尤御国元江問合候ても往復ニも相掛候事
故、去春被仰付候筋ニ申上異候様ニとの事ニ付申上候
処、其通被仰付との御事ニ付、右書付伊藤正兵衛へ為
持、御家老座江差返し候、

一 御門出入取締方ニ付、櫻田西向御留守より吟味申出候
書付一通、并御門方御側役調へ忝通、亦豊後殿より伺
之書付忝通、御同人より被差出候ニ付、此通にて宜と
の 御沙汰被為在候ニ付、御同人江相渡ス、

一 水野土佐守殿へ、高木様御屋敷切坪にて拝領被致旁ニ
付、委細之儀山崎拾より承候ニ付、豊後殿江參、水道
方森田與左衛門と申仁より被申候義も為有之由ニ付、
水野殿より申出通、何篇宜取計可給旨、豊後より申候
様可達旨被仰付候ニ付、其通豊後殿へ御口合申置候、

富山半次郎

浦川金次郎

六月八日

右は湯地彦太夫当表相詰候節、脇方より借入候金子段々之株有之、右へ証拠人ニ相立候由之処公訟ニ相成、

一今日田尻次兵衛より 炎上ニ付、御進献物御一条ニ付取扱候御金一卷申越候、

去四日爰元出立被仰付候処、今日右兩人致出奔候御届相成候、一寸見置候様ニとの事にて、御家老座書役致

一昨日御下ヶ被下候三奉行問合と外題有之候御書物四冊内壹冊近江殿江被致拝見置候様ニとの趣を以御渡申置候処、今日御返却有之請取置候、

持參候由承候ニ付、誠ニ不容易書面ニ付、一先入御覽候処、殊之外 御不都合にて、何訳にて不申上致取

六月九日

計候哉可承旨 御沙汰ニ付、近江殿へ御尋申候処、度々御呼出しニ相成候ニ付、何れ右通之御取計ニ不相成

一昨日御下ヶ被下候三奉行問合三冊、外ニ一冊、今日井上庄太郎へ相渡御返上仕候、

候ては、首尾結ひ兼候と申事ニ付、達 御聽可申筈御

一 奥御右筆組頭

座候処、前条通之事候旨被申候ニ付、御断旁取繕申上

志賀謹八郎殿
同 御右筆

候処、其上之御叱は無之候、右ニ付呼返し何分致吟味候様被仰付候ニ付、 御沙汰之趣近江殿江御渡申置候

加藤惣兵衛殿

一若殿様江

近江様御息女

右御用頼申込候様被 仰出候ニ付、事書にて豊後殿江御達申候、左候て謹八郎殿は早川五郎兵衛受持、惣兵衛殿は半田嘉藤次受持ニいたし候様 御沙汰ニ付、此

信君様御縁組之御願書、今日御先手渡邊下總守殿御取次を以、松平和泉守様へ被差出候事、

段も右御同人江御達申置候、

六月十一日曉

一原田才輔より御内用書相届、右は炎上ニ付

雲上御短刀御焼失ニて、御心ほそく被為入候ニ付、御短刀一腰御所望被遊度との御事ニ付、其趣 右府様より申上越候様被仰付候との趣、且又 信長公より 御進献有之候

鳳輦も御焼失ニ付、今度

御遷幸之節之

鳳輦を御進献被遊候ハ、往年迄

御名御残り可被遊との御事と、

右府様御沙汰も被為入候段申来候ニ付、今日は

圓徳院御百回忌御相当ニ被為当、大圓寺へ為詰、早朝

より差越候事故、今朝 御表へ被為入候上、入 御覽

給候様ニとの趣を以、当番御小納戸江向ケ差出候事、

六月十二日

一今朝御目見仕候後、被為召候ニ付罷出候処、原田才輔より之書状御下ケ被下、左候て御短刀は御進献可被遊候ニ付、致拜見見分候様との 御沙汰ニて拜見被仰付候ニ付、来國光之方御宜方ニ申上候処、右は 御由緒柄有之候御短刀ニ付、外御讓物之内来國次御取究被遊

候事、且

鳳輦之儀も 右府様御沙汰ニ候得は、何れ御進献不被遊候ては被為叶間敷との 御沙汰被為在候、左候ハ、御短刀を不遠御差登せ可被遊、亦

鳳輦之儀も何分 右府様御沙汰次第可被遊との御事候間、右旁御方より宜様申上候様被仰付候趣返答可仕哉申上候処、其通ニて宜との御沙汰承知仕候、右之趣は豊後ニも申聞置候様被 仰付候ニ付、直ニ才輔より問合も懸御目、御沙汰之趣も御達申置候事、

一篤姫様御一条ニ付、阿部様より麻布様江御内話被為入候趣も相同、尤委細は壯右衛門存候付、同人より承候様 御沙汰被為在候、亦右御同人様より麻布へ被進候御書も拜見被仰付候御文言之内ニ、此御方様より麻布御伝にて被進候御挨拶も有之候、

一和歌山様江御縁談一条も、御早キ方御宜との御内話も被為在候由、就ては今日御庭江奥田殿御隠居御招ニて、水野土公へ御申込させ候との御沙汰相伺候、右ニ付ては、水野家後日此御殿江御招キ可被遊との 御内話も奉伺候、

一原田才輔より申越候趣、大頭は去ル十一日之場ニ留置

候得共、向後見合ニも相成候ニ付、猶又書面之趣左之
通留置候事、

一昨三日参 殿仕候処、恐多も

御宸翰御内々拝見被仰付、其表前後相略、肝要左ニ奉
申上候、

なにとか深切に心配、殊更

薩州よりの懇志段々深満足いたし候、其上またくた
のみ入候事とも、甚欲心にあたり赤面なれとも、打あ
け申入候通、皆焼うせ、はなはた心ほそく、何とぞ短
刀一腰マヤこしへたのみ入まいらせ候、関白などへハ必々
沙汰なしニたのみ入まいらせ候、此文庫はこのま、落
手とのみにて、女房ともへの返事ハ、かならずく無
用ニ候、

右之御次第ニ被為在候ニ付、何卒在銘にて一尺内外之
御短刀被献ニ相成候得は、至極之御都合ニ思召との御
事ニ候、

御拵之儀は

主上江 御伺之上、於当所可被 仰付 思食ニ被為在
候旨、早々申上候様被 仰付候、

一御内々奉申上候、此度就炎上表向

御献上之御品物之儀、先日御掛り御役方より 御所様
被遊御承知候得共、 御心ニ不被染、 御一分様にて

御扣被置候段奉伺候 思食ニは、

禁中江御称号幾久被為残候 御品物ニ被遊度

思召にて、当時御談中之由ニ奉伺候、分て極密ニ被伺
候ニは、

信長公献上之

御鳳輦共ニ不残御焼失之御事故、

遷幸之節目出度

主上被為召候

御鳳輦御献上ニも被成候御事候得は、幾万々歳 御称

号

宮中ニ被為止、永々之 御規模ニも被為成候半との

思召ニ奉伺候、御未定之儀疎忽ニ奉洩候も甚奉恐入候
得共、乍恐 御心得ニもと奉存、前条之序五日限町便
を以御内用奉申上候、以上、

六月四日

原田才輔

豎山武兵衛様

六月十四日

一折田與右衛門より、松前并函館亞人応接旁之儀ニ付、

昨日一封相届候ニ付入

御覽候処、暫御留メ可被遊との 御沙汰ニ付、差上置候、

一守衛方ニ付致出府候諸郷之者共、稽古方ニ不差越節は費成事ニ付、御式台へ人数割付、一ヶ月ニ六度計ツ、練合、定式之御番人ニ不拘四ツ時より八時迄相詰可然との 御沙汰ニ付、近江殿江御達申置候、

一松平阿波守様御方より、此節此 御方様江守衛ニ參候増人数何人ニて候哉、御留守居方へ問合有之返答可致旨、昨日岩元清藏より書面差出候ニ付、人数之義承候処、現人数より少しは相嵩致返答可然など御留守居方申事ニ付、其通相重ミ居候旨承候、乍去現時之人数可及返答方可然哉と我々共は存候間、今一往御吟味有之候てはいか、と同人江申候処、現人数之処ニて右へ遣候返書、同人より相請取候ニ付右之趣申上候処、左様之儀は現事之処ならてハ不宣との御沙汰ニ付、其通清藏へ申聞、右書面相渡候事、

一御小姓等之一条ニ付豊後殿江御達申置候処、今日被差出候ニ付申上候処、

御沙汰之趣承知仕候、就ては則御同人江御返し可申之処、先達ては

御直ニ御下ケ被下候人数之儀は、

御前御聞通迄之事ニ付、為念今一往相糺候方宜と存、

丹生彌兵衛へ聞合方いたし候様相達置候、

一福崎助八滞坂中より拙者へ差越候、大坂にて御物方へ

出金ニ相成候株々申来候ニ付達 御聴候、

一右同人より、向井新兵衛・田中仁右衛門江向ケ差越候

砂糖入札之一条、且同所迄參居候守衛人数別て相締居

候一条問合、御趣法より差出候ニ付、是亦入

御覽置候、

一一橋様へ未被為入候ニ付、御見舞可被遊候間、来ル廿

三日より廿七日迄之間御向へ懸合候様被仰付候付、向

井氏へ相達置候、右之節尾張様・田安様へも御見舞、

夫より一橋江被為入との御沙汰被為在候、右ニ付ては

一橋様より御日取申来候上、田安江之御懸合は御留守

居へ相達可申事、

一明十五日 御出座可被遊哉奉伺候処可被遊哉奉伺候処

可被遊との 御沙汰奉窺候、

六月廿九日

一得淨院より文書通、六月九日付にて今日相達候、右は此内

太守様より

右府様江御書被進候ニ付早速差上候趣、且亦雲上御好様御品、又々此節御歌御絵所の御かるたいろく被仰出候ニ付、右之御手当御用金被為在候付、金百両田尻次兵衛へ申談、右廿四日ニ次兵衛より相廻し候ニ付、則致持参

右府様へ差上候由申来候ニ付、達

御聴置候、

一原田才輔より三通六月十日付にて今日相達候、内式通は、六月十一日、同廿九日此方より遣候返答ニ候、又書通は、鮫島幽昌五月十九日被召出結構被仰付候ニ付、陽明家江参 殿精勤仕候旨申来候、

七月二日

一別紙野島殿より申来参 殿仕候処、

御所様御沙汰ニは、今度内裏御造営ニ付ては、当時異賊防禦其外品々御心配之御時節柄、格別

御尊敬之御趣意にて、早々

御造営被成進との趣、

主上奉初臣等一同難有致感伏候、右ニ付火除之御地面も弘られ、樹木も被植度 御内沙汰も被為在候得共、御時勢を被察 御好をも被為止、御元形ニ被成進候得は、

御満足ニ被 思召との御事ニは候得共、内実は

禁庭別て御狭少之上、何方江も渡御難相成、恐多くも臣下之身分ニ引競候得は、何共恐入候御事ニ 思食と之旨

御所様御こまゝとの 御沙汰、尤三條大納言實萬可思召、御自筆にて御書取之御書式通拜見被仰付、此通之趣ニ

御所様ニも被遊御内意候間、何卒

上様御忠力を以、三條實萬卿之御書取之御趣意被為合、大樹公御心被為付、 御造営之御地面一段御勘考被仰進候筋ニ、御忠力を以御取計ニ被為成候得は、

主上は勿論之御事、

御所様御初、三條様御忠節之御方々様如何計欲御難有狩、誠ニ 宮中千歳之御龜鑑ニも被為成、普く天下之

響合人氣も益穩和ニして武威ニ伏從可致、御造管御

國弊ニ相成と申ニは無之、先年 文恭院様御代 思召

ニテ

内裏御弘メ被進度と之 御内沙汰被為在候得共、終

先帝登霞ましまし、其節之御残念実万々 御歎慨被遊

候由、

御所様より分て申上候様被仰付候、近日諸司代より

禁裏御造管之御絵図被廻候間、其内ニ從

御所様之御書表、實萬御書取之御趣意旨精々相運申

候様、

上様御忠力を以御勘考被遊候上、何分ニも宜可奉願旨

分て命候、尾張様江之 御書も御願被遊候間、是又

品々相達候様御取計ニ相成候様可申上旨奉敬承候、何

分ニも宜御取成被仰上被下度義、謹て奉願候、以上、

六月廿六日

原田才輔

豎山武兵衛様

追て奉申上候、實萬御書取之御写御書籍ニ御入付

被進候、御心得ニ申上候、内実は殿下思召と恐多く

も御忠節之御方々と齟齬之由、乍内々奉伺、唯々恐

入奉存候、猶追々可奉申上候、恐惶々々、

松虫

筈

一管

但副狀相添二箱ニ入

右は

近衛様江被進、左候て

御同所様御手伝を以、御内々

御進献可被遊御賦ニ候処、先年炎上之節、御内々之表

向ニて、御品々

御進献被為在候御先例被為在候由ニて、御使番方調書

を以御家老衆より御方迄御問合相成、右之趣 右府様

江其御役筋より伺ニ相成候由之処、右御品之儀は

右府様御心ニ不被為染、

御手許様ニて御扣置被遊候由、

思食ニは

禁中江御称号幾久く被為殘候御品物ニ被遊度 思召之

由極内奉伺候、就ては 御側江被召置候大御筆筒 御

進献被遊候て可御官哉之趣、 右府様より御直書を以

被仰進候由ニ付、左候ハ、右之筈御品柄宜^(マ)ニ候ハ、

御筆筒ニ被相添候て、御二品 御進献被遊度

思召ニ候、乍然御二品ニては御都合不^(マ)宜との御事候ハ

ハ、筥之儀は最初之通 右府様へ被進、夫より 御同所様御手続を以 御進献被遊度との御事候間、右旁宜相合

右府様御役々江は勿論、得淨院江も致熟談宜被取計旨、御自分江申越候様被仰付候条、此段御内用を以申越候、以上、

七月六日

豎山武兵衛

田尻次兵衛殿

七月八日

一十二月十七日阿部様江被為入御逢被遊候節、下田にて 応接之上、御条約相成候御条約帳二冊、外ニ御書壹通 被相添伊勢守様御渡しにて、琉球ニても致承伏候様御 達可被成との御口達被為在候由、

御帰殿之上奉伺、左候て御口達之趣申聞候様、尤右御 条約二冊も御下ケ被下候ニ付、則豊後殿江御達申候て、 右式冊并御書付も御渡し申置候、右ニ付豊後殿・近江 殿・右門殿御連名にて、存寄被申上候書付壹通、外ニ 壹通別紙を以、此節之御一条は琉人も容易承伏難仕候 ニ付、当分御免之唐物商法外ニ千貫目御免被仰付被下

候ハ、難有承伏可仕哉杯と申候書面ニ有之、亦

御前よりも御壹通御持参にて、伊勢守様江御差出被遊 候処、篤と御拜見可被成との御事にて、御当座にては 御覽も無之由

御沙汰奉伺候、

七月十三日

一田尻次兵衛事 高輪御用相勤候ニ付、御都合宜候ハ、

品能被仰付候ハ、御仕合ニ

思召との事、永江休之丞を以豊後殿承知被仕候由、御

同人より申上呉候様承候ニ付申上候処、御許容被遊候

ニ付、御側役格勤方は迄之通之仰出認、豊後殿江相渡 候事、

七月十一日

一金三百兩

右湯川殿・伊東殿・西尾江

一金二百兩

但桐箱ニ入付、絹真田付、尤台受、

右姫君様江

右之通、御内用ニ付被遣又は被進ニ付今朝迄差上候様御沙汰ニ付、昨夕御小納戸岩元太右衛門江差上呉候様ニとの趣を以預置候、

一金貳百兩

右は御内用方ニ付、伊東宗益殿より金次郎を、近日井上逸作処迄取ニ可被遣賦之由相伺候ニ付、本行通逸作江引渡置候、

一金百兩

右は近江殿、来ル十八日、

若殿様御縁組御願之通被為濟候ニ付、

近衛様江為御使出立有之筈ニ付、右通御内々被下候ニ

付、御近習番所上之間ニおひて御達申候事、

一金貳百兩

右は早川五郎兵衛より、御取替被仰付被下度内意之趣有之申上候処、御許容被下候ニ付、山田壯右衛門へ引渡し、同人より届可相成旨達置候事、

一金五拾兩

右は守衛方ニ付致出府候上野司事、別て差迫致困窮居候ニ付、右通御取替被下度内意有之候ニ付、豊後殿より申上呉候様承候ニ付達 御内聽候処、御許容被下

候ニ付、直ニ豊後殿江相達伺之書面御同人江相渡ス、

但御金之儀は、三部銀之内より御差出御座候様、豊

後殿申上置候、

一金貳拾兩

右は内実柏百喜入用ニ付、山田壯右衛門御取替筋にて同人江相渡ス、追て返上之賦ニ候、

七月十六日

一三原藤五郎滞崎より仕出にて、大坂去ル十二日仕出、

四日届仕立町便を以、菱刈七左衛門より相廻し、今日

五時相届候、左之通相達候、

一來ル辰年琉人立ニ付ては、関船并伝馬等取締、又は

新造替無之候ては御用弁難致候付、御船奉行より材

木等申出有之、尤向々より調へも有之、就ては関船

杯は琉人立のみにて外御用は無之候ニ付、御費之様

ニも有之候間、外ニ御吟味筋は有之間敷哉と駿河殿

より被申候儀有之、当建之事情間申上呉候様申越候

付、達 御聽候処、御弁も不為在候間、御家老方

江吟味候様 御沙汰ニ付、右書付并三原より參候間

合都て豊後殿江差出、

御沙汰之趣御達申置候事、

一魚油式拾樽差下し候義相達候ニ付、御国元へ可申越との返答参候、

一三原出崎、市來正右衛門・御船手御大工頭福崎仲左衛門・阪元與市・瀧間今太、同人江被召附候旨申遣候処、福崎は未弁義も有之候ニ付、御船奉行より願出趣有之、今太義は御発駕前承知仕候趣も有之候ニ付、兩人は召列候ニ付、外兩人は可遣との返答有之候ニ付達

御聴置候、

一島津淡路守殿より、人参半斤・大黃貳拾斤申請被仰付度、富田六兵衛名前にて於御国元御願有之候由之処、取計出来兼候旨、藤五郎より申越候ニ付奉伺候処、人參は無之大黃は被^{〔符之〕}被遣候て宜との

御沙汰承知仕候ニ付、御品柄之事故豊後殿江大頭申出置候、

一五月廿二日阿部様江被為入、琉球一条ニ付御達旁御承知被遊候条々、御国元江申越候様被仰出置候ニ付、一通りは書写し御手許江差上候様御沙汰ニ付、迫田甚助へ達置候

処、致精書今日伊東正兵衛迄差出候由にて相請取候、

一堀與左衛門去月廿三日山川にて、則御国元同廿八日出立、今日出府ニ候、右便より

御手許御用之鉄炮等、友野市助より差登せ候ニ付、泊御側役江向差出候、御品之儀は御草り取部屋差出候由にて、泊御小納戸山田壯右衛門より御沙汰被為在候ハ、差上可然哉と御草り取を以尋問有之候ニ付、其通取計給候様致返答候事、

一菱刈七左衛門より、去月十五日伊勢・伊賀・大和辺大地震ニ付、倒家又怪我人・死人等有之候書面、御銀主より致到来候由にて相届候、

七月十八日

一琉球人立ニ付、関船其外伝馬使番等相損候ニ付、駿河殿より被申聞候趣ニ付、三原藤五郎滞崎先より申遣、則御家老方江為致吟味候様被仰付、則御沙汰之趣御達申置候処、今日吟味書被差出候ニ付達

御聴候処、同通りにて宜との御沙汰被為在候ニ付、左候ハ、同之通御手当仕候様豊後殿へ相達可申旨申上候処、宜との御事ニ付、右之通御同人江御達し申置候

事、尤被差出候吟味書は、其節御同人江相渡ス、

一堀與左衛門事、致出府此已前も同様にて、何ぞ御褒美
ニても可致哉と 御沙汰ニ付、未右様之承不申候得共、
左様被仰付候ハ、別て難有狩可申筈と申上候処、琉球
付役杯之義も

御沙汰被為在候ニ付、何辺豊後江口合可仕と申上置、
依て

御沙汰之趣、右ニ付ては自分方ニは不申越候得共、書
役迄申越候趣は、困窮ニ付金五拾兩被下相成候由被申
候ニ付、夫ニては些少くは有御座間敷杯と申候処、
押付琉球付役之義も可申越筈ニ付、右へ繰込候ても可
然と承候付、左候ハ、其通申上可置旨御答申置候、
一護送船外ニ壹艘唐へ差越候節、逢海賊諸品物被奪取候
成形、唐江申出候帳一冊、

一清国戦争一条、琉人より申出候書付式通、
一川上式部其外より之問合書通、
一去秋渡唐之接貢船逢海賊候一条之御届、新納太郎左衛
門より申出書通、

一去秋之接貢船致帰国候ニ付、琉人より之御届書書通、
一八重山逗留唐人、去年唐国江致護送海防官江引渡候成

行、流人より御届申上候一件之一冊、

右堀與左衛門便より相届 御前江差上置候処、今十八
日御下ケ被下候ニ付、豊後殿江相渡ス、
一市來傳藏・山口喜三左衛門、来年御留守詰被仰付候間
合書通、右御同人江相渡候、

七月十九日

一琉球江亞墨利加船致到来并同国人溺死いたし候一件、
又条約取交し一件、且右船渡来ニ付長崎并当所御届ケ
之草稿等之諸帳面書付、今朝日拳ニ罷出候節御下ケ被
下候ニ付、早速豊後殿江相渡ス、

但両所へ御届之儀は、追て異船出帆之御届も可有
之候間、其節一緒にて可然との 御沙汰被為在
候、

一大黄并甘草一条ニ付染川より奥四郎へ問合、駿河殿よ
り豊後殿江入 御覽候処、右葉種之儀は、爰許にて御
願立之儀も有之候ニ付、何とか御挨拶も可有之候間、
暫扣置候様ニとの御事ニ付、其趣も豊後殿江申出置候、
一琉球一条之書は今□ニ琉球条約之一冊ハ留置候ニ付、
右ニ付少し 思召ニ不被為叶義有之候ニ付、御取直し

ニテ琉球へ被遣候て、右之處申替ニ相成候様可被仰付との

思召之旨奉伺候、

一琉球人立ニ付、関船等御取繕ニ不相成候ては御用ニ難立段、三原藤五郎より申越、就ては前ニ留置候通りニ付、前条ニ付委細之義は、御家老衆より御問合可有之ニテ候旨、大頭迄藤五郎江致返事、伊東正兵衛へ今日相達置候、

七月廿日

一琉球国、亞墨利加渡来提督江差出候約条書之内、思召ニ不被為叶文言有之、其所を亦渡来之節書替させ候様ニとの御事ニテ、御書取写し御別紙御渡し被下候ニ付、其趣豊後殿江相達、右帳面一冊并御別紙一通御渡申候事、

一飯島之義、天草肥前并肥後之者共より金子借入候ニ付、年々取得候魚も返金の方へ差出候ニ付ては、年々借金致増長、往々浦立候期無之候ニ付、御発駕前三原藤五郎江札方被仰付置候処、右委細ニ帳面取立差上候処、是迄御失念被遊候処、藤五郎より催足申上候由、御

沙汰ニテ式千両程も御取替被仰付候ハ、追々浦立可申哉、表江も吟味為致候様 御沙汰ニ付、右之趣を以豊後殿江申出、右書付御渡申置候事、

一金百三拾兩

右は堀奥左衛門事、琉球へ為守衛方被差越候処、去月廿三日山川へ致入津、同廿八日御国元出立、今度早く致出府別て御都合ニ 思召、依て右之通被下、拙者より引渡し候処御礼申出候、右之趣は豊後殿江も申出置候、

一

町田孫七

右は当務二十年ニ相成、十人賄料之伺、

一

田中半藏

右御広敷番頭御役勤方、是迄之通被仰付度伺、

一

御小姓

一藏方目付助 黒岩政右衛門

右藏方目付欠跡有之右之通被仰付、骨粕方之儀も是迄之通被仰付度伺、

一

瀬尾千代藏

右は炎上之節類焼ニ付、無拠金千両御取替被下度奉訴趣有之、右ニ付願員数被相減、五百兩御取替被仰付度

との伺、

右之通豊後殿より御伺ニ付申上候処、

御許容被為在候ニ付、御朱入れ又は 仰出御同人江相渡ス、

一堀與左衛門へ金子被下方ニ付て之御書付事書相渡ス、

一公義御用大砲船代金賦書、書替替候様ニとの 御沙汰

ニて、先達て御軍役方へ相下ヶ置候処、未出来哉と

御尋ニ付承候処、今漸々算面上立相済申候処之由申出候ニ付、申上置候、

一琉球国江亞墨利加船御届之義は、自ら近々出帆之御届

可有之候間、其節一緒ニ御届相成可然との 御沙汰ニ付、其趣豊後殿へ御達し申置候事、

一麻布へ豊後殿被罷出候義は何ニても宜、尤其節御金も

致持參、最初は是迄段々御世話被成進候御挨拶として被進、左候て跡ニて来秋来々春之間御暇御願之義、御都合宜被成進候様申上、宜との

御沙汰ニ付、其趣豊後殿江御達し申置候事、

一八木玄悦困窮ニ付金子御取替被仰付度、志々目謙受より承候付申上候処、

御許容被為在候間、十五両之願ニは御座候得共、余例

ニも相成申事、先十両計ニても宜御座候半と申上候通、本ノマ

其通被 仰付候ニ付、廿一日志々目謙受江十両引渡候事、

一金六拾両

右は深見壽太郎殿より無扱趣を以銀百枚御取替之義、御趣法御用人江相付被願出、願員數被相減右之通御取

替被仰付候処、舍弟金三郎殿被差越候、請取被申御礼被申出候由、豊後殿并向井氏よりも承候、

一先達て町奉行方より、大黃并甘草一件之義御達有之、

右ニ付御願立被為在候間、其一条御国元江申越候哉と御尋ニ付、伊集院尚五郎江承候処、右は御問合ニ相成

候由承候ニ付、其趣申上置候、

七月廿二日朝御国元より之式日到着ニて、左之通相

届候、

一御書 彦通

右は

近衛様より

太守様江被進候由ニて、得淨院より差上呉候様文通ニて相届候ニ付、則山田壯右衛門を以差上候事、

一異国人より琉球国王などへ相送候笠其外品々、友野市

助より差登セ相届候ニ付、是亦右同人を以差上候、

一厚朴

右も友野氏より為差登候ニ付、御小納戸江引渡候、

七月廿五日京都より参居候飛脚、今日被差返候ニ付

左之通仕出ス、

一御短刀新藤五国
光在銘 一腰

右は今度炎上ニ付皆御焼失ニテ、

主上御心細く被為在候故、御一腰御好被遊候ニ付、壹

尺内外にて在銘之御短刀 御進献被遊候様、尤御拵之

義は

右府様御方ニテ御取計可被遊候間、右等之儀申上越候

様御同所様より被仰付候由ニテ、委曲被申越趣逐一致

承知直ニ達 御聴候処、被遊御承知則御吟味相成候、

然処御存之通、爰元之義火事繁く場所柄之所ニ候哉、

近年は正道成作柄頓と無之、依て本行之御短刀は御伝

来御譲之内ニテ、今度御持越ニ相成居候折柄ニ付、右

之通御内々 御進献被遊度、今日便より御指登せニ相

成候、若又右之作物等 思召ニ不被為叶御模様共ニ候

ハ、何分之儀早々可被申越候、左候ハ、猶又御国元

江被仰遣、篤と御吟味可被遊との御事ニ候間、被奉入

御覧候儀は其通ニテ、御都合向等宜被取計旨御自分江
被仰付候条、此段以御内用申越候、以上、

七月廿五日

豎山武兵衛

原田才輔殿

御内用ニ付六月廿六日付之御文、去ル二日夕刻相届拜

見申上候、先々

上々様方御揃被遊、益

御機嫌克入らせられ候御事恐悦有難狩まいらせ候、左

様御座候へは、

右府様より

太守様江極御内用ニ付、極御急ぎの御用として

御書 御一封

仕立飛脚にて仕出し方、田尻次兵衛へ御達之由ニて相

届、慥ニ相請取申上早速差上奉り候、

外ニ壹通、是は

尾張様江進られ候御書之由仰越され候ニ付、則差上申

候処、其日は丁度

尾張様御実父松平中務大輔様、この御方様江被為入、

外御庭御茶屋にて、御ゆるくと御内話被為在候折か

らニ付、御地より 仰進られ候御用向共、則御うち合

被遊候て、右之御書は

尾張様江御届被進候様、中務大輔様江御頼被遊候由、

御沙汰奉伺候、至極之御都合にて御座候、なをまたい

細之儀は才輔方江申遣候ま、